2026

大学院歯学研究科教授要綱

ASAHI UNIVERSITY GRADUATE SCHOOL OF DENTISTRY

目　　次

１．建学の精神・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１

２．歯学研究科の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１

３．ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、
　　アドミッションポリシー・・・・・・・・・・・・・・　２

４．朝日大学大学院歯学研究科歯学専攻学位論文（博士論文）
　　評価基準・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３

５．学年暦・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　４

６．教育課程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　６

７．各授業科目のシラバス・・・・・・・・・・・・・・・　17

８．履修に際しての準備学習（予習・復習）・
　　注意事項一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 116

９．歯学研究科関係規程・・・・・・・・・・・・・・・・ 130

建学の精神

本学の建学の精神は、国際未来社会を切り開く社会性と創造性、そして、人類普遍の人間的知性に富む人間を育成することにある。

社会性について

人類共存の理念は、今や地球の資源・環境問題をはじめ高齢化社会に伴う労働問題、先進国の国際経済問題、発展途上国の社会経済問題など、解決すべき諸問題に直面している。これらの課題と取り組み、人類の繁栄と幸福を推進するため、国際性と社会性に富む人間、和を重んずる心豊かな人間を育成する。

創造性について

人類は、科学・技術のめざましい発展により、物質的豊かさを獲得したが、この科学・技術の発展はまた、豊かな人間性の涵養に資するものでなくてはならない。

先端的科学の進歩と豊かな人間性との調和を図るため人類は創造的英知を発揮する必要がある。

本学は 、このため自然科学と人文・社会科学、その他芸術との学際的協力により、専門的かつ総合的な教育・研究活動を推進する。

人間的知性について

高度な産業化・情報化の社会を迎えて、人間の生活様式も価値観も激変している。このさい科学・技術の健全な発達を図る反面、技術の独走が警戒される。従って人類普遍の理念としての人間性の発揚を志し、自己を確立し、人権と自由を尊重する調和ある国際未来社会を建設する必要のため、新しい人間的知性の涵養を企図するものである。

歯学研究科の目的

歯学研究科の人材養成に関する目的その他の教育研究上の目的は、歯学分野について、研究者として自立して研究活動を行い、又はその他の高度に専門的な業務に従事するに必要な高度の研究能力及びその基礎となる豊かな学識を養うことを目的とする。

ディプロマ・ポリシー

歯学研究科は、教育目的に基づき、課程修了時に次のいずれかの到達目標を達成することを掲げています。本研究科に必要な年限在学し、所定の単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、学位論文を提出してその審査及び最終試験に合格した者に対して、博士（歯学）の学位を授与することとしています。

① 研究者として自立して研究活動を行うことができる。
② 臨床歯科医師として必要となる最先端の歯科治療技術又は高い専門性を有する分野の知識を身に付けている。

カリキュラム・ポリシー

歯学研究科は、歯学分野について、研究者として自立して研究活動を行い、又はその他の高度に専門的な業務に従事するに必要な高度の研究能力及びその基礎となる豊かな学識を養うことを教育目的としており、これを達成するため、次のとおり教育課程の編成方針を定め、それぞれの目的に応じた授業科目を開設することとしています。

① 自立した研究活動を遂行できる研究者の養成を目指し、生命科学に関し人体の機能や構造、生体材料に関する先端的研究内容について学ぶ授業科目を開設する。
② 高度に専門的な業務に従事するに必要な研究能力を兼ね備えた臨床歯科医師の養成を目指し、最先端の歯科治療や高度に専門性を有する分野について学ぶ授業科目を開設する。

アドミッション・ポリシー

歯学研究科は、歯科医学分野に関する基礎学力又は相当の経歴・経験を有する者で、同分野における幅広い学術研究の推進を目指し、自ら研究に取り組む意欲を有するとともに、将来、研究者や教育者又は高度な臨床能力を身につけた歯科医師としての活躍を志す者を求めています。

朝日大学大学院歯学研究科歯学専攻学位論文（博士論文）評価基準

（趣旨）

本研究科の学位論文評価基準は、学位授与に関する方針（ディプロマ・ポリシー）を踏まえ、次のとおり定めるものとする。

（満たすべき水準）

医学・歯学分野に関して、研究者として自立して研究活動を行いうる高度な研究能力とその基礎となる豊かな学識若しくは職業人として研究者と同等の研究能力と学識に基づく独創的な研究であり、専攻分野の発展に貢献する又は社会的に意義のある内容であること。

（審査の体制）

学位論文の審査は、研究科長が受理した学位論文ごとに研究科委員会の意見を聴いて選出した審査委員３名以上（主査１名、副査２名を含む。）で構成する審査委員会において行う。

なお、審査委員には、本大学の他の研究科担当教員又は学外の適任者を加えることができる。

（評価の項目）

1. 当該研究領域に関する多面的かつ専門的な知識を有し、先行研究を十分に検討したうえで、先駆的又は独創的な発想に基づき研究目的が設定されていること。
2. 当該研究領域の発展に寄与し、人類の健康と福祉への貢献に繋がる研究内容であること。
3. 研究計画、研究方法が幅広い視野に基づき策定されたものであり、高い論証性を備えていること。また、高い倫理観を持ち研究や実験を行っていること。
4. 得られた研究データ・結果を正しく評価し、適正かつ十分な考察がなされたうえで、論理一貫性をもって記述されており、今後の学問的発展性が考慮されていること。

（審査の方法）

審査委員会は、当該学位論文が評価の項目を満たしていることを確認した後、学位論文を中心としてこれに関連ある科目についての口頭又は筆記による最終試験を行い、審査する。

2026年度大学院歯学研究科学年暦

【４月から９月の行事予定】

	日	月	火	水	木	金	土	行事予定	
4月	3/29	3/30	3/31	1	2	3	4	3/27～4/1	定期健康診断
	5	6	7	8	9	10	11	2日	入学式(春季)、新入生オリエンテーション(春季)
	12	13	14	15	16	17	18	3日	前学期授業開始
	19	20	21	22	23	24	25	6日	4年生オリエンテーション
	26	27	28	29	30	…	…	9日	外国語(英語)試験※TOEIC IP
5月	…	…	…	…	…	1	2		
	3	4	5	6	7	8	9		
	10	11	12	13	14	15	16		
	17	18	19	20	21	22	23	21日	外国語(英語)試験※対象者のみ
	24	25	26	27	28	29	30		
	31	…	…	…	…	…	…		
6月	…	1	2	3	4	5	6		
	7	8	9	10	11	12	13		
	14	15	16	17	18	19	20		
	21	22	23	24	25	26	27		
	28	29	30	…	…	…	…		
7月	…	…	…	1	2	3	4		
	5	6	7	8	9	10	11		
	12	13	14	15	16	17	18		
	19	20	21	22	23	24	25	23日	模擬試験(1年生(社会人含む)・長期履修生(1年目))※TOEIC IP
	26	27	28	29	30	31	…	31日	前学期授業終了
8月	…	…	…	…	…	…	1		
	2	3	4	5	6	7	8		
	9	10	11	12	13	14	15		
	16	17	18	19	20	21	22	20日	外国語(英語)試験※対象者のみ
	23	24	25	26	27	28	29	24日	4年生オリエンテーション
	30	31	…	…	…	…	…		
9月	…	…	1	2	3	4	5		
	6	7	8	9	10	11	12		
	13	14	15	16	17	18	19	19日	入学式(秋季)
	20	21	22	23	24	25	26	24日	後学期授業開始、新入生オリエンテーション(秋季)
	27	28	29	30	…	…	…		

※試験については、授業終了後、適宜実施する。

※上図の学年暦（予定）は、学内諸行事等の関係上変更の場合もある。変更がある場合は、事前に掲示等により別途案内する。その他記載のない行事等については、別途案内する。

【10月から３月の行事予定】

	日	月	火	水	木	金	土	行事予定	
10月	…	…	…	…	1	2	3		
	4	5	6	7	8	9	10		
	11	12	13	14	15	16	17		
	18	19	20	21	22	23	24		
	25	26	27	28	29	30	31		
11月	1	2	3	4	5	6	7		
	8	9	10	11	12	13	14		
	15	16	17	18	19	20	21	21～22日	朝日祭
	22	23	24	25	26	27	28		
	29	1	…	…	…	…	…		
12月	…	…	1	2	3	4	5		
	6	7	8	9	10	11	12		
	13	14	15	16	17	18	19		
	20	21	22	23	24	25	26		
	27	28	29	30	31	…	…	28日～	冬季休業期間(1月5日まで)
1月	…	…	…	…	…	1	2		
	3	4	5	6	7	8	9	6日～	授業再開
	10	11	12	13	14	15	16	19日	創立記念日
	17	18	19	20	21	22	23	23日	外国語(英語)試験※対象者のみ
	24	25	26	27	28	29	30		
	31	…	…	…	…	…	…		
2月	…	1	2	3	4	5	6		
	7	8	9	10	11	12	13		
	14	15	16	17	18	19	20	20日	外国語(英語)試験※対象者のみ
	21	22	23	24	25	26	27		
	28	…	…	…	…	…	…		
3月	…	1	2	3	4	5	6		
	7	8	9	10	11	12	13	12日	学位記授与式
	14	15	16	17	18	19	20	12日	後学期授業終了
	21	22	23	24	25	26	27		
	28	29	30	31	…	…	…		

※試験については、授業終了後、適宜実施する。

※上図の学年暦（予定）は、学内諸行事等の関係上変更の場合もある。変更がある場合は、事前に掲示等により別途案内する。その他記載のない行事等については、別途案内する。

教　育　課　程

本研究科は、最近の急速な科学技術の進歩と社会の変化に対応するため、２００８年度にカリキュラムを改組し、新体制で臨んでいる。新カリキュラムでは、基礎、臨床の連携を高めた教育・研究指導等を行うことで、歯科医学における高度・先端的な考え方や臨床技法等について多面的かつ体系的に修得していくことができるようにしている。

また、国内外の著名な講師を招聘して特別講演会を行い新しい分野の知識の吸収に努めるほか、大学院生を積極的にティーチングアシスタントとして採用して教育者等になるためのトレーニングを積むなど、様々な支援を行っている。

教育課程においては、基本編制として２つのコースを設け、高度臨床歯科医及び研究者・教育者等の養成のための教育を行うこととしている。

○高度口腔医療科学

主に高度で専門的な医療を担う臨床歯科医を目指すコースとして、現在の歯科医療の基礎的かつ中心的分野となっている「再生・再建・機能発達・保健・機能回復」に関連した１３の専攻科目により構成している。徹底した臨床教育、研究指導を通じて、高度な臨床知識、技能及び研究マインドの修得を図る。

○口腔生命科学

主に教育者、研究者や優れた研究能力を有する歯科医師等を目指すコースとして、口腔機能学、口腔形態学のほか生体材料学に関連する９の専攻科目により構成している。幅広く深い知識並びに研究遂行能力を修得するための教育研究を行い、大学教員等の教育者や研究者を目指す。

また、高度口腔医療科学においては、専門医や認定医の資格取得のための教育も行う。

研究指導においては、主専攻と副専攻それぞれの指導教員が、連携して研究指導を行い、創造的で優れた研究活動を行うこととしている。

１．学期及び学年等

（１）学年

学年は４月３日に始まり翌年３月３１日に終わる。

（２）学期

学年を前学期と後学期の２学期とする。

※授業期間

前学期：４月３日～８月５日（試験、補講等も当該期間内に実施）

後学期：９月２１日～３月９日（　同　）

授業期間は変更することがありますので、掲示で確認すること。

（３）授業時間

Ⅰ限　　９：００～１０：３０

Ⅱ限　１０：４５～１２：１５

Ⅲ限　１３：１０～１４：４０

Ⅳ限　１４：５５～１６：２５

（４）授業時間割

別に配付する。

（５）休業日

①　日曜日

②　国民の祝日に関する法律に規定する休日

③　春季・夏季・冬季休業

２．講義

（１）講義は、１５時間の授業をもって１単位とする。

（２）講義は、教授要綱と授業時間割表によって進められ、原則として指定された講義室又はゼミ室を使用する。やむを得ず変更するときは、学生用掲示板に掲示するので注意すること。

３．実習

（１）臨床実習及び実習は、４５時間の授業をもって１単位とする。

（２）臨床実習及び実習の際には、指定の白衣を必ず着用すること。

４．履修方法

（１）学生は、学則第１３条別表３に基づき、次の各号のいずれかにより３２単位以上修得しなければならない。

① 高度口腔医療科学

・共通教育科目４単位

・主専攻科目の中から１科目を選択し、講義８単位並びに臨床実習１６単位以上（臨床実習Ⅰ～Ⅷのうち Ⅰ～Ⅳは必修）、計２４単位以上

・副専攻科目１科目４単位

② 口腔生命科学

・共通教育科目４単位

・主専攻科目の中から１科目を選択し、講義１６単位並びに実習８単位、計２４単位

・副専攻科目１科目４単位（臨床実習以外の科目から選択）

（２）副専攻科目の選択に関しては、指導教員の指導を受けなければならない。

（３）年間の履修単位数は、２０単位を上限とする。

（４）学生は、３年次から研究に従事し、論文指導を受けるものとする。

（５）長期履修学生については、前各号の定めにかかわらず、予め許可された長期履修計画書に基づき履修するものとする。

５．長期履修学生

（１）長期にわたる教育課程の履修を希望する者は、指導教員の承認を得て、本研究科への出願時又は入学後２年未満に歯学部事務課へ申し出ること。

（２）長期履修学生が在学中、履修期間の短縮を希望する場合は、指導教員の承認を得て、申し出るものとし、研究科委員会の議を経て、これを許可することができる。この場合の短縮できる期間は、年を単位とする。ただし、課程修了に必要な在学期間は、通算して４年以上でなければならない。

（３）前記により履修期間の短縮を許可された後、再度長期履修に変更することはできない。

６．特別講義等の受講

指導教員の許可を得て、歯学研究科委員会が認めた特別講義、学外研修及び学外実習等に出席した場合は、主専攻科目の各授業科目の受講すべき授業時間数の一部として認定されるので、次のとおり歯学部事務課まで申し出ること。

（１）対象とする講義等

① 特別講義

歯学研究科委員会において大学院認定講義として承認された特別講義

② 学外研修及び学外実習

ア．明海大学・朝日大学歯学部生涯研修部が実施する生涯研修プログラムの内、朝日大学大学院歯学研究科の担当教員が講師を務めるコース。ただし、当該コースに補助業務で参加した場合を除く。

イ．大学院学生の所属する学会が実施する学術大会、研修会及び講習会

ウ．指導教員が認めた学術大会、研修会及び講習会

エ．指導教員が認めた他の大学院等における講義及び実習

オ．指導教員が認めた他の病院及び歯科医院等における課題学習（臨床実習）

（２）申請手続き

前項の講義等を受講した者は、指導教員の承認を得て、申請書に関係書類を添付の上、歯学部事務課に申し出るものとする。

（３）認定する授業時間数

前項により申請があった場合は、歯学研究科長の承認を得て、主専攻科目の各授業科目の受講すべき授業時間数の一部として、次のとおり認定する。

ア．講義科目は、受講すべき授業時間数の３分の１を上限とする。

イ．実習科目及び臨床実習は、受講すべき授業時間数の３分の１を上限とする。

７．出席・欠席

授業に出席の際は、毎回「授業科目出席簿」を持参し、授業終了時に授業科目担当教員から押印を受けること。

８．単位の授与

授業科目を履修した学生に対しては、試験を行った上で、成績評価を行い、単位を与えるものとする。ただし、学修の成果を評価して単位を授与することが適切であると認められる授業科目については、当該成果を評価して単位を与えることができる。

９．試験

試験は、それぞれ授業科目担当教員が受講修了と認めた学生に対し、筆記試験、口頭試験及び研究報告等により行うものとする。

10. 成績評価

（1）履修した授業科目の成績評価は、試験の成績、平素の学修成績等を総合して行うものとする。

（2）成績評価は、１００点満点とし、優（１００～８０点)、良（７９～７０点)、可（６９～６０点)、不可（５９点以下）の４種とし、優、良、可を合格とし、不可を不合格とする。

１１．入学前の既修得単位の認定

2021 年度以降入学者

（1）本研究科に入学する前に大学院（外国の大学院を含む。）において履修した授業科目について修得した単位を、本研究科で修得した単位として 15 単位を超えない範囲で認定することができる。

ただし､算入できる単位数は他の大学院において修得した単位数と合わせて 20 単位を超えないものとする。

（2）単位の認定を申請しようとする者は、履修届の提出期日までに必要な書類を提出すること。

2020 年度以前入学者

（1）本研究科に入学する前に大学院（外国の大学院を含む。）において履修した授業科目について修得した単位を、本研究科で修得した単位として 10 単位を限度として認定することができる。

（2）単位の認定を申請しようとする者は、履修届の提出期日までに必要な書類を提出すること。

１２．他の大学院において修得した単位の認定

2021 年度以降入学者

他の大学院との事前協議の上、当該大学院の授業科目を履修し単位を修得した場合は、15 単位を超えない範囲で本研究科おいて修得した単位として認定することができる。

ただし、算入できる単位数は、入学前の既修得単位数と合わせて 20 単位を超えないものとする。

2020 年度以前入学者

他の大学院との事前協議の上、当該大学院の授業科目を履修し単位を修得した場合は、10 単位を限度として本研究科で修得した単位として認定することができる。

１３．学位の申請

（1）学位の申請に必要な書類及び提出部数は、次の各号に定めるものとする。指導教員の承認を得て歯学研究科委員会が定める期日までに必要書類を提出しなければならない。

① 学位申請書　１通
② 学位論文　　３０通
③ 参考論文　　各３通
④ 論文目録　　３０通
⑤ 論文内容の要旨（２０００字以内）３０通
⑥ 履歴書　　１通

※春季入学者は２０２６年１０月２１日（水）１３時（第１次締切）、又は１１月１１日（水）１３時（第２次締切）、秋季入学者は２０２７年４月９日（金）１３時までに提出し、形式等のチェックを受けた上、最終的な書類等を提出しなければならない。ただし、最終的な書類等の提出期日については、審査日程の都合上、別途指示する。

（2）学位論文は、その内容が歯学研究科発表会で学位請求論文として発表されたもので、かつ２年以内のものを原則とする。学位論文の形式は、製本又は簡易製本し、表紙に題目及び氏名を記載するものとする。

■標準修業年限（４年）

高度口腔医療科学コース

年次	学期	共通教育科目	主専攻		副専攻科目	研究指導
4	後			臨床実習Ⅷ （4単位）		学位論文 作　成
	前			臨床実習Ⅶ （4単位）		
3	後			臨床実習Ⅵ （4単位）		学位論文 作　成
	前			臨床実習Ⅴ （4単位）		
2	後		**○○学Ⅳ （2単位）**	**臨床実習Ⅳ （4単位）**	**○○学Ⅱ （2単位）**	研　究
	前		**○○学Ⅲ （2単位）**	**臨床実習Ⅲ （4単位）**	**○○学Ⅰ （2単位）**	
1	後	**歯科医学研究の基礎Ⅱ （2単位）**	**○○学Ⅱ （2単位）**	**臨床実習Ⅱ （4単位）**		研　究
	前	**歯科医学研究の基礎Ⅰ （2単位）**	**○○学Ⅰ （2単位）**	**臨床実習Ⅰ （4単位）**		
修了要件		4単位	8単位	16単位以上	4単位以上	

口腔生命科学コース

年次	学期	共通教育科目	主専攻		副専攻科目	研究指導
4	後				臨床実習Ⅳ （4単位）	学位論文 作　成
	前				臨床実習Ⅲ （4単位）	
3	後				臨床実習Ⅱ （4単位）	学位論文 作　成
	前				臨床実習Ⅰ （4単位）	
2	後		**○○学Ⅳ （4単位）**	**○○学実習Ⅳ （2単位）**	**○○学Ⅱ （2単位）**	研　究
	前		**○○学Ⅲ （4単位）**	**○○学実習Ⅲ （2単位）**	**○○学Ⅰ （2単位）**	
1	後	**歯科医学研究の基礎Ⅱ （2単位）**	**○○学Ⅱ （4単位）**	**○○学実習Ⅱ （2単位）**		研　究
	前	**歯科医学研究の基礎Ⅰ （2単位）**	**○○学Ⅰ （4単位）**	**○○学実習Ⅰ （2単位）**		
修了要件		4単位	16単位	8単位	4単位以上	

■社会人学生（４年）

春入学　高度口腔医療科学コース

年次	学期	共通教育科目	主専攻		副専攻科目	研究指導
4	後					学位論文作成
	前					
3	後					学位論文作成
	前					
2	後		**○○学Ⅳ（2単位）**	**臨床実習Ⅳ（4単位）**	**○○学Ⅱ（2単位）**	研究
	前		**○○学Ⅲ（2単位）**	**臨床実習Ⅲ（4単位）**	**○○学Ⅰ（2単位）**	
1	後	**歯科医学研究の基礎Ⅱ（2単位）**	**○○学Ⅱ（2単位）**	**臨床実習Ⅱ（4単位）**		研究
	前	**歯科医学研究の基礎Ⅰ（2単位）**	**○○学Ⅰ（2単位）**	**臨床実習Ⅰ（4単位）**		
修了要件		4単位	8単位	16単位以上	4単位以上	

履修方法

１．歯科医学研究の基礎Ⅰ（前学期）
　週1回（木曜日）、5時限目（年間15回×2時間）＝2単位（30時間）

２．歯科医学研究の基礎Ⅱ（後学期）
　週1回（木曜日）、5時限目（年間15回×2時間）＝2単位（30時間）

３．主専攻科目
　講義科目：週1回（木曜日）、6時限目（半期15回×2時間）＝2単位（30時間）
　臨床実習：週2回（木曜日・土曜日）、1・2時限目（半期45回×4時間）＝4単位（180時間）

４．副専攻科目
　講義科目：週1回（水曜日）、5時限目（半期15回×2時間）＝2単位（30時間）

秋入学　高度口腔医療科学コース

年次	学期	共通教育科目	主専攻		副専攻科目	研究指導
4	前					学位論文作成
	後					
3	前					学位論文作成
	後					
2	前		**○○学Ⅲ（2単位）**	**臨床実習Ⅲ（4単位）**	**○○学Ⅰ（2単位）**	研究
	後		**○○学Ⅳ（2単位）**	**臨床実習Ⅳ（4単位）**	**○○学Ⅱ（2単位）**	
1	前	**歯科医学研究の基礎Ⅰ（2単位）**	**○○学Ⅰ（2単位）**	**臨床実習Ⅰ（4単位）**		研究
	後	**歯科医学研究の基礎Ⅱ（2単位）**	**○○学Ⅱ（2単位）**	**臨床実習Ⅱ（4単位）**		
修了要件		4単位	8単位	16単位以上	4単位以上	

履修方法

１．歯科医学研究の基礎Ⅰ（前学期）
　週1回（木曜日）、5時限目（年間15回×2時間）＝2単位（30時間）

２．歯科医学研究の基礎Ⅱ（後学期）
　週1回（木曜日）、5時限目（年間15回×2時間）＝2単位（30時間）

３．主専攻科目
　講義科目：週1回（木曜日）、6時限目（半期15回×2時間）＝2単位（30時間）
　臨床実習：週2回（木曜日・土曜日）、1・2時限目（半期45回×4時間）＝4単位（180時間）

４．副専攻科目
　講義科目：週1回（水曜日）、5時限目（半期15回×2時間）＝2単位（30時間）

■社会人学生（４年）

春入学　口腔生命科学コース

年次	学期	共通教育科目	主専攻		副専攻科目	研究指導
4	後					学位論文作成
	前					
3	後					学位論文作成
	前					
2	後		**○○学Ⅳ（4単位）**	**○○学実習Ⅳ（2単位）**	**○○学Ⅱ（2単位）**	研究
	前		**○○学Ⅲ（4単位）**	**○○学実習Ⅲ（2単位）**	**○○学Ⅰ（2単位）**	
1	後	**歯科医学研究の基礎Ⅱ（2単位）**	**○○学Ⅱ（4単位）**	**○○学実習Ⅱ（2単位）**		研究
	前	**歯科医学研究の基礎Ⅰ（2単位）**	**○○学Ⅰ（4単位）**	**○○学実習Ⅰ（2単位）**		
修了要件		4単位	16単位	8単位	4単位以上	

履修方法

１．歯科医学研究の基礎Ⅰ（前学期）
　週1回（木曜日）、5時限目（年間15回×2時間）＝2単位（30時間）

２．歯科医学研究の基礎Ⅱ（後学期）
　週1回（木曜日）、5時限目（年間15回×2時間）＝2単位（30時間）

３．主専攻科目
　講義科目：週2回（火曜日、水曜日）、5時限目（半期30回×2時間）＝4単位（60時間）
　実習科目：週2回（月曜日・金曜日）、5・6時限目（半期23回×4時間）＝4単位（90時間）

４．副専攻科目
　講義科目：週1回（水曜日）、6時限目（半期15回×2時間）＝2単位（30時間）

秋入学　口腔生命科学コース

年次	学期	共通教育科目	主専攻		副専攻科目	研究指導
4	前					学位論文作成
	後					
3	前					学位論文作成
	後					
2	前		**○○学Ⅲ（4単位）**	**○○学実習Ⅲ（2単位）**	**○○学Ⅰ（2単位）**	研究
	後		**○○学Ⅳ（4単位）**	**○○学実習Ⅳ（2単位）**	**○○学Ⅱ（2単位）**	
1	前	**歯科医学研究の基礎Ⅰ（2単位）**	**○○学Ⅰ（4単位）**	**○○学実習Ⅰ（2単位）**		研究
	後	**歯科医学研究の基礎Ⅱ（2単位）**	**○○学Ⅱ（4単位）**	**○○学実習Ⅱ（2単位）**		
修了要件		4単位	16単位	8単位	4単位以上	

履修方法

１．歯科医学研究の基礎Ⅰ（前学期）
　週1回（木曜日）、5時限目（年間15回×2時間）＝2単位（30時間）

２．歯科医学研究の基礎Ⅱ（後学期）
　週1回（木曜日）、5時限目（年間15回×2時間）＝2単位（30時間）

３．主専攻科目
　講義科目：週2回（火曜日、水曜日）、5時限目（半期30回×2時間）＝4単位（60時間）
　実習科目：週2回（月曜日・金曜日）、5・6時限目（半期23回×4時間）＝4単位（90時間）

４．副専攻科目
　講義科目：週1回（水曜日）、6時限目（半期15回×2時間）＝2単位（30時間）

■長期履修学生（７年）

春入学　高度口腔医療科学コース

<table>
<tr><th>年次</th><th>共通教育科目</th><th colspan="2">主専攻</th><th>副専攻科目</th><th>研究指導</th></tr>
<tr><td>7</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>学位論文
作　成</td></tr>
<tr><td>6</td><td></td><td></td><td rowspan="2">臨床実習Ⅳ（4単位）</td><td></td><td>学位論文
作　成</td></tr>
<tr><td>5</td><td></td><td></td><td rowspan="2">○○学Ⅱ（2単位）</td><td>研　究</td></tr>
<tr><td>4</td><td></td><td>○○学Ⅳ（2単位）</td><td rowspan="2">臨床実習Ⅲ（4単位）</td><td>研　究</td></tr>
<tr><td>3</td><td rowspan="2">歯科医学研究の基礎Ⅱ
（2単位）</td><td>○○学Ⅲ（2単位）</td><td rowspan="2">臨床実習Ⅱ（4単位）</td><td></td><td>研　究</td></tr>
<tr><td>2</td><td rowspan="2">○○学Ⅱ（2単位）</td><td rowspan="2"></td><td>研　究</td></tr>
<tr><td>1</td><td rowspan="2">歯科医学研究の基礎Ⅰ
（2単位）</td><td rowspan="2">臨床実習Ⅰ（4単位）</td><td></td><td>研　究</td></tr>
<tr><td>修了要件</td><td>4単位</td><td>8単位</td><td>16単位以上</td><td>4単位以上</td><td></td></tr>
</table>

履修方法

１．歯科医学研究の基礎Ⅰ（前学期）
　週1回（木曜日）、5時限目（年間15回×2時間）＝2単位（30時間）

２．歯科医学研究の基礎Ⅱ（後学期）
　週1回（木曜日）、5時限目（年間15回×2時間）＝2単位（30時間）

３．主専攻科目
　講義科目：毎月1回（木曜日）、3限目（12回×2時間）＋集中6時間＝2単位（30時間）
　臨床実習：毎月2回（木曜日・土曜日）、1・2時限目（36回×4時間）＋集中36時間＝4単位（180時間）

４．副専攻科目
　講義科目：毎月1回（木曜日）、4限目（12回×2時間）＋集中6時間＝2単位（30時間）

秋入学　高度口腔医療科学コース

<table>
<tr><th>年次</th><th>共通教育科目</th><th colspan="2">主専攻</th><th>副専攻科目</th><th>研究指導</th></tr>
<tr><td>7</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>学位論文
作　成</td></tr>
<tr><td>6</td><td></td><td></td><td rowspan="2">臨床実習Ⅲ（4単位）</td><td></td><td>学位論文
作　成</td></tr>
<tr><td>5</td><td></td><td></td><td rowspan="2">○○学Ⅰ（2単位）</td><td>研　究</td></tr>
<tr><td>4</td><td></td><td>○○学Ⅲ（2単位）</td><td rowspan="2">臨床実習Ⅳ（4単位）</td><td>研　究</td></tr>
<tr><td>3</td><td rowspan="2">歯科医学研究の基礎Ⅰ
（2単位）</td><td>○○学Ⅳ（2単位）</td><td rowspan="2">臨床実習Ⅰ（4単位）</td><td></td><td>研　究</td></tr>
<tr><td>2</td><td rowspan="2">○○学Ⅰ（2単位）</td><td rowspan="2"></td><td>研　究</td></tr>
<tr><td>1</td><td rowspan="2">歯科医学研究の基礎Ⅱ
（2単位）</td><td rowspan="2">臨床実習Ⅱ（4単位）</td><td></td><td>研　究</td></tr>
<tr><td>修了要件</td><td>4単位</td><td>8単位</td><td>16単位以上</td><td>4単位以上</td><td></td></tr>
</table>

履修方法

１．歯科医学研究の基礎Ⅰ（前学期）
　週1回（木曜日）5時限目（年間15回×2時間）＝2単位（30時間）

２．歯科医学研究の基礎Ⅱ（後学期）
　週1回（木曜日）、5時限目（年間15回×2時間）＝2単位（30時間）

３．主専攻科目
　講義科目：毎月1回（木曜日）、3限目（12回×2時間）＋集中6時間＝2単位（30時間）
　臨床実習：毎月2回（木曜日・土曜日）、1・2時限目（36回×4時間）＋集中36時間＝4単位（180時間）

４．副専攻科目
　講義科目：毎月1回（木曜日）、4限目（12回×2時間）＋集中6時間＝2単位（30時間）

■長期履修学生（７年）

春入学　口腔生命科学コース

<table>
<tr><th>年次</th><th>共通教育科目</th><th colspan="2">主専攻</th><th>副専攻科目</th><th>研究指導</th></tr>
<tr><td>7</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>学位論文
作　成</td></tr>
<tr><td>6</td><td></td><td></td><td rowspan="2">○○学実習Ⅳ（2単位）</td><td></td><td>学位論文
作　成</td></tr>
<tr><td>5</td><td></td><td></td><td rowspan="2">○○学Ⅱ（2単位）</td><td>研　究</td></tr>
<tr><td>4</td><td></td><td>○○学Ⅳ（4単位）</td><td rowspan="2">○○学実習Ⅲ（2単位）</td><td>研　究</td></tr>
<tr><td>3</td><td rowspan="2">歯科医学研究の基礎Ⅱ
（2単位）</td><td>○○学Ⅲ（4単位）</td><td rowspan="2">○○学実習Ⅱ（2単位）</td><td>○○学Ⅰ（2単位）</td><td>研　究</td></tr>
<tr><td>2</td><td>○○学Ⅱ（4単位）</td><td></td><td>研　究</td></tr>
<tr><td>1</td><td>歯科医学研究の基礎Ⅰ
（2単位）</td><td>○○学Ⅰ（4単位）</td><td>○○学実習Ⅰ（2単位）</td><td></td><td>研　究</td></tr>
<tr><td>修了要件</td><td>4単位</td><td>16単位</td><td>8単位</td><td>4単位以上</td><td></td></tr>
</table>

履修方法

１．歯科医学研究の基礎Ⅰ（前学期）
　週1回（木曜日）、5時限目（年間15回×2時間）＝2単位（30時間）
２．歯科医学研究の基礎Ⅱ（後学期）
　週1回（木曜日）、5時限目（年間15回×2時間）＝2単位（30時間）
３．主専攻科目
　講義科目：毎月2回（木曜日・土曜日）、3時限目（30回×2時間）＝4単位（60時間）
　実習科目：毎月2回（木曜日・土曜日）、1・2時限目（23回×4時間）＝2単位（90時間）
４．副専攻科目
　講義科目：毎月1回（木曜日）、4限目（15回×2時間）2単位（30時間）

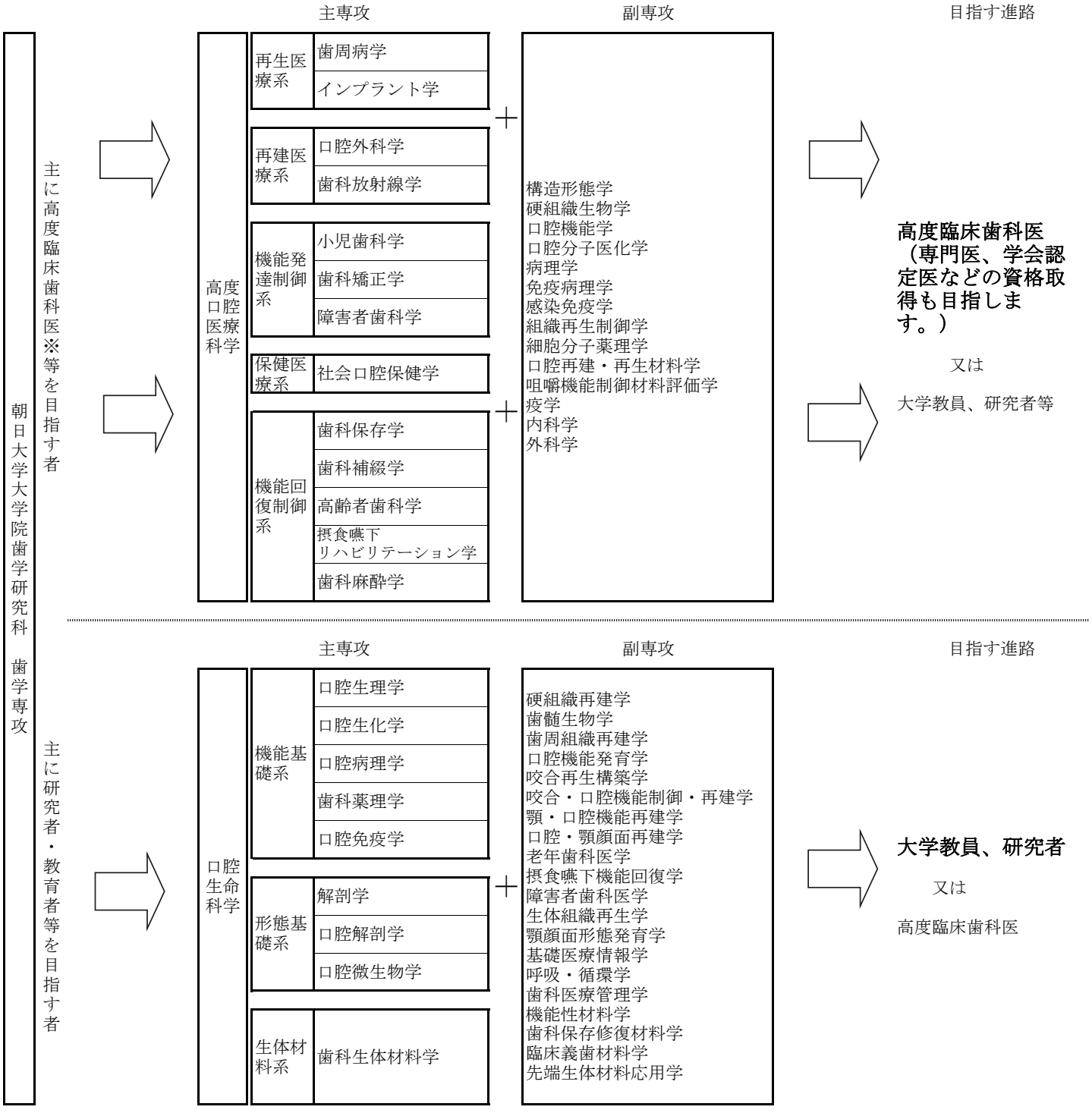
秋入学　口腔生命科学コース

<table>
<tr><th>年次</th><th>共通教育科目</th><th colspan="2">主専攻</th><th>副専攻科目</th><th>研究指導</th></tr>
<tr><td>7</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>学位論文
作　成</td></tr>
<tr><td>6</td><td></td><td></td><td rowspan="2">○○学実習Ⅲ（2単位）</td><td></td><td>学位論文
作　成</td></tr>
<tr><td>5</td><td></td><td></td><td rowspan="2">○○学Ⅰ（2単位）</td><td>研　究</td></tr>
<tr><td>4</td><td></td><td>○○学Ⅲ（4単位）</td><td rowspan="2">○○学実習Ⅳ（2単位）</td><td>○○学Ⅱ（2単位）</td><td>研　究</td></tr>
<tr><td>3</td><td rowspan="2">歯科医学研究の基礎Ⅰ
（2単位）</td><td>○○学Ⅳ（4単位）</td><td rowspan="2">○○学実習Ⅰ（2単位）</td><td></td><td>研　究</td></tr>
<tr><td>2</td><td>○○学Ⅰ（4単位）</td><td></td><td>研　究</td></tr>
<tr><td>1</td><td>歯科医学研究の基礎Ⅱ
（2単位）</td><td>○○学Ⅱ（4単位）</td><td>○○学実習Ⅱ（2単位）</td><td></td><td>研　究</td></tr>
<tr><td>修了要件</td><td>4単位</td><td>16単位</td><td>8単位</td><td>4単位以上</td><td></td></tr>
</table>

履修方法

１．歯科医学研究の基礎Ⅰ（前学期）
　週1回（木曜日）、5時限目（年間15回×2時間）＝2単位（30時間）
２．歯科医学研究の基礎Ⅱ（後学期）
　週1回（木曜日）、5時限目（年間15回×2時間）＝2単位（30時間）
３．主専攻科目
　講義科目：毎月2回（木曜日・土曜日）、3時限目（30回×3時間）＝4単位（60時間）
　実習科目：毎月2回（木曜日・土曜日）、1・2時限目（23回×4時間）＝2単位（90時間）
４．副専攻科目
　講義科目：毎月1回（木曜日）、4限目（15回×2時間）＝2単位（30時間）

教育課程の概要



※高度臨床歯科医＝研究マインド並びに高度の臨床知識・技能を備えた歯科医師

2026年度　朝日大学大学院歯学研究科連携プログラム（CE）

●General Practitioner Course

開催日	コース
2026年5月16日(土)	①歯周病検査と診断
2026年7月4日(土)	②治療計画の立案をどう立てるか？！（ベーシックコース）
2026年9月5日(土)	③歯周治療の第一歩！OHIとSRPを基礎から学ぶ
2026年10月3日(土)	④修復処置の基本手技
2026年11月14日(土)	⑤自信をつける歯周外科入門― 基礎手技を徹底練習
2026年12月12日(土)	⑥インプラント治療ベーシックコース

●Special Needs Course

開催日	コース
2026年5月17日(日)	①予防×デジタルを基盤とする長期管理型歯科
2026年7月26日(日)	②臨床に活かす歯周形成外科
2026年11月8日(日)	③コンポジットレジン修復 Science & Art
2026年12月13日(日)	④歯科医療新時代への対応 ～実践！口腔機能管理と摂食嚥下リハビリテーションの融合～
2026年12月20日(日)	⑤我々、歯科医療従事者が知るべき、睡眠時無呼吸症への対応

※指導教員と協議のうえ、希望するコースを受講できます。（受講料補助有）
※プログラムの詳細については、歯科医師生涯研修部ホームページ（https://www.m-a-univ-ce.com/）を参照してください。

各授業科目のシラバス

主専攻科目

コース名	系名	科目名	指導教員	ページ
高度口腔医療科学 Advanced Oral-Medical Sciences	再生医療 Regenerative Medicine	歯周病学 Periodontology	辰巳 順一 Junichi Tatsumi	19
		インプラント学 Oral Implantology	中本 哲自 Tetsuji Nakamoto	23
	再建医療 Reconstructive Medicine	口腔外科学 Oral and Maxillofacial Surgery	畠山 大二郎 Daijiro Hatakeyama	26
		歯科放射線学 Oral and Maxillofacial Radiology	飯田 幸弘 Yukihiro Iida	30
	機能発達制御 Functional Development Control	小児歯科学 Pediatric Dentistry	齊藤 一誠 Issei Saito	33
		歯科矯正学 Orthodontics	北井 則行 Noriyuki Kitai	36
		障害者歯科学 Dentistry for the Disabled	岩瀬 陽子 Yoko Iwase	39
	保健医療 Health Care	社会口腔保健学 Community Oral Dentistry	友藤 孝明 Takaaki Tomofuji	42
	機能回復制御 Function Recovery Control	歯科保存学 Conservative Dentistry	河野 哲 Satoshi Kawano	45
			奥山 克史 Katsushi Okuyama	48
		歯科補綴学 Prosthodontics	宇野 光乗 Mitsunori Uno	51
			―	54
			―	57
		高齢者歯科学 Gerodontology	―	
		摂食嚥下リハビリテーション学 Dysphagia Rehabilitation	谷口 裕重 Hiroshige Taniguchi	60
		歯科麻酔学 Dental Anesthesiology	半田 俊之 Toshiyuki Handa	64
口腔生命科学 Oral Biosciences	機能基礎 Functional Foundation	口腔生理学 Oral Physiology	硲 哲崇 Noritaka Sako	67
		口腔生化学 Oral Biochemistry	川木 晴美 Harumi Kawaki	70
		口腔病理学 Oral Pathology	永山 元彦 Motohiko Nagayama	73
		歯科薬理学 Dental Pharmacology	佐藤 慶太郎 Keitaro Sato	76
	形態基礎 Morphological Basic	解剖学 Anatomy	薗村 貴弘 Takahiro Sonomura	78
		口腔解剖学 Oral Anatomy	諏訪部 武 Takeshi Suwabe	81
		口腔微生物学 Oral Microbiology	引頭 毅 Takeshi Into	84
	生体材料 Biomaterial	歯科生体材料学 Oral Biomaterials	澤田 智史 Tomofumi Sawada	87

副専攻科目

コース名	科目名	指導教員	ページ
高度口腔医療科学 Advanced Oral-Medical Sciences	構造形態学 Morphological Sciences	薗村 貴弘 Takahiro Sonomura	90
	硬組織生物学 Hard Tissue Biology	諏訪部 武 Takeshi Suwabe	91
	口腔機能学 Oral Function	硲 哲崇 Noritaka Sako	92
	口腔分子医化学 Oral Molecular Medicine	川木 晴美 Harumi Kawaki	93
	病理学 Pathology	永山 元彦 Motohiko Nagayama	94
	免疫病理学 Immunopathology	―	
	感染免疫学 Infection and Immunity	引頭 毅 Takeshi Into	95
	組織再生制御学 Tissue Regeneration Technology	佐藤 慶太郎 Keitaro Sato	96
	細胞分子薬理学 Cellular and Molecular Pharmacology	佐藤 慶太郎 Keitaro Sato	97
	口腔再建・再生材料学 Oral Reconstructive Materials	澤田 智史 Tomofumi Sawada	98
	咀嚼機能制御材料評価学 Bio-functional Materials	澤田 智史 Tomofumi Sawada	99
	疫学 Epidemiology	友藤 孝明 Takaaki Tomofuji	100
	内科学 Internal Medicine	八木 信明 Nobuaki Yagi	101
	外科学 Surgery	郭　泰彦 Yasuhiko Kaku	102
口腔生命科学 Oral Biosciences	硬組織再建学 Hard Tissue Reconstruction	河野 哲 Satoshi Kawano	103
	歯髄生物学 Pulp Biology	―	
	歯周組織再建学 Periodontal Tissue Reconstruction	辰巳 順一 Junichi Tatsumi	105
	口腔機能発育学 Oral Functional Development	齊藤 一誠 Issei Saito	106
	咬合再生構築学 Occulusal Reconstruction	―	107
	咬合・口腔機能制御・再建学 Prosthetic Dentistry for Occlusion and Oral Rehabilitation	宇野 光乗 Mitsunori Uno	108
	顎・口腔機能再建学 Oral and Orthognatic Rehabilitation	―	
	口腔・顎顔面再建学 Oral and Maxillofacial Surgery	―	
	老年歯科医学 Gerodontology	―	
	摂食嚥下機能回復学 Dysphagia and Swallowing Rehabilitation	谷口 裕重 Hiroshige Taniguchi	109
	障害者歯科医学 Dental Medicine for Special Needs	岩瀬 陽子 Yoko Iwase	111
	生体組織再生学 Biological Tissue Regeneration	中本 哲自 Tetsuji Nakamoto	112
	顎顔面形態発育学 Development of Craniofacial Morphology	北井 則行 Noriyuki Kitai	113
	基礎医療情報学 Basic Medical Infomatics	飯田 幸弘 Yukihiro Iida	114
	呼吸・循環学 Pulmonology and Cardiology	―	
	歯科医療管理学 Oral Health Manegement	―	
	機能性材料学 Functional Biomaterial	奥山 克史 Katsushi Okuyama	115
	歯科保存修復材料学 Applied Materials for Operative Dentistry	―	
	臨床義歯材料学 Clinical Denture Materials	―	116
	先端生体材料応用学 Applied Advanced Biomaterials	―	

主　専　攻　科　目

高度口腔医療科学コース

授業科目名　歯周病学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　辰巳順一　他

目　　的

歯周組織の構造を細胞、分子レベルで検討し、その病態や再生時での変化を学習する。歯周治療学およびそれら関連する領域の基本となる実験技術を学習する。また生体応答を応用した治療法の開発の可能性あるいはその理論について理解し、新たな研究の展開方法について情報を得ることを学習する。臨床実習と併せて最新の歯周治療の知識と技能を学習する。

内　　容

歯周組織の構造を組織化学的手法で染色し、炎症での変化や外傷による変化を顕微鏡下で観察する。歯周組織を構成するタンパクや多糖分子について生化学的手法により定量化する。実験動物の取り扱いや研究機器の使用方法、薬物の取り扱いについて体験する。臨床歯周治療学の理論や技術について体験する。論文抄読会を通して、最新の歯周病の知見を学ぶとともに、指導教員と内容の検討を行い、理解を深める。

授業計画

	歯周病学Ⅰ（前学期）	歯周病学Ⅱ（後学期）
１	正常歯周組織	歯周検査
２	歯周組織の微細構造	歯周治療計画の立案
３	歯周組織の病理像	プラークコントロール
４	歯周組織の免疫応答	スケーリング・ルートプレーニング
５	歯周病原菌と宿主応答	切開と縫合
６	免疫担当細胞の機能	オープンフラップキュレッタージ
７	歯周組織の炎症性変化	Widman 改良フラップ手術
８	細胞外マトリックス	歯周組織再生療法・骨移植
９	炎症と骨吸収	歯周組織再生療法・GTR
１０	実験器具の取り扱い	歯周組織再生療法・成長因子
１１	実験器具の取り扱い	根分岐部病変の処置法
１２	細胞培養法	歯内-歯周疾患の対処法
１３	研究論文の読み方と書き方	歯周補綴
１４	研究論文の読み方と書き方	インプラント療法
１５	統計解析法	メインテナンスと SPT

到達目標

・正常および病的歯周組織の病理学的検索を行うことができる。
・細胞間相互の応答を検索するための手技を会得している。
・骨吸収のメカニズムや骨再生について検索する手技を会得している。
・研究論文の読解力、理解力を会得している。
・より専門的な歯周治療を行い、予後良好な状態を維持させることができる。

成績評価基準及び成績評価方法

レポート５０％・試験５０％

実験および実習の遂行と得られた結果に対する考察ができているかを判断基準とする。

テキスト及び参考書

別途指示する。

授業科目名　歯周病学Ⅲ・Ⅳ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　辰巳順一　他

目　　的

歯周組織の構造を細胞、分子、遺伝子レベルで検討し、病的状態や再生時での変化を学習する。歯周治療のための微小因子の検出や観察のための実験技術を習得する。また、生体応答を応用した治療法の開発の可能性あるいはその理論について理解し、新たな研究の展開方法について情報を得ることを学習する。臨床実習と併せて最新の歯周治療の知識と技術を学習する。

内　　容

動物およびヒトの歯周組織を構成する細胞と機能を組織科学的に検出し、損傷や修復を兼備強化で観察する。歯周組織での代謝に関与するタンパクや多糖分子について生化学的手法により定量化する。歯周組織を構成する細胞の代謝を遺伝子レベルで観察する。歯科インプラントと組織の反応について種々の技術を用いて検討する。研究発表のための知識と技術を学ぶ。

授業計画

	歯周病学Ⅲ（前学期）	歯周病学Ⅳ（後学期）
１	動物由来歯周組織の採取と処理法	歯肉溝浸出液中のサイトカイン測定法
２	歯周組織の標本作成法	各種クリニカルパラメータ計測法
３	歯周組織の観察	インプラント周囲骨量の測定法
４	歯肉上皮細胞の培養法	インプラント周囲骨塩量の測定法
５	歯肉線維芽細胞の培養法	インプラント周囲炎症像の観察法
６	歯槽骨由来骨芽細胞の培養法	インプラント周囲炎の診断法
７	破骨細胞の培養法	インプラント周囲炎への対応法
８	細胞外マトリックスの観察法	インプラント体表面の除染法
９	炎症性細胞の解析法	インプラント周囲軟組織形態計測法
１０	リンパ球のクラスター分類計測	インプラントの生存率と成功率
１１	ELISA 法を用いた分析法	歯周組織破壊と咀嚼効率
１２	免疫組織化学観察法	歯周組織破壊程度の計測法
１３	サイトカイン測定法	疫学データの解析法
１４	DNA, RNA 解析法	ポスター製作法
１５	In situ hybridization 法	英語論文作成

到達目標

・歯周組織を組織学的に検索することができる。
・細胞培養技術と機能解析をするための手技を会得している。
・サイトカインの測定法と作用について検索する手技を会得している。
・骨の形成と吸収メカニズムを観察する手技を会得している。
・インプラント周囲炎について広く理解しその病状解析する手技を会得している。
・歯周組織破壊程度と咀嚼機能の障害程度を解析する手技を会得している。
・研究論文やポスター発表する手技を会得している。

成績評価基準及び成績評価方法

レポート５０％・試験５０％

実験および実習の遂行と得られた結果に対する考察ができているかを判断基準とする。

テキスト及び参考書

別途指示する。

授業科目名　臨床実習Ⅰ・Ⅱ（歯周病学）

開講時間数等　各１８０時間（週６コマ）

担当教員　　辰巳順一　他

目　　的

最新の歯周治療の知識と技能を会得するために、臨床実習により患者との良好なコミュニケーションを構築し、治療計画に従い包括的歯周治療を実施し、良好な口腔環境を維持することを目的とする。

実習場所　　歯周病科（朝日大学医科歯科医療センター）

内　　容

医療面接から主訴、既往歴、現病歴を明確にし、適切な検査法を選択する。検査の結果、医療面接から診断および治療計画を立案し、十分なインフォームドコンセントを行う。歯周基本治療を行い、再評価後に治療計画の再検討を行う。歯周疾患の治癒、あるいは病状安定を確認し、メインテナンスや SPT へと移行する。

到達目標

・良好な医療面接および的確な検査に基づく治療計画を立案できる。
・適切な歯周基本治療の内容を遂行できる。
・的確な歯周外科手術および適切な歯周補綴処置が行える。
・長期間安定した歯周組織を得るためのメインテナンスが行える。

成績評価基準及び成績評価方法

レポート５０％・試験５０％

実験および実習の遂行と得られた結果に対する考察ができているかを判断基準とする。

テキスト及び参考書

別途指示する。

授業科目名　臨床実習Ⅲ・Ⅳ（歯周病学）

開講時間数等　各１８０時間（週６コマ）

担当教員　　辰巳順一　他

目　　的

最新の歯周治療に必要なエビデンスと技能を会得するために、臨床実習はもとより、医療面接技法を基礎とした患者との良好なコミュニケーションを構築し、治療計画に従って包括的歯周治療を行い、良好な口腔環境を維持し、これをもって患者の健康寿命を延伸するすることで国民に寄与することができる歯科医師を養成することを目的とする。

実習場所　　歯周病科（朝日大学医科歯科医療センター）

内　　容

医療面接から主訴、既往歴、現病歴を明確にし、適切な検査法を選択する能力を会得する。検査の結果、正確な診断とリスク因子の解明を行い、患者への十分な説明とインフォームドコンセントを行う。必要に応じて、歯周外科処置やインプラント治療を含めた最終補綴処置を行う。歯周組織の病状安定を確認し、メインテナンスや SPT 治療を生涯にわたり行い、よりよい患者の健康管理を実施する。

到達目標

・コンコーダンス等の技法を導入した良好な医療面接および的確な検査に基づく治療計画を立案できる。
・適切な歯周基本治療の内容を遂行できる。
・熟達した歯周外科手術および適正な歯周補綴処置が行える。
・安定した歯周組織を維持することができるメインテナンスが行える。

成績評価基準及び成績評価方法

レポート５０％・試験５０％

実験および実習の遂行と得られた結果に対する考察ができているかを判断基準とする。

テキスト及び参考書

別途指示する。

授業科目名　インプラント学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　中本哲自　他

目　　的

歯科インプラント治療に変遷病理組織、材料、術前診査、治療計画、手術術式、上部構造、術後経過観察を理解し、種類と特性を習得する。

内　　容

インプラント学では、歯科インプラント治療を中心とした歯牙及び口腔領域の組織、器官欠損により発症する機能障害・審美障害を治療する歯科補綴学を学ぶものであり、可撤性義歯学、固定性義歯学、総義歯学と密接な関係を持つ学問である。

本学問の中心となる歯科インプラント治療は、骨結合型インプラントシステムの確立より歯及び歯列の欠損治療に対する一つのオプションとして患者に提供するべき治療法として社会的認知を受けた。そのことにより、歯科補綴学としての教育の中に取り入れられたことで、咀嚼系学問を基礎として、治療に必要な手術手技にともなう顎顔面・口腔外科学系学問及び歯周病学系学問の習得とも大きな関連を持つ内容となっている。

授業計画

	インプラント学Ⅰ（前学期）	インプラント学Ⅱ（後学期）
１	歯科インプラント治療の変遷を含めた総論	上部構造（中間歯欠損補綴・その１）
２	インプラント材料学	上部構造（中間歯欠損補綴・その２）
３	インプラント周囲組織の病理と骨接合の概念	上部構造（中間歯欠損補綴・その３）
４	歯科インプラント治療のための口腔内診査と模型診査	上部構造（中間歯欠損補綴・その４）
５	歯科インプラント治療のための全身診査と評価	上部構造（遊離端欠損補綴・その１）
６	歯科インプラント治療のための局所解剖・偶発事故	上部構造（遊離端欠損補綴・その２）
７	歯科インプラント治療前の歯周病学的診査と治療	上部構造（遊離端欠損補綴・その３）
８	診断用ワックスアップ･診断用テンプレート	上部構造（遊離端欠損補綴・その４）
９	一次手術・その１	上部構造（無歯顎補綴・その１）
１０	一次手術・その２	上部構造（無歯顎補綴・その２）
１１	一次手術アドバンス	上部構造（無歯顎補綴・その３）
１２	二次手術・その１	上部構造（無歯顎補綴・その４）
１３	二次手術・その２	歯科インプラント治療への鎮静法の併用
１４	レーザーの応用	骨造成法アドバンス
１５	骨造成法	歯科インプラント治療におけるメインテナンス

到達目標

歯科インプラント治療に対する知識として、咀嚼系学問を基礎、治療に必要な手術手技にともなう顎顔面・口腔外科学系学問及び歯周病学系学問の習得

成績評価基準及び成績評価方法

授業態度３０％、発表３０％、レポート・試験４０％

講義では、毎回、課題についての議論及び発表をしてもらいます。また、講義終了後は、議論した内容などをさらに分析、整理してレポートをまとめて提出してもらいます。

テキスト及び参考書

「卒後研修医・若い歯科医師のために　歯科インプラント治療ガイドブック」、永原國央　編、クインテッセンス出版株式会社

「全身疾患別にわかる！歯科インプラント治療のリスク度チェックとその対応」、永原國央　編、クインテッセンス出版株式会社

授業科目名　インプラント学Ⅲ・Ⅳ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　中本哲自　他

目　　的

臨床における歯科インプラント治療での問題点を抽出し、基礎実験としてのテーマを考え、その実験手法および論文作成を習得する。

内　　容

インプラント学では、歯科インプラント治療を中心とした歯および口腔領域の組織、器官欠損により発症する機能障害・審美障害を治療する歯科補綴学的治療であり、骨組織、粘膜等の軟組織の増生、形成を主とする再生医療である。

本学問の中心となる歯科インプラント治療を行うにあたりその手技の理解を深め、臨床での問題点を抽出する。特に、骨結合型インプラントシステムでは、骨組織再生というものは治療を行う際に必要となる手技であることから、本治療の基礎を学ぶ。そのことにより、骨組織再生医療での問題点の抽出し、その問題点に対する解決策を実験テーマとした基礎実験計画をたて、結果を生み出すための手法を探り、学ぶ。

授業計画

	インプラント学Ⅲ（前学期）	インプラント学Ⅳ（後学期）
１	インプラント体とオッセオインテグレーションⅠ	骨再生治療総論Ⅰ
２	インプラント体とオッセオインテグレーションⅡ	骨再生治療総論Ⅱ
３	インプラント体と軟組織接合Ⅰ	幹細胞の基礎Ⅰ
４	インプラント体と軟組織接合Ⅱ	幹細胞の基礎Ⅱ
５	インプラント体の表面性状Ⅰ	骨髄細胞の基礎Ⅰ
６	インプラント体の表面性状Ⅱ	骨髄細胞の基礎Ⅱ
７	インプラント体の表面性状Ⅲ	歯髄細胞の基礎Ⅰ
８	ショートインプラント治療の基礎Ⅰ	歯髄細胞の基礎Ⅱ
９	ショートインプラント治療の基礎Ⅱ	骨膜の骨再生への応用Ⅰ
１０	即時埋入治療法Ⅰ	骨膜の骨再生への応用Ⅱ
１１	即時埋入治療法Ⅱ	副甲状腺ホルモンの間歇投与の臨床Ⅰ
１２	即時荷重治療法Ⅰ	副甲状腺ホルモンの間歇投与の臨床Ⅱ
１３	即時荷重治療法Ⅱ	骨補填材の基礎Ⅰ
１４	手術ナビゲーションシステムの応用Ⅰ	骨補填材の基礎Ⅱ
１５	手術ナビゲーションシステムの応用Ⅱ	骨補填材の基礎Ⅲ

到達目標

臨床における歯科インプラント治療での問題点を抽出し、基礎実験としてのテーマを考え、その実験手法および論文作成を習得する。

成績評価基準及び成績評価方法

授業態度３０％、発表３０％、レポート・試験４０％

講義では、毎回、課題についての議論及び発表をしてもらいます。また、講義終了後は、議論した内容などをさらに分析、整理してレポートをまとめて提出してもらいます。

テキスト及び参考書

「BONE Biology, Harvesting, Grafting for Dental Implants. Rationale and Clinical Application」Arun K. Garg 著. Quintessence Publishing Co, Inc.

授業科目名　臨床実習Ⅰ・Ⅱ（インプラント学）

開講時間数等　各１８０時間（週６コマ）

担当教員　　中本哲自　他

目　　的

歯科インプラント治療での診断用テンプレートの製作、インプラント体埋入手術術式、上部構造物製作の手順、上部構造製作、メンテナンスを習得する。

実習場所　　朝日大学医科歯科医療センター　口腔インプラント科

内　　容

インプラント学で学んだ知識を基に、診断用ワックスアップを基にした診断用テンプレートの製作、実際のインプラント体の埋入手術術式と印象採得を始めとする上部構造製作を実際に体験する。

到達目標

歯科インプラント治療での診断用テンプレートの製作ができ、インプラント体埋入手術術式を確実なものにし、上部構造製作の手順を学び上部構造製作ができ、メンテナンスができる。

成績評価基準および成績評価方法

歯科一般治療ができることが最低条件であり、その上に、インプラント学実習での製作物の提出ができることで 60%取得。さらに、口頭試問 20%、試験 20%とする。

授業科目名　臨床実習Ⅲ・Ⅳ（インプラント学）

開講時間数等　各１８０時間（週６コマ）

担当教員　　中本哲自　他

目　　的

歯科インプラント治療骨造成および軟組織のマネージメントを習得する。

実習場所　　朝日大学医科歯科医療センター　口腔インプラント科

内　　容

インプラント学Ⅲ、Ⅳで学んで行く再生医療の基本を学び体験する。

到達目標

インプラント学Ⅲ、Ⅳで学んで行く再生医療の基本を習得する。

成績評価基準及び成績評価方法

臨床の場での再生医療手術記録を作成し問題点を抽出することができることで 60%取得。さらに、口頭試問 20%、試験 20%とする。

授業科目名　口腔外科学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　畠山大二郎、上田順宏　他

目　　的

医療分野としての口腔外科学の位置づけ、理論と実践を身に付けるために、課題をもって大学院の期間に知識、技術、応用力を習得する。

内　　容

口腔外科学Ⅰ・Ⅱでは基本的な口腔外科的疾患の治療、主に外来臨床に即した疾患の診断・治療に関する知識と能力の習得・向上を目指す。

授業計画

	口腔外科学Ⅰ(前学期)	口腔外科学Ⅱ(後学期)
1	口腔外科学　前期概論	口腔外科学　後期概論
2	外傷Ⅰ　軟組織・歯牙損傷の診断と治療	唾液腺疾患Ⅰ　炎症性病変
3	外傷Ⅱ　顎骨骨折の診断と治療	唾液腺疾患Ⅱ　腫瘍性病変
4	炎症Ⅰ　概論	外科小手術各論Ⅰ
5	炎症Ⅱ　診断・治療	外科小手術各論Ⅱ
6	炎症Ⅲ　診断・治療	良性腫瘍Ⅰ　概論・診断
7	嚢胞Ⅰ　顎骨に発生する嚢胞	良性腫瘍Ⅱ　歯原性腫瘍の治療
8	嚢胞Ⅱ　軟組織に発生する嚢胞	良性腫瘍Ⅲ　非歯原性腫瘍の治療
9	口腔粘膜疾患	悪性腫瘍Ⅰ　概論
１０	全身疾患と口腔病変	悪性腫瘍Ⅱ　前癌病変の診断・治療
１１	神経疾患と心因性疾患	悪性腫瘍Ⅲ　上皮系悪性腫瘍の概論
１２	顎関節疾患Ⅰ	悪性腫瘍Ⅳ　口腔癌の診断と治療
１３	顎関節疾患Ⅱ	悪性腫瘍Ⅴ　化学療法と放射線治療
１４	先天性異常と後天性異常Ⅰ　概論	悪性腫瘍Ⅵ　手術手技と口腔再建
１５	先天性異常と後天性異常Ⅱ　裂奇形・顎変形症	口腔外科学Ⅰ・Ⅱ　総括

到達目標

授業科目において、基本的な診断と治療の実践を身に付け、口腔顎顔面領域の疾患に対し、適切な判断及び手技が実践出来るように、口腔外科学全般的にわたって専門的に学ぶ。

成績評価基準及び成績評価方法

成績の評価は、出席点５０％、課題発表３０％、レポート等を２０％と概ね想定し、口腔外科疾患に関する課題について討議し、小論文の形でまとめる。

テキスト及び参考書

口腔外科関連の各学会雑誌に掲載される論文などを中心に、臨床報告や基礎実験などを参考にし、また欧文の教書を進んで活用・熟読するよう指示する。

授業科目名　口腔外科学Ⅲ・Ⅳ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　畠山大二郎、上田順宏　他

目　　的

口腔外科学Ⅰ・Ⅱに続き、口腔外科学Ⅲ・Ⅳでは知識、技術力、応用力をさらに高めるために、講義内容を高度にし、より深く、幅広い知識を得て洞察力、応用力を高めていく。

内　　容

基本的な口腔外科的疾患の診断・治療に関する知識と能力を習得した上で、さらに医療分野の進歩、発展に対応できる人材育成として、難症例の提示、関連する最新の発表などを研究して学位習得のための礎とする。

授業計画

	口腔外科学Ⅲ（前学期）	口腔外科学Ⅳ（後学期）
1	顎顔面外科学　概論	唾液腺疾患Ⅰ　炎症性病変の診断と治療
2	外傷Ⅰ　広範囲合併損傷（歯牙・軟組織）	唾液腺疾患Ⅱ　腫瘍性病変の診断と治療
3	外傷Ⅱ　顎骨骨折（観血的整復の適応と治療）	外科小手術各論Ⅰ
4	炎症Ⅰ　概論	外科小手術各論Ⅱ
5	炎症Ⅱ　膿瘍の治療	良性腫瘍Ⅰ　概論・診断
6	炎症Ⅲ　顎骨骨髄炎の診断と治療	良性腫瘍Ⅱ　歯原性腫瘍の治療
7	嚢胞Ⅰ　顎骨に発生する嚢胞	良性腫瘍Ⅲ　非歯原性腫瘍の治療
8	嚢胞Ⅱ　軟組織に発生する嚢胞	悪性腫瘍Ⅰ　概論
9	口腔粘膜疾患　難治性粘膜疾患	悪性腫瘍Ⅱ　前癌病変の診断・治療
１０	全身疾患と口腔病変　医科との複合疾患	悪性腫瘍Ⅲ　上皮系・非上皮系悪性腫瘍の概論
１１	神経疾患と心因性疾患　難治性神経疾患	悪性腫瘍Ⅳ　口腔癌の診断と治療
１２	顎関節疾患Ⅰ　顎関節症	悪性腫瘍Ⅴ　化学療法と放射線治療
１３	顎関節疾患Ⅱ　その他	悪性腫瘍Ⅵ　手術手技と口腔再建
１４	先天性異常と後天性異常Ⅰ　概論	悪性腫瘍Ⅶ　悪性腫瘍の総括
１５	先天性異常と後天性異常Ⅱ　裂奇形・顎変形症	口腔外科学Ⅲ・Ⅳ　総括

到達目標

提示された症例、疾患あるいは課題について、各疾患の病態から治療まで適切、かつ時に斬新に解決へと導ける実力を身に付けることができるカリキュラム構成とする。

また、講義内の発表、意見交換を積極的に行い、関連学会にも参加し発表出来るよう、基本と実践を行い習得してもらう。

成績評価基準及び成績評価方法

成績の評価は、出席点３０％、課題発表５０％、レポート等を２０％と概ね想定し、口腔外科疾患に関する課題について積極的に論文形式でまとめあげる。

テキスト及び参考書

口腔外科関連の各学会雑誌に掲載される論文などを中心に、臨床報告や基礎実験などを参考にし、また欧文の書籍を進んで活用・熟読するよう指示する。

授業科目名　臨床実習Ⅰ・Ⅱ（口腔外科学）

開講時間数等　各１８０時間（週６コマ）

担当教員　　畠山大二郎、上田順宏　他

目　　的

実際の臨床に積極的に参画することが、口腔外科医としてあるいは専門分野を習熟する者にとっては最も重要なことである。さらに、大学院における口腔外科学の研究者としての人格の形成や、資質の向上を図ることも大切である。

臨床実習を通して多方面の人と関わることで協調を図り、とくに医科との連携と協調は現在の社会の流れとしても重要な点であり、いかに全身疾患の中の口腔疾患であることを理解し、患者本位の治療が実践できるかを習得すること。またすべての面において自己をより高いレベルに引き上げることが大学院における臨床実習の目的である。

そして、臨床経験の中から研究課題の基礎を積み上げ、学位論文をより意義あるものにするかが大切である。

実習場所　　朝日大学医科歯科医療センター、朝日大学病院

内　　容

口腔顎顔面疾患の臨床の場は、外来及び入院（病棟）に大きく分けられるが、基本的な部分においては同じである。指示を受けた患者を担当することにより、問診から始まり、診査、検査、診断、治療、予後の評

価を行う。これらの過程において、指導医から指導を受けながら、全身疾患の中の口腔疾患としての基礎的な知識、治療上の患者管理について習得する。可能な限り自己の判断に基づき治療を進め、治療が完結できるように、また対応できる難症例や難疾患を増やすように努力し実践する。

病棟実習では、終日患者の状態を把握し対応しなければならず、診断と適正な判断及び治療が日々求められるため、患者の詳細な変化も察知し対応できる力量を身に付ける。

また、抗癌剤化学療法の実践や、術後の患者の状態をモニターし把握することと、これらの患者の刻々と変化する状態に対応することが可能となること。

手術実習では、局所麻酔下、静脈内鎮静下、全身麻酔下の手術に参加し、様々な症例の術式を経験することで技術の向上を図る。

外来実習、病棟実習、手術実習を経験し、症例の治療経過を適切に記録し、(社) 日本口腔外科学会認定の「口腔外科専修医」「口腔外科専門医」「口腔外科指導医」取得へとステップアップし、将来は口腔外科指導者として後輩に指導できるよう、必要な知識や技術の基礎・基本を身に付ける。

到達目標

学位の習得を目指す。将来性のある診断能力及び治療技術を身に付ける。口腔顎顔面領域の病態、診断及び治療法について総合的に認知し、口腔外科学に必要な基本的知識や技能を習得し、さらに広範な臨床応用への基本を学ぶ。

成績評価基準及び成績評価方法

臨床実習における評価として、概ね外来での態度、患者に対する態度として３０％、知識・技能として４０％、発表・自己評価レポート３０％とする。

授業科目名　臨床実習Ⅲ・Ⅳ（口腔外科学）

開講時間数等　各１８０時間（週６コマ）

担当教員　　畠山大二郎、上田順宏　他

目　　的

実際の臨床に積極的に参画することが、口腔外科医としてあるいは専門分野を習熟する者にとっては最も重要なことである。さらに、大学院における口腔外科学の研究者としての人格の形成や、資質の向上を図ることも大切である。

臨床実習Ⅰ・Ⅱに引き続き、より高度な全身管理と手術技術の習得を目指す。具体的には口腔癌症例における抗癌剤化学療法時の全身管理、手術への参加、術後の全身管理を通して、総合的に治療と管理が理解できるようになること。

実習場所　　朝日大学医科歯科医療センター、朝日大学病院

内　　容

入院患者管理を主とする。とくに口腔癌症例の治療には、多様な臨床的知識、診断力、判断力、手術の技術力を必要とする要素が多分に含まれる。

治療前の病状あるいは病態の把握、画像診断、全身状態に対する検査、治療計画の立案から予後の予測、それらを基にした患者への説明と同意はどのような臨床の場でも症例でも共通するものであり、癌症例においてはより一層の慎重さや的確さが要求される。この一連の内容と流れを理解し実践することが出来るように自己能力を高める。

また、全身麻酔の研修、緊急時対応のための BLS、ACLS の研修への参加も積極的に行っていく。

高度な臨床症例をより多く経験することで、症例の治療経過を適切に記録、蓄積し、(社) 日本口腔外科学会認定の「口腔外科専修医」「口腔外科専門医」「口腔外科指導医」取得へとステップアップすることを目指し、さらに将来的には口腔外科指導者として後輩に指導できるよう、必要な知識や技術の基礎・基本を身に付ける。

到達目標

学位の習得のため、口腔外科学の基礎・基本の実践。将来性のある診断能力及び治療技術を身に付ける。口腔顎顔面領域の病態、診断及び治療法について総合的に認知し、口腔外科学に必要な基本的知識や技能を習得し、さらに広範な臨床応用への基本を学ぶ。

口腔外科の研究者となるための基礎技能を習得し、まずは（社）日本口腔外科学会認定医制度の「口腔外科専修医」を取得する。

成績評価基準及び成績評価方法

臨床実習における評価として、病棟及び外来での態度・実践として３０％、知識・技能として４０％、発表や自己評価レポートなど３０％。

授業科目名　歯科放射線学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　飯田幸弘　他

目　　的

歯及び口腔顎顔面領域における放射線の歯科医学的利用に関連する、高度で専門的な知識を習得する。

内　　容

目的に到達するために次の 3 つの分野に関する基本的な知識を習得する。(1) 放射線防護に関する知識と基本的な放射線管理技術 (2) 診断に必要な画像診断機器に関する知識 (3) 歯及び口腔顎顔面領域の疾患の画像診断の基礎

授業計画

	歯科放射線学 I(前学期)	歯科放射線学 Ⅱ (後学期)
1	電離放射線の種類、性質及び単位	歯科用デジタル X 線画像システム
2	X 線の発生と性質	頭部 X 線撮影法
3	放射線の生体に対する影響	造影検査
4	放射線被曝と放射線の影響	X 線断層撮影法
5	放射線防護の基本概念	CT
6	歯科医療における放射線防護	MRI
7	X 線検査における品質保証	超音波検査
8	画像検査法の種類と適応	核医学検査
9	X 線画像の形成	X線透視法
１０	X 線投影の原則	正常な解剖構造Ⅰ （口内法）
１１	口内法 X 線撮影	正常な解剖構造 II（パノラマ X 線撮影法）
１２	パノラマ X 線撮影法	正常な解剖構造 III（頭部 X 線撮影法）
１３	X線撮影時の感染対策	正常な解剖構造 IV（CT）
１４	デジタル画像理論	正常な解剖構造 V （MRI）
１５	デジタル X 線画像システムと周辺機器	正常な解剖構造 VI（超音波検査）

到達目標

日本歯科放射線学会認定医・専門医、及び日本摂食・嚥下リハビリテーション学会認定士などを取得する資格に必要な画像検査・診断に関する高度で基本的な知識を習得する。

成績評価基準及び成績評価方法

口頭試問５０％、レポート試験又は学会発表５０％

*単位取得のためには、講義出席は２／３以上出席のこと。

*課題に対するレポート試験は前学期・後学期それぞれに実施するが、学会での発表はレポート試験に代えることができる。

テキスト及び参考書

1　デジタルデンティストリー　医療情報と画像情報超入門、有地榮一郎・勝又明敏　他編集、永末書店　2015 年

2　はじめましょう摂食嚥下障害のＶＦ検査、神部芳則・勝又明敏　編集、学建書院　2014 年

3　歯科放射線マニュアル　第４版、佐野　司　編集、南山堂　2010 年

授業科目名　歯科放射線学Ⅲ・Ⅳ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　飯田幸弘　他

目　　的

歯及び口腔顎顔面領域における放射線の歯科医学的利用に関連する、高度で専門的な知識を習得する。

内　　容

目的に到達するために次の３つの分野に関する基本的な知識を習得する。（１）歯及び口腔顎顔面領域の疾患の画像診断（２）他分野への応用として摂食・嚥下障害、唾液腺疾患・口腔乾燥症、口腔インプラントなどの基本的な知識（３）口腔顎顔面領域の放射線腫瘍学に関する基本的な知識

授業計画

	歯科放射線学 Ⅲ(前学期)	歯科放射線学 Ⅳ（後学期）
１	画像診断総論（画像情報の整理及び分析）	上顎洞の病変
２	X 線写真の基礎 I （検査法の選択）	全身疾患と先天異常の顎口腔画像所見
３	X 線写真の基礎 II（画像所見の表現）	歯と顎骨の成長と障害
４	X 線写真の基礎 III（画像所見の解釈）	顎関節病変と画像検査
５	X 線写真の基礎 IV（読影の進め方）	顎関節症の臨床と診療のガイドライン
６	歯の病変（齲蝕・損傷・歯の異常）	顎関節症画像診断
７	歯周組織病変（根尖病変・歯周疾患）	摂食・嚥下機能とその障害
８	顎骨の病変（X 線透過性・不透過性）	X 線ビデオ嚥下造影法（VF 検査）
９	顎口腔領域の外傷	唾液腺疾患とその画像診断
１０	顎口腔領域の炎症	口腔乾燥症とその画像診断
１１	顎口腔領域の嚢胞	口腔インプラント及びその画像診断
１２	顎口腔領域の良性腫瘍及び類似疾患	顎骨の骨塩量測定
１３	顎口腔領域の悪性腫瘍	顎口腔領域の放射線腫瘍学の基礎
１４	軟組織病変（舌下・顎下・頸部）	口腔癌の放射線治療
１５	リンパ節の病変	放射線治療患者の口腔管理

到達目標

日本歯科放射線学会認定医・専門医、及び日本摂食・嚥下リハビリテーション学会認定士などを取得する資格に必要な画像検査・診断に関する高度で専門的な知識を習得する。

成績評価基準及び成績評価方法

口頭試問５０％、レポート試験又は学会発表５０％

*単位取得のためには、講義出席は２／３以上出席のこと。

*課題に対するレポート試験は前学期・後学期それぞれに実施するが、学会での発表はレポート試験に代えることができる。

テキスト及び参考書

1　デジタルデンティストリー　医療情報と画像情報超入門、有地榮一郎・勝又明敏　他編集、永末書店　2015 年

2　はじめましょう摂食嚥下障害のＶＦ検査、神部芳則・勝又明敏　編集、学建書院　2014 年

3　歯科放射線マニュアル　第４版、佐野　司　編集、南山堂　2010 年

授業科目名　臨床実習Ⅰ・Ⅱ（歯科放射線学）

開講時間数等　各１８０時間（週６コマ）

担当教員　　飯田幸弘　他

目　　的

歯及び口腔顎顔面領域における放射線の歯科医学的利用に関連する、高度で専門的な技術を習得する。

実習場所　　朝日大学医科歯科医療センター、朝日大学病院

内　　容

目的に到達するために次の画像診断実習を行う。

（１）口内法及びパノラマ X 線撮影の技術を習得し、患者に実施できる。（２）歯及び口腔顎顔面領域の画像検査を適切に選択し実施するために、画像検査の特徴、種類、技術及び適応を習得する。（３）画像診断業

務に携わり、歯及び口腔顎顔面領域の画像所見を習得し、読影報告書を作成する。
成績評価基準及び成績評価方法
撮影及び読影報告書の評価１００％
＊単位取得のためには、全出席を原則とする。
＊画像診断業務に従事し、前学期は、歯・口腔顎顔面領域疾患の口内法及びパノラマX線撮影を行い、その他の画像検査法を見学するとともに画像診断を習得する。後学期は、X線撮影とともに画像診断を行い、撮影及び読影報告書を作成する。

授業科目名　臨床実習Ⅲ・Ⅳ（歯科放射線学）
開講時間数等　各１８０時間（週６コマ）
担当教員　　飯田幸弘　他
目　　的
　歯及び口腔顎顔面領域における放射線の歯科医学的利用に関連する、高度で専門的な技術を習得する。
実習場所　　朝日大学医科歯科医療センター、朝日大学病院
内　　容
　目的に到達するために次の画像診断実習を行う。
（1）口内法及びパノラマX線撮影の技術を習得し、患者に実施できる。（2）画像診断業務に携わり、歯及び口腔顎顔面領域の画像所見を習得し、読影報告書を作成する。（3）摂食・嚥下障害、唾液腺疾患・口腔乾燥症、口腔インプラントなどの画像所見を習得し、読影報告書を作成する。
成績評価基準及び成績評価方法
撮影及び読影報告書の評価１００％
＊単位取得のためには、全出席を原則とする。
＊画像診断業務に従事し、前・後学期いずれも、歯・口腔顎顔面領域疾患の口内法及びパノラマX線撮影を行い、その他の画像検査法を見学するとともに画像診断を行い、撮影及び読影報告書を作成する。

授業科目名　小児歯科学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　齊藤一誠　他

目　　的

一般に新生児期、乳児期、幼児期及び思春期を含めて小児期と称される。この時期はヒトのライフサイクルの中で最も活発に成長発達を示す時期であり、歯科的にみても乳児期から思春期にかけての約１０年間に、乳歯萌出、乳歯列完成、吸収、脱落、歯列交換、混合歯列を経て永久歯列へとめまぐるしい成長発達を示す。もちろん、この間に歯と歯列を支える歯槽骨、顎骨、顎関節それらの機能をさせる咀嚼筋、神経並びに口腔の感覚器官、唾液腺の発達に伴って吸啜から咀嚼・嚥下運動更に味覚の発達などがみられる。小児歯科はこのような多様で変化に富んだ発達の旺盛な時期における、予防から治療更に歯科的健康管理といった包括的な歯科医療を扱う臨床科目であり、この学問体系が小児歯科学である。

内　　容

小児の特徴、口腔の発達、歯科医療の特殊性を理解するとともに、齲蝕に対する診断、治療、予後について具体的に説明するとともに相互に議論して理解を深める。

Schedule of lecture

	Pediatric Dentistry Ⅰ（first semester）	Pediatric Dentistry Ⅱ（second semester）
1	Conception of Pediatric Dentist	Dental Caries Prevention 2
2	Systemic Development 1	Oral Hygiene Instruction 1
3	Systemic Development 2	Oral Hygiene Instruction 2
4	Systemic Development 3	Nutrition and Dental Health 1
5	Oral Development 1	Nutrition and Dental Health 2
6	Oral Development 2	Caries Treatment 1
7	Oral Development 3	Caries Treatment 2
8	Oral Development 4	Caries Treatment 3
9	Child Management	Caries Treatment 4
１０	Oral Examination	Caries Treatment 5
１１	Radiographic Diagnosis 1	Caries Treatment 6
１２	Radiographic Diagnosis 2	Pulp Therapy 1
１３	Systemic Management	Pulp Therapy 2
１４	Emergency Treatment	Pulp Therapy 3
１５	Dental Caries Prevention 1	Pulp Therapy 4

到達目標

小児の特徴、口腔の発達、歯科医療の特殊性を理解するとともに、齲蝕に対する診断、治療、予後について理解するとともにその方法が説明できる。

成績評価基準及び成績評価方法

授業態度３０％、発表３０％、レポート・試験４０％

講義では、毎回、課題についての議論及び発表。また、講義終了後は、議論した内容などをさらに分析、整理してレポートをまとめて提出する。

テキスト及び参考書

別途指示する。

授業科目名　小児歯科学Ⅲ・Ⅳ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　齊藤一誠　他

目　　的

一般に新生児期、乳児期、幼児期及び思春期を含めて小児期と称される。この時期はヒトのライフサイクルの中で最も活発に成長発達を示す時期であり、歯科的にみても乳児期から思春期にかけての約１０年間に、乳歯萌出、乳歯列完成、吸収、脱落、歯列交換、混合歯列を経て永久歯列へとめまぐるしい成長発達を示す。もちろん、この間に歯と歯列を支える歯槽骨、顎骨、顎関節それらの機能をさせる咀嚼筋、神経並びに口腔の感覚器官、唾液腺の発達に伴って吸啜から咀嚼・嚥下運動更に味覚の発達などがみられる。小児歯科はこのような多様で変化に富んだ発達の旺盛な時期における、予防から治療更に歯科的健康管理といった包括的な歯科医療を扱う臨床科目であり、この学問体系が小児歯科学である。

内　　容

小児の歯科医療の特殊性を理解するとともに、疾病・異常に対する治療、発育障害を及ぼす疾病・異常の予防、継続的管理について具体的に説明するとともに、治療計画の立案についても相互に議論して理解を深める。

Schedule of lecture

	Pediatric DentistryⅢ（first semester）	Pediatric DentistryⅣ（second semester）
1	Gingivitis and Periodontal Disease 1	Occlusal Guidance 3
2	Gingivitis and Periodontal Disease 2	Occlusal Guidance 4
3	Trauma of Child 1	Occlusal Guidance 5
4	Trauma of Child 2	Systematic disease and oral disease 1
5	Trauma of Child 3	Systematic disease and oral disease 2
6	Minor Oral Surgery 1	Systematic disease and oral disease 3
7	Minor Oral Surgery 2	Practice Management and Health Education1
8	Minor Oral Surgery 3	Practice Management and Health Education2
9	Minor Oral Surgery 4	Contribution of Public Dental Health 1
１０	Dentistry for Handicapped Child 1	Contribution of Public Dental Health 2
１１	Dentistry for Handicapped Child 2	Community Dental Health 1
１２	Space Maintenance 1	Community Dental Health 2
１３	Space Maintenance 2	Set up of Treatment Planning 1
１４	Occlusal Guidance 1	Set up of Treatment Planning 2
１５	Occlusal Guidance 2	Set up of Treatment Planning 3

到達目標

小児の歯科医療の特殊性を理解するとともに、疾病・異常に対する治療、発育障害を及ぼす疾病・異常の予防、継続的管理、治療計画について理解するとともにその方法が説明できる。

成績評価基準及び成績評価方法

授業態度３０％、発表３０％、レポート・試験４０％

講義では、毎回、課題についての議論及び発表。また、講義終了後は、議論した内容などをさらに分析、整理してレポートをまとめて提出する。

テキスト及び参考書

別途指示する。

授業科目名　臨床実習Ⅰ・Ⅱ（小児歯科学）

開講時間数等　各１８０時間（週６コマ）

担当教員　　齊藤一誠　他

目　　的

小児歯科学Ⅰ・Ⅱ　で学習したことを基に、臨床的に診査、診断、治療、予防、管理について理解すると

ともに患者に対応する。
実習場所　　朝日大学医科歯科医療センター（小児歯科診療室）
内　　容
小児の歯科医療の特殊性を理解するとともに、疾病・異常に対する治療、発育障害を及ぼす疾病・異常の予防、継続的管理について理解するため、模型等を用いたシミュレーション実習を行うとともに、指導医が患者を配当し、一口腔単位での治療計画の設定、導入、口腔衛生指導、治療、定期検診を行う。
到達目標
模型等を用いたシミュレーション実習で、コンポジットレジン充填、インレー修復、乳歯既製冠修復、生活歯髄切断、抜髄根管治療ができる。
配当された患者の、一口腔単位での治療計画の設定、導入、口腔衛生指導、治療、定期検診を行うことができる。
成績評価基準及び成績評価方法
シミュレーション実習では指定したケースを完了し、各ケースについて評価する。患者については、配当した指導医が総合的に評価する。

授業科目名　臨床実習Ⅲ・Ⅳ（小児歯科学）
開講時間数等　各１８０時間（週６コマ）
担当教員　　齊藤一誠　他
目　　的
小児歯科学Ⅰ～Ⅳと臨床実習Ⅰ・Ⅱで学習したことを元に、患者に対し診査、診断、治療、予防、管理できるようにする。
実習場所　　朝日大学医科歯科医療センター（小児歯科診療室）
内　　容
小児の歯科医療の特殊性を理解するとともに、疾病・異常に対する治療、発育障害を及ぼす疾病・異常の予防、継続的管理について理解するため、指導医が患者を配当し、一口腔単位での治療計画の設定、導入、口腔衛生指導、治療、定期検診を行う。
到達目標
配当された患者の、一口腔単位での治療計画の設定、導入、口腔衛生指導、治療、定期検診を行うことができる。
成績評価基準及び成績評価方法
配当した指導医が総合的に評価する。

授業科目名　歯科矯正学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　北井則行、留　和香子、竹内　綾

目　　的

合理的な矯正歯科治療を施すために、正常咬合の概念を理解し、不正咬合の原因、種類、診察、検査、診断、治療計画の立案、矯正治療に必要な力学、矯正治療によって起こる生体反応、予防法、混合歯列期及び永久歯列期の矯正歯科治療について理解することを目標とする。

内　　容

頭蓋顎顔面及び歯列の成長・発育を考慮して、正しい機能と良好な顔貌を獲得するために、上下顎関係及び咬合の異常を改善する治療法について、基礎的・臨床的に学ぶ。具体的には、可撤式矯正装置及び固定式矯正装置の作用機序と適応症、矯正診断、治療計画の立案の方法を学び、混合歯列期及び永久歯列期における矯正歯科治療の実践についての知識を習得する。

授業計画

	歯科矯正学Ⅰ（前学期）	歯科矯正学Ⅱ（後学期）
１	アンカレッジ（固定）	頭蓋顎顔面の成長・発育
２	ブラケットの種類	不正咬合の診察、検査
３	アーチワイヤーと補助矯正装置	診断と治療計画の立案①
４	症例の準備（診断資料、治療計画の立案）	診断と治療計画の立案②
５	アーチフォーム（歯列弓の形）	矯正力と顎整形力
６	装置の装着	矯正力による生体反応
７	顎内固定	可撤式矯正装置
８	顎外固定	固定式矯正装置
９	初期の歯の排列	混合歯列期（非骨格性の問題）の矯正治療
１０	犬歯のコントロール	混合歯列期（骨格性の問題）の矯正治療
１１	オーバーバイトのコントロール	永久歯列前期の包括的矯正歯科治療①
１２	オーバージェットのコントロール	永久歯列前期の包括的矯正歯科治療②
１３	大臼歯のコントロール	永久歯列前期の包括的矯正歯科治療③
１４	フィニッシング（仕上げ）	保定
１５	チェアサイドマネージメント	外科的矯正治療

到達目標

不正咬合の原因、種類、診察、検査、診断、治療計画の立案、矯正治療に必要な力学、矯正治療によって起こる生体反応、予防法、混合歯列期の矯正治療、永久歯列期の矯正治療について説明できる。

成績評価基準及び成績評価方法

授業態度、レポート及び試験を総合的に評価する。

講義では、毎回、課題についての議論を行い、講義終了後は、議論した内容などを整理してまとめたレポートを提出する。

テキスト及び参考書

・プロフィトの現代歯科矯正学 第３版　クインテッセンス出版，高田健治（翻訳）
・わかる矯正歯科治療－固定式矯正装置の原理と応用－，高田健治（監訳），MEDIGIT
・スタンダードエッジワイズテクニックシラバス（朝日大学歯学部歯科矯正学分野　編）
・プリアジャステッドタイポドント実習シラバス（朝日大学歯学部歯科矯正学分野　編）

授業科目名　歯科矯正学Ⅲ・Ⅳ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　北井則行、留　和香子、竹内　綾

目　　的

マルチブラケット装置を用いて矯正歯科治療を行う場合に必要な治療メカニクスについて理解し、治療を成功に導くための知識を習得することを目標とする。

内　　容

プリアジャストエッジワイズ装置の歴史と仕様を理解した上で、大臼歯バンドの装着、ダイレクトボンディング、適切なアーチワイヤーの選択、オーバーバイトとオーバージェットのコントロール、固定のコントロール、スペースクローズ、フィニッシング、ディテーリング及び保定などについて学び、過蓋咬合、開咬、Ⅰ級、Ⅱ級及びⅢ級不正咬合症例の治療を行うための知識を習得する。

授業計画

	歯科矯正学Ⅰ（前学期）	歯科矯正学Ⅱ（後学期）
1	プリアジャストエッジワイズ装置の歴史	治療メカニクスの歴史
2	治療メカニクス（新しいアプローチ）	プリアジャストエッジワイズ装置の仕様
3	治療メカニクス（Ⅰ級叢生小臼歯抜去症例）	ブラケットポジショニング
4	治療テクニックの要点	大臼歯バンドの装着
5	治療メカニクス（上下顎前突小臼歯抜去症例）	ダイレクトボンディング
6	レベリング	アーチフォーム
7	アライニング	レベリング
8	過蓋咬合の治療	アライニング
9	オーバージェットのコントロール	固定のコントロール
１０	空隙閉鎖	オーバーバイトコントロール
１１	スライディングメカニクス	Ⅱ級治療
１２	アンカレッジコントロール	Ⅲ級治療
１３	フィニッシング	スペースクローズとスライディングメカニクス
１４	ディテーリング	フィニッシング
１５	非抜歯による治療	装置の撤去と保定

到達目標

過蓋咬合、開咬、Ⅰ級、Ⅱ級及びⅢ級不正咬合症例の診察、検査、診断、治療計画の立案、矯正治療に必要な力学、矯正治療によって起こる生体反応について説明できる。

成績評価基準及び成績評価方法

授業態度と出席５０％、発表と試験５０％

講義では、毎回、課題についての議論を行い、講義終了後は、議論した内容を整理する。

テキスト及び参考書

・プロフィトの現代歯科矯正学 第３版　クインテッセンス出版，高田健治（翻訳）
・プリアジャストエッジワイズ法ー装置とメカニクス，プロスペクト，高田健治，大西 馨（監訳並びに訳）
・プリアジャステッドアプライアンスを用いた矯正治療と歯列のマネージメント，ISIS Medical Media，古賀正忠（監訳）
・システマイズドオルソドンティックメカニクス，エルセビアサイエンス，古賀正忠、氷室利彦（監訳）

授業科目名　臨床実習Ⅰ・Ⅱ（歯科矯正学）

開講時間数等　各１８０時間（週６コマ）

担当教員　　北井則行、留　和香子、竹内　綾

目　　的

スタンダード及びプリアジャストエッジワイズ装置による矯正歯科治療システムの原理を理解し、模型実

習（タイポドントコース）を通じて、アーチワイヤーの効果、治療経過、治療結果のシミュレーションを行う。これにより、本システムを使用する際に考慮すべき点や問題点を明確にし、より適切な歯の移動を行う上での基本的な知識を習得する。患者の抱える問題を論理的に分析したうえで、適切な治療方針を決定する能力を培う。混合歯列期及び永久歯列期における適切な矯正歯科治療を習得する。

実習場所　　朝日大学医科歯科医療センター　矯正歯科

内　　容

スタンダードエッジワイズ装置によるタイポドントコースを通じて、ファーストオーダーベンド、セカンドオーダーベンド、サードオーダーベンド及びループのベンディングを体得し、これらのメカニクスを理解する。そして、アーチワイヤーにより、レベリング、固定準備（アンカレッジプレパレーション）、犬歯の移動、抜歯空隙の閉鎖がどのようになされるか、さらにはゴムの効果、ヘッドギアの効果なども習得する。また、インアウトやティップ、トルクがプログラムされたブラケットから成るプリアジャストエッジワイズ装置によるタイポドントコースを通じて、プリアジャストエッジワイズ装置による矯正歯科治療の治療体系を習得し、付加的なアーチワイヤーの屈曲方法、平均値的な歯の移動ではカバーしきれない問題を解決する具体的な技術を理解して、実践することを目指す。混合歯列期、永久歯列前期及び成人の矯正歯科治療を担当し、治療計画の立案、治療経過、治療結果及びその予後についての評価を受ける。

到達目標

矯正歯科治療で用いられる器械・器具の用途を説明できる。

矯正歯科治療に関する手技を適切に行うことができる。

スタンダードエッジワイズ装置による治療体系を説明できる。

プリアジャストエッジワイズ装置による治療体系を説明できる。

混合歯列期及び永久歯列期に矯正歯科治療を希望した患者に対して、治療計画の立案を行い、適切な治療を施すことができる。

成績評価基準及び成績評価方法

実習態度、レポート及び試験を総合的に評価する。

担当医として治療を行った症例の治療結果を評価する。

授業科目名　臨床実習Ⅲ・Ⅳ（歯科矯正学）

開講時間数等　各１８０時間（週６コマ）

担当教員　　北井則行、留　和香子、竹内　綾

目　　的

過蓋咬合、開咬、Ⅰ級、Ⅱ級及びⅢ級不正咬合症例について、患者の抱える問題を論理的に分析した上で、適切な治療方針を決定する能力を培う。プリアジャストエッジワイズ装置による矯正歯科治療システムの原理を理解し、臨床実習（担当患者の治療）を通じて、アーチワイヤーの効果を習得し、治療経過に応じて装置の調整を行う。また、治療結果を評価することにより、本システムを使用する際に考慮すべき点や問題点を明確にし、より適切な歯の移動を行う上での基本的な手技を習得する。

実習場所　　朝日大学医科歯科医療センター　矯正歯科

内　　容

プリアジャストエッジワイズ装置による矯正歯科治療の治療体系を習得し、平均値的な歯の移動ではカバーしきれない問題を解決する具体的な技術を理解して、実践することを目指す。混合歯列期、永久歯列期の過蓋咬合、開咬、Ⅰ級、Ⅱ級及びⅢ級不正咬合症例の矯正歯科治療を担当し、治療計画の立案、治療経過、治療結果及びその予後についての評価を受ける。

到達目標

過蓋咬合、開咬、Ⅰ級、Ⅱ級及びⅢ級不正咬合症例の治療計画の立案を行い、適切な治療を施すことができる。

成績評価基準及び成績評価方法

授業態度と出席５０％、発表と試験５０％

担当医として治療を行った症例の治療結果を評価する。

授業科目名　障害者歯科学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　岩瀬陽子

目　　的

障害者歯科の専門性や特異性について、歯科医学以外の障害と障害者に関する理解と知識が必要である。福祉や障害者施策及び障害者のおかれた環境などを理解したうえで、さまざまな障害への知識を十分に把握し、それらの障害に関わる歯科的問題点について理解することを目的とする。

内　　容

さまざまな障害のある人への歯科治療や予防を行うために、総論としてスペシャルニーズ、QOL 及びノーマライゼーションなどの社会福祉的概念を学んだうえで、各論としてさまざまな障害の定義、疫学、病態・臨床症状及び歯科的問題点などの知識を習得する。

授業計画

	障害者歯科学Ⅰ（前学期）	障害者歯科学Ⅱ（後学期）
1	歯科医療におけるスペシャルニーズ	肢体不自由の概要
2	QOL とノーマライゼーション	脳性麻痺と歯科的問題
3	障害者における社会的および心理的問題	二分脊髄と歯科的問題
4	障害者に対する歯科医療と倫理	筋ジストロフィーと歯科的問題
5	障害者歯科の歴史と現状	脊髄損傷と歯科的問題
6	スペシャルニーズと社会保障	関節リウマチと歯科的問題
7	地域における障害者歯科	パーキンソン病と歯科的問題
8	チーム医療の役割と関連職種	脳血管障害後遺症と歯科的問題
9	感覚と感覚障害の概要	認知症と歯科的問題
１０	視覚障害と歯科的問題	脊髄小脳変性症、ALS と歯科的問題
１１	聴覚障害と歯科的問題	てんかんと歯科的問題
１２	発達と障害への見方	重症心身障害児・者と歯科的問題
１３	精神遅滞と歯科的問題	難病（特定疾患）と歯科的問題
１４	自閉性障害と歯科的問題	精神障害（統合失調症、うつ病等）と歯科的問題
１５	学習障害、ADHD と歯科的問題	障害に関連する内科的疾患と歯科的問題

到達目標

障害者の福祉施策やノーマライゼーションなどの考え方、感覚障害、発達障害、脳性麻痺や筋ジストロフィーなどの肢体不自由、高齢障害者の抱えるさまざまな障害や精神障害などのそれぞれの障害とその歯科的問題点について説明できる。

成績評価基準及び成績評価方法

授業態度、レポート及び試験を総合的に評価する。

講義では毎回、課題についての議論を行う。講義終了後は議論した内容などを整理して、まとめたレポートを提出する。

テキスト及び参考書

・ スペシャルニーズデンティストリー　障害者歯科第２版（医歯薬出版）

授業科目名　障害者歯科学Ⅲ・Ⅳ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　岩瀬陽子

目　　的

障害者歯科医療を実践するにあたり、さまざまな障害に対する行動調整法の理解と応用が基本になる。それらを踏まえたうえで、保存治療、歯周治療及び補綴治療などの歯科診療への注意点について理解することを目的とする。さらに、重度障害児・者や要介護高齢者に対して口腔ケアを中心とした口腔保健衛生の理解も重要になり、障害者への言語機能及び摂食嚥下機能を含めた口腔リハビリテーションについて理解するこ

とを目的とする。

内　　容

さまざまな障害への行動調整法やそれらに付随した障害者の歯科診療の注意点、障害者への口腔保健衛生（口腔ケアなど）に関する知識、障害者の音声言語障害とその診断や対処法、障害者の摂食嚥下障害とその診断や対処法及びリハビリテーションに関する知識を習得する。

授業計画

	障害者歯科学Ⅲ（前学期）	障害者歯科学Ⅳ（後学期）
1	行動調整法の概要	音声言語障害の概要
2	コミュニケーション法	構音に必要な口腔機能と構音障害
3	行動療法	音声言語障害の検査法
4	薬物的行動調整	音声言語障害患者に対する歯科的対応
5	体動の調整法	摂食嚥下障害と歯科医療
6	障害者の歯髄処置	摂食嚥下障害の概要
7	障害者の歯周治療	発達期の摂食嚥下障害
8	障害者の補綴治療	中途障害の摂食嚥下障害
9	障害者の矯正歯科治療	摂食嚥下リハビリテーション
１０	障害者の口腔外科的対応	各種の口腔補装具
１１	要介護高齢者の特徴と歯科的問題	咀嚼機能の障害
１２	口腔ケアの概要	誤嚥、窒息の予防
１３	障害者における口腔疾患の予防法	リスク評価と安全管理の概要
１４	障害者への健康支援	医療安全管理体制
１５	ターミナルケアと歯科医療	合併疾患、常用薬と安全管理

到達目標

さまざまな行動調整法、障害者に対する歯科診療の具体的方策と注意点、障害者の口腔ケア、障害者の音声言語障害と摂食嚥下障害への診断とリハビリテーションについて説明できる。

成績評価基準及び成績評価方法

授業態度、レポート及び試験を総合的に評価する。

講義では、毎回、課題についての議論を行い、講義終了後は、議論した内容などを整理してまとめたレポートを提出する。

テキスト及び参考書

・ スペシャルニーズデンティストリー　障害者歯科第２版（医歯薬出版）
・ 新版　歯学生のための摂食嚥下リハビリテーション学（医歯薬出版）

授業科目名　臨床実習Ⅰ・Ⅱ（障害者歯科学）

開講時間数等　各１８０時間（週６コマ）

担当教員　　岩瀬陽子

目　　的

障害者歯科学Ⅰ～Ⅳまでの講義を通じて、さまざまな障害に対する知識を理解したうえで、実際の障害者への対応法と歯科治療を習得する。

実習場所　　朝日大学医科歯科医療センター

内　　容

実際の臨床の場において、視覚障害者、聴覚障害者、精神遅滞者、自閉性障害者、脳性麻痺者、二分脊髄者、筋ジストロフィー者、脊髄損傷者、関節リウマチ者、パーキンソン病者、脳血管障害後遺症者、認知症者、脊髄小脳変性者やALS者、てんかんや重症心身障害児・者、難病者、精神障害者及びさまざまな内科疾患を合併している患者などに対して、その障害や医学的管理への対応と歯科診療上の注意点などを理解したうえで、障害者歯科診療の実践を目指す。また、障害者歯科診療にあたってのリスク評価と医療安全体制に

ついても実習を行い、従前に医療安全についての理解と実践についての評価も行う。具体的にはそれぞれの障害に対する行動調整法の検討、立案及び実践を行い、その内容についての評価を受ける。

到達目標

・さまざまな障害に対する歯科的問題点と歯科診療上の注意点について説明できる。
・さまざまな行動調整法の具体的な内容と応用について説明できる。
・障害者歯科診療上の医療安全について説明できる。
・障害者の立場に配慮した治療計画が立案できる。
・上記の目標を踏まえて、適切な障害者歯科診療を実践することができる。

成績評価基準及び成績評価方法

実習態度、レポート及び試験を総合的に評価する。
担当医として診療を行った症例の治療結果を評価する。

授業科目名　臨床実習Ⅲ・Ⅳ（障害者歯科学）

開講時間数等　各１８０時間（週６コマ）

担当教員　　岩瀬陽子

目　　的

障害者歯科学Ⅰ～Ⅳまでの講義を通じて、障害者への口腔保健衛生（口腔ケア）、音声言語障害及び摂食嚥下障害に対する知識と理解をもって、実際の障害者への対応法とさまざまな口腔リハビリテーションの技能を習得する。さらに障害者の在宅環境に対する訪問歯科診療への対応について習得する。障害の重度・複雑化に伴い、さまざまな医療職や福祉職との医療連携を構築することについても習得する。

実習場所　　朝日大学医科歯科医療センター

内　　容

重度障害児・者及び要介護高齢者に対する口腔ケアは誤嚥性肺炎などによる全身状態への影響も含めて重要な分野であり、さまざまな障害に対する口腔ケアの知識を整理して、いろんな環境下（病院、在宅訪問診療など）においても実践できることを目指す。また、口腔機能の主要な障害である音声言語障害及び摂食嚥下障害に対する検査、評価法および診断についての知識を整理して、実際の障害者への音声言語治療の方法や摂食嚥下障害者へのさまざまな口腔リハビリテーションの導入及び実践を行い、その内容についての評価を受ける。また、このような口腔ケアおよび口腔リハビリテーションの技能の実践にあたっても、他の職種との医療連携をはかりながら、より安全で質の高い医療を遂行するための計画及び問題点について評価を受ける。

到達目標

・さまざまな障害に対する口腔ケアの必要性と技能について説明できる。
・音声言語障害に対する検査、評価法およびその対応について説明できる。
・摂食嚥下障害に対する検査、評価法およびその対応について説明できる。
・さまざまな環境下での口腔ケアの立案を行い、適切に口腔ケアが実践できる。
・音声言語障害者に対する検査および評価法により診断を行ったうえで、適切な治療法が実践できる。
・摂食嚥下障害者に対する検査および評価法により診断を行ったうえで、適切なリハビリテーションが実践できる。
・上記の口腔ケア及び口腔リハビリテーションの技能を実践するにあたり、適切な医療連携をはかることができる。

成績評価基準及び成績評価方法

実習態度、レポート及び試験を総合的に評価する。
担当医として診療を行った症例の治療結果を評価する。

授業科目名　社会口腔保健学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　友藤孝明、東　哲司

目　　的

すべてのライフステージにおける歯･口腔の健康の保持､増進に必要な知識と技能を有する専門医を育成する。

内　　容

妊婦（妊産婦）、小児、成人、高齢者、障害者・要介護者等の歯・口腔の健康保持・増進に関するリスクの評価、予防と口腔ケアの計画立案、実施、評価、改善ができる知識や技能を修得する。

授業計画

	社会口腔保健学Ⅰ（前学期）	社会口腔保健学Ⅱ（後学期）
1	Health-oriented concept　とは	歯科医療を取り巻く社会的状況
2	齲蝕のリスク診断	地域歯科保健とヘルスプロモーション
3	齲蝕の予防プログラムの作成	母子歯科保健１
4	歯周疾患のリスク診断	母子歯科保健２
5	歯周疾患予防プログラムの作成	学校歯科保健１
6	歯・口腔の機能評価	学校歯科保健２
7	唾液の機能評価	成人歯科保健１
8	食事指導	成人歯科保健２
9	禁煙支援・禁煙指導	高齢者歯科保健１
１０	プラークコントロール	高齢者歯科保健２
１１	フッ化物の応用	国際保健１
１２	抗菌剤の応用	国際保健２
１３	口臭予防	予防歯科臨床１
１４	定期健康診断１	予防歯科臨床２
１５	定期健康診断２	予防歯科臨床３

到達目標

専門性の高い研究者及び指導者となることを目標とする。日本口腔衛生学会の認定医の資格取得を目指すための高度な知識と技能を修得する。

成績評価基準及び成績評価方法

発表４０%、レポート・試験６０%

自らの考えをまとめ、各講義後にレポートを作成し、発表する形式をとる。

テキスト及び参考書

講義時に適時指示する。

授業科目名　社会口腔保健学Ⅲ・Ⅳ

開講時間数　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　友藤孝明、東　哲司

目　　的

すべてのライフステージにおける歯・口腔の健康の保持、増進に必要な知識と技能を有する専門医、教育者を育成する。

内　　容

地域社会における健康づくりと歯科保健の向上に寄与する臨床活動・保健活動の計画立案、実施、評価、改善ができる知識や技能を修得する。

授業計画

	社会口腔保健学Ⅲ（前学期）	社会口腔保健学Ⅳ（後学期）
1	疫学と EBM	歯科医療の国民からのニーズ
2	疫学研究方法の概要	歯科医療提供者のデマンド
3	情報リテラシー１	口腔機能のリハビリテーション
4	情報リテラシー２	障害者に対する歯科予防対策
5	横断研究１	顎関節症の診断と予防
6	横断研究２	口腔癌の予防
7	患者対照研究１	口腔外傷の予防
8	患者対照研究２	色素沈着の予防と処置
9	コホート研究１	齲蝕ハイリスク児（者）とその対策
１０	コホート研究２	歯科医療機関の安全・環境管理
１１	クロスオーバー研究	地域における歯科保健活動１
１２	介入研究１	地域における歯科保健活動２
１３	介入研究２	地域における歯科保健活動３
１４	統計解析１	地域における歯科保健活動４
１５	統計解析２	地域における歯科保健活動５

到達目標

専門性の高い研究者及び指導者となることを目標とする。日本口腔衛生学会の認定医の資格取得を目指すための高度な知識と技能を修得する。

成績評価基準及び成績評価方法

発表４０％、レポート・試験６０％

自らの考えをまとめ、各講義後にレポートを作成し、発表する形式をとる。

テキスト及び参考書

講義時に適時指示する。

授業科目名　臨床実習Ⅰ・Ⅱ（社会口腔保健学）

開講時間数等　各１８０時間（週６コマ）

担当教員　　友藤孝明、東　哲司

目　　的

地域社会における歯科保健活動に関する専門知識と専門技能の修得を目的とする。

実習場所　　朝日大学病院　総合健診センター　他

到達目標

地域歯科保健センターにて、妊産婦歯科健康診査及び保健指導や１歳６か月児、３歳児の歯科健康診査及び保健指導、フッ化物塗布を実践し、技術を習得する。地域の幼稚園、小学校、中学校等での歯科健康診断及び予防処置、保健指導を実践し集団に対する歯科保健管理の技術を修得する。

成績評価基準及び成績評価方法

フィールドでの清潔不潔の概念と行動の観察、保健、教育の指導内容のレポート評価、予防処置の技術及び態度評価。それぞれを１００点満点とし７０点以上を合格とする。

授業科目名　臨床実習Ⅲ・Ⅳ（社会口腔保健学）

開講時間数等　各１８０時間（週６コマ）

担当教員　　友藤孝明、東　哲司

目　　的

地域社会で予防歯科臨床を実践するための専門知識と専門技術の修得を目的とする。

実習場所　　朝日大学病院　総合健診センター　他

到達目標

地域支援病院等における歯科保健指導、歯科保健教育、および予防歯科臨床を実践する。

成績評価基準及び成績評価方法

病院での清潔不潔の概念と行動の観察、保健、教育の指導内容のレポート評価、保健指導時のコミュニケーション能力及び態度評価、それぞれを１００点満点とし７０点以上を合格とする。

授業科目名　歯科保存学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　河野　哲

目　　的

卒前に学習した歯内療法学の知識をさらに発展させ、現在社会の新たなニーズにこたえられる先進的、独創的な教育者、研究者を養成し、さらに臨床においては専門分野の知識と技術を有する保存治療専門医を育成するために、最新の歯内療法を学ぶ。

内　　容

高齢化・疾病構造の多様化に伴い老齢者・有病者の治療頻度は増加する傾向にあり、より安全・安心な歯科治療法の開発が求められている。そのため効率的、確実な治療、長期間にわたる歯の保存は重要な課題となる。そこで本開講授業では①難治性根尖部病変に対する保存的組織再生療法の研究・開発に関して、再生のメカニズム、材料、治療技術について学ぶ。また②亀裂歯や破折歯に対する再植法、接着法、接着材料に関する基礎的知識を学ぶ。さらに確実な治療をめざして③歯科用実体顕微鏡を用いた治療法の確立する目的で、歯科用実体顕微鏡を用いた治療技術について学ぶ。④治療時間の短縮には超音波の利用は不可欠であるため、これを用いた治療法と治療技術について学ぶ。

授業計画

	歯科保存学Ⅰ（前学期）	歯科保存学Ⅱ（後学期）
1	根管内器具の特性	歯髄・歯周組織の再生
2	根管拡大法の種類	生体材料を用いた歯髄再生
3	効率的な根管拡大	生体材料の根管充填剤への応用
4	根管の拡大と根管形態の変化	生体材料の根尖外科への応用
5	効率的な根管清掃法	生体材料を用いた歯周組織再生
6	強電解酸性水の応用	歯内・歯周疾患への対応
7	根管清掃と根管内細菌の動向	亀裂・破折歯の再植
8	超音波を用いた根管清掃	再植歯の生着機構
9	超音波による効率的治療	歯科用実体顕微鏡を用いた歯内治療
１０	根管拡大と偶発症	歯科用実体顕微鏡の使用方法
１１	根管充填剤の効率的除去法	マイクロサージェリーに使用する器具
１２	難治性根尖性歯周炎の治療①洗浄法	コーンビーム CT の読影と診断
１３	難治性根尖性歯周炎の治療②組織再生	歯科用実体顕微鏡とコーンビーム CT を用いた根尖外科
１４	実験器具・動物の取り扱い	歯内療法後の修復
１５	論文の読み方と書き方	歯根破折を防止する修復

到達目標

・専門分野の研究論文を理解する。
・研究論文を執筆する。
・歯内療法器具の特性を説明する。
・効率的な根管治療法を説明する。
・組織再生のメカニズムを理解する。
・組織再生のメカニズムを解明するための実験技法を説明する。
・根尖組織の治癒に関する実験手技を実践する。
・歯科用実体顕微鏡の使用法を理解する。
・コーンビーム CT 画像を読影する。
・再植歯の治癒について説明する。

・破折歯の接着技法について理解する。

成績評価基準及び成績評価方法

授業態度３０％、発表３０％、レポート・試験４０％

講義では、毎回、課題についての議論及び発表をしてもらいます。また、講義終了後は、議論した内容などをさらに分析、整理してレポートをまとめて提出してもらいます。

テキスト及び参考書

別途指示する。

授業科目名　歯科保存学Ⅲ・Ⅳ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　河野　哲

目　　的

歯科保存学Ⅰ，Ⅱで学んだ内容を実際の臨床に応用できるように発展させる。また、他の領域にまたがる複合疾患についてその発症原因、症状、診断、治療法について学ぶ。

内　　容

歯髄並びに根尖歯周組織の再生のメカニズムについて、免疫組織化学的手法を用いて解明し、さらにこれを臨床応用するために材料並びに術式を開発する。疾病構造の多様化に伴い、不可解な疼痛を訴えて来院する患者は急増している。ここでは、歯周疾患、顎関節症、神経痛など歯痛として総括される歯原性、非歯原性疼痛についてその診断法を学ぶ。

授業計画

	歯科保存学Ⅲ(前学期)	歯科保存学Ⅳ(後学期)
1	根尖病変発症のメカニズム	有病者の歯科治療
2	歯髄疾患と免疫	高齢者の歯科治療
3	根尖性歯周疾患と免疫	リスク患者の全身管理
4	免疫組織化学の実験の手技	根管治療後の歯の修復
5	根管治療の失敗	歯の破折を防止する修復法
6	再根管治療の意義	歯科用実体顕微鏡による破折の診断
7	再根管治療の術式	歯科用実体顕微鏡による破折歯の修復
8	再根管治療の予後	コーンビーム CT による破折歯の診断
9	歯根吸収のメカニズム	歯の痛み
１０	歯根吸収の治療	痛みのメカニズム
１１	根未完成歯の歯内療法	慢性疼痛
１２	根未完成歯の治療法	急性疼痛
１３	歯内歯周疾患の病態	顎関節症の痛み
１４	歯内歯周疾患の鑑別	神経痛
１５	歯内歯周疾患の治療	歯原性疼痛と非歯原性疼痛

到達目標

通常の根管治療では解決しない種々のケースについて、考察し、治療の方法を開発するための知識と技能を習得する。

成績評価基準及び成績評価方法

授業態度３０％、発表３０％、レポート・試験４０％

講義では、毎回、課題についての議論及び発表をしてもらいます。また、講義終了後は、議論した内容などをさらに分析、整理してレポートをまとめて提出してもらいます。

テキスト及び参考書

別途指示する。

授業科目名　臨床実習Ⅰ・Ⅱ（歯科保存学）

開講時間数等　各１８０時間（週６コマ）

担当教員　　河野　哲

目　　的

効率的、確実な歯内療法を実践し、さらに先進医療としての最新の歯内療法を習得することを目的としている。

実習場所　　朝日大学医科歯科医療センター（大診療室）

内　　容

本臨床実習では効率的確実な歯内療法を実践するために、①器械切削器具の使用に精通し、さらに②難治症例を経験し、病巣洗浄法を身につけ、治療法として確立する。さらに③歯科用実体顕微鏡の使用下での歯内療法を実践し、また④コーンビーム CT 画像の読影・診断を習得し、⑤コーンビーム CT と歯科用実体顕微鏡による先進医療を実践する。

到達目標

① クラウンダウン法による効率的根管拡大を実践する。
② 超音波を用いた根管清掃を実践する。
③ 根尖病巣溶解による難治症例の治療を経験する。
④ 難治症例を経験し、良好な治癒を導く。
⑤ 歯科用実体顕微鏡下の歯内療法を実践する。
⑥ 歯科用実体顕微鏡下の根尖切除術を実践する。
⑦ コーンビーム CT 画像を用いて歯内療法疾患を診断する。

成績評価基準及び成績評価方法

経験した症例数：難治症例３０例、顕微鏡下の治療３０例、コーンビーム CT と歯科用実体顕微鏡による根尖切除術５例

評価法：年間５症例について口頭発表

授業科目名　臨床実習Ⅲ･Ⅳ（歯科保存学）

開講時間数等　各１８０時間（週６コマ）

担当教員　　河野　哲

目　　的

他分野、複合領域の疾病について適格な診断の元、確実な歯内療法を実践し、さらに原因不明の疼痛に対して、医科との連携をもち適正な診断法と治療法を習得することを目的としている。

実習場所　　朝日大学医科歯科医療センター（大診療室）

内　　容

本臨床実習では関連隣接領域の疾患について正しい知識を得て、難治症例を経験し、診断法と治療術式を身に付ける。

到達目標

① 他領域にまたがる疾病について理解する。
② 疼痛発生のメカニズムについて説明する。
③ 難治症例を経験する。
④ 難治症例を治療し良好な治癒に導く。
⑤ 医科との連携による診断を実施する。
⑥ 外科的歯内療法を実践する。

成績評価基準及び成績評価方法

経験した症例数：難治症例２０例、顕微鏡下の治療２０例、コーンビーム CT と歯科用実体顕微鏡による診断と治療１０例

評価法：年間５症例について口頭発表

授業科目名　歯科保存学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　奥山克史、日下部修介

目　　的

保存修復学に関する研究を実践するために必要な基本的な知識と考え方を習得する。さらに研究に必要な情報収集能力と研究推進能力を涵養する。

内　　容

本授業科目では保存修復学に関する研究・臨床を行う上で必要となる基本的な知識や臨床術式とその考え方を習得する。特にう蝕予防とう蝕治療に関する最新の知識と技法について学ぶとともにう蝕治療ガイドラインの内容について理解する。

授業計画

	歯科保存学Ⅰ（前学期）	歯科保存学Ⅱ（後学期）
１	う蝕と硬組織疾患　（１）	間接修復法の基礎と臨床　（１）
２	う蝕と硬組織疾患　（２）	間接修復法の基礎と臨床　（２）
３	う蝕と硬組織疾患　（３）	間接修復法の基礎と臨床　（３）
４	う蝕予防とフッ化物の応用　（１）	歯の漂白の基礎と臨床　（１）
５	う蝕予防とフッ化物の応用　（２）	歯の漂白の基礎と臨床　（２）
６	接着材料とその機序　（１）	高齢者のう蝕治療　（１）
７	接着材料とその機序　（２）	高齢者のう蝕治療　（２）
８	接着材料とその機序　（３）	保存修復とＣＡＤ／ＣＡＭ　（１）
９	修復材料の基礎　（１）	保存修復とＣＡＤ／ＣＡＭ　（２）
１０	修復材料の基礎　（２）	臨床研究の進め方
１１	直接コンポジットレジン修復法　（１）	う蝕治療のガイドライン　（１）
１２	直接コンポジットレジン修復法　（２）	う蝕治療のガイドライン　（２）
１３	直接コンポジットレジン修復法　（３）	う蝕治療のガイドライン　（３）
１４	歯の切削装置　（１）	う蝕治療のガイドライン　（４）
１５	歯の切削装置　（２）	う蝕治療のガイドライン　（５）

到達目標

大学院在籍中の４年間で学位論文を完成させる。その過程の中で保存修復学分野の研究に必要な情報収集能力と情報分析能力を養い、新しい研究手段を習得し、研究推進能力と研究指導力を身につける。

成績評価基準及び成績評価方法

授業態度３０％、発表３０％、レポート・試験４０％

講義では、毎回、課題についての議論及び発表をしてもらう。また、講義終了後は、議論した内容などを分析、整理してレポートをまとめて提出してもらう。

テキスト及び参考書

保存修復学 21 第 6 版（永末書店）、う蝕治療ガイドライン第 3 版（永末書店）、接着歯学第 2 版（医歯薬出版）

授業科目名　歯科保存学Ⅲ・Ⅳ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　奥山克史、日下部修介

目　　的

保存修復領域の研究を実施するために必要な知識と技法を習得する。これを通じて研究に必要な情報収集能力と研究推進能力を涵養する。

内　　容

本授業科目では保存修復領域に関する研究を進める上で必要となる知識や臨床術式とその考え方を習得し、さらに研究を実施する中で必要となる情報収集方法や学会発表、論文作成に必要な知識、技術について学ぶ。

授業計画

	歯科保存学Ⅲ（前学期）	歯科保存学Ⅳ（後学期）
1	審美性修復材料の機能評価　（1）	英文論文の書き方　（1）
2	審美性修復材料の機能評価　（2）	英文論文の書き方　（2）
3	審美性修復材料の機能評価　（3）	英文論文の書き方　（3）
4	審美性修復材料の機能評価　（4）	英文論文の書き方　（4）
5	審美性修復材料の機能評価　（5）	英文論文の書き方　（5）
6	審美性修復材料の機能評価　（6）	英文論文の書き方　（6）
7	審美性修復材料の機能評価　（7）	英文論文の書き方　（7）
8	接着システムの開発と評価　（1）	英文論文の書き方　（8）
9	接着システムの開発と評価　（2）	保存修復領域の臨床研究　（1）
１０	接着システムの開発と評価　（3）	保存修復領域の臨床研究　（2）
１１	接着システムの開発と評価　（4）	保存修復領域の臨床研究　（3）
１２	接着システムの開発と評価　（5）	保存修復領域の臨床研究　（4）
１３	接着システムの開発と評価　（6）	保存修復領域の臨床研究　（5）
１４	接着システムの開発と評価　（7）	保存修復領域の臨床研究　（6）
１５	接着システムの開発と評価　（8）	保存修復領域の臨床研究　（7）

到達目標

大学院在籍中の４年間で学位論文を完成させる。その過程の中で２学年では保存修復学の臨床的研究に必要な情報収集力と情報分析能力を養い、国際的に活躍できる人材となるための研究推進能力の向上を図る。

成績評価基準及び成績評価報方法

授業態度３０％、発表３０％、レポート・試験４０％

講義では課題について議論及び発表をして、終了後はレポートを提出してもらう。

テキスト及び参考書

保存修復学 21 第 6 版（永末書店）、う蝕治療ガイドライン第 3 版（永末書店）、接着歯学第 2 版（医歯薬出版）

授業科目名　臨床実習Ⅰ・Ⅱ（歯科保存学）

開講時間数等　各１８０時間（週６コマ）

担当教員　　奥山克史、日下部修介

目　　的

保存修復学の臨床的研究に必要な情報収集能力、情報分析能力を養い、新しい研究手段を習得させ、研究推進能力と研究指導能力を臨床実習を通じて涵養する。

また、最先端の実験手法や実験機器を利用して、科学基盤に基づいた診断法や治療法を確立することを目的とする。

実習場所　　朝日大学医科歯科医療センター（大診療室）

内　　容

歯科保存学分野の知識、臨床能力を習得することはもちろんのこと、歯科臨床に必要な他分野の臨床知識も学習し、一口腔一単位の生体に調和した歯科臨床を行う。また、レーザー装置・CAD／CAM 等の新器材、新材料の安全性、取り扱い及び処置、歯の漂白について習熟する。

到達目標

大学院在籍中の４年間で上記を基にした学位論文を完成させるために必要な知識、技能並びに研究遂行能力を身につける。さらに、日本歯科保存学会歯科保存治療認定医、歯科保存専門医、日本歯科接着学会接着歯科治療専門医等の取得をめざし、将来の専門領域を指導できる人材になることを目標にする。

成績評価基準及び成績評価方法

臨床態度３０％、臨床技能３０％、症例レポート４０％

臨床実習後は治療した内容などを分析､整理してレポートとしてまとめ､症例報告として提出してもらう。

授業科目名　臨床実習Ⅲ・Ⅳ（歯科保存学）

開講時間数等　各１８０時間（週６コマ）

担当教員　　奥山克史、日下部修介

目　　的

保存修復学の臨床的研究に必要な情報収集能力、情報分析能力を養い、新しい研究手段の習得や研究推進能力と研究指導能力を臨床実習Ⅲ・Ⅳを通じて涵養する。また、最先端の器材、器具、材料を用いた臨床を行い、科学基盤に基づいた診断法や治療法を確立することを目的とする。

実習場所　　朝日大学医科歯科医療センター（大診療室）

内　　容

歯科保存学分野の知識、臨床能力を習得することはもちろんのこと、歯科臨床に必要な他分野の臨床知識も学習し、一口腔一単位の生体に調和した歯科臨床を行う。また、レーザー装置・CAD／CAM 等の新器材、新材料の安全性、取り扱い及び処置方法、歯の漂白、う蝕予防について習熟する。

到達目標

大学院在籍中の４年間のうち２学年では上記を基にした必要な知識、技能、態度並びに研究遂行能力を身につける。さらに、日本歯科保存学会歯科保存治療認定医、歯科保存専門医、日本歯科接着学会接着歯科治療専門医、日本歯科審美学会認定医等の取得をめざし、将来の専門領域を指導できる人材になることを目標にする。

成績評価基準及び成績評価方法

臨床態度３０％、臨床技能３０％、症例レポート４０％

臨床実習後は治療した内容などを分析、整理してレポートにまとめ、症例報告として提出してもらう。

授業科目名　歯科補綴学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　宇野光乗、澤田季子

目　　的

顎口腔系の形態、機能、外観を回復するとともにその健康の維持を計ることができる高度な専門性を持つ臨床歯科医になるために必要な知識、技能、態度を習得する。

内　　容

顎口腔系は歯（咬合）、顎関節、咀嚼筋の３要素とこれらに対する中枢神経の統合のうえに成り立っている。また、顎口腔系機能はこれら構成要素間の密接な相互依存関係により営まれている。こうした理論を基礎として臨床における顎口腔系機能の新たな診断法及び治療法を見出すこと、さらに顎口腔系の審美（形態、外観）を回復するために必要な歯科材料の特性を理解して、その改良、開発をするための知識を習得するために必要な講義を行う。講義及び模型実習は、研究室、顎機能検査室、病院技工室で行う。

授業計画

	歯科補綴学Ⅰ（前学期）	歯科補綴学Ⅱ（後学期）
１	咬合咀嚼障害の病因論	歯周組織に配慮したクラウン概論
２	診察概論	歯周補綴学
３	検査概論	オールセラミッククラウン概説
４	評価と診断学概論	CAD/CAM システム概論
５	治療学	歯科の色彩学
６	ブリッジ概論	咬合分析（咬合器）
７	ポンティック概論	下顎運動の測定と解析
８	前処置概論	顎機能解析学
９	クラウンプレパレーション概論	筋電図測定と分析
１０	プロビジョナルレストレーション概論	ブラキシズムの発現機序と制御法
１１	色調の評価（測色、伝達法）	顎機能異常の診断学
１２	ワックスパターン形成	顎機能異常の治療学
１３	セラミックス概論	画像診断学
１４	咬合調整	クラウンブリッジ学総括
１５	術後管理学	論文の読み方、書き方の基本

到達目標

専門性の高い優れた研究者及び指導者となることを一つの目標とするが、日本補綴歯科学会、日本顎関節学会などの認定医、専門医の資格の取得を目指すために必要な高度な知識を習得する。それによって EBM に基づいた高度な歯科治療を実践できることを目標とします。

成績評価基準及び成績評価方法

授業態度３０％、発表３０％、レポート・試験４０％

講義では、毎回、課題についての議論及び発表することを課します。また、講義終了後は、議論した内容などをさらに分析、整理して考察を加えたレポートを提出する。

テキスト及び参考書

講義に必要な資料（参考書など）は別途指示する。

授業科目名　歯科補綴学Ⅲ・Ⅳ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　宇野光乗、澤田季子

目　　的

歯科補綴学Ⅰ・Ⅱに引き続いて、高度な専門性を持つ臨床歯科医を目指して、より深い知識を習得する。

内　　容

歯科補綴学Ⅰ・Ⅱで習得した内容を、さらに深めるために必要な講義と臨床について解説する。

授業計画

	歯科補綴学Ⅲ（前学期）	歯科補綴学Ⅳ（後学期）
1	歯周補綴学	顔の科学
2	歯周補綴の臨床	顔の歯科診断学
3	臨床生理咬合学	咬合接触理論
4	下顎運動の解析法（Ⅰ）	睡眠医・歯学の臨床
5	下顎運動の解析法（Ⅱ）	色調の歯科臨床学
6	オールセラミッククラウン概論	歯科接着理論
7	オールセラミッククラウンの臨床	歯科の接着材料
8	CAD/CAM システムの使用法	歯科審美学
9	CAD/CAM システムの実際	歯科審美の臨床
１０	ブラキシズムの発現要因と臨床的対応	画像診断（MRI）
１１	筋電図解析法	画像診断（CT）
１２	顎関節症の診断	心理アセスメント
１３	顎関節症の治療	医学統計学
１４	顎変形症顆頭の病理（Ⅰ）	論文の作成法
１５	顎変形症顆頭の病理（Ⅱ）	論文作成の実際

到達目標

専門性の高い優れた研究者及び指導者となることを目標するが具体的には

①日本補綴歯科学会、日本顎関節学会など関連学会の認定医、専門医の資格を取得するために必要な臨床上の知識を習得する。

②学会での口演原稿が作成できる。

③学会誌への発表論文が作成できる。

成績評価基準及び成績評価方法

授業態度３０％、発表３０％、レポート・試験４０％

講義では、毎回の課題についての議論及び発表を課す。また、講義終了後には議論した内容などを分析、整理して考察を加えたレポートを提出する。

テキスト及び参考書

別途指示する。

授業科目名　臨床実習Ⅰ・Ⅱ（歯科補綴学）

開講時間数等　各１８０時間（週６コマ）

担当教員　　宇野光乗、澤田季子

目　　的

担当教員の指導のもとに、先端の歯科補綴学分野の理論と実践を体験しながら、他の関連分野の疾患についても一口腔一単位の臨床実習における症例の実施及び臨床研究から、より専門性の高い診療能力を身につけるための知識、技能及び態度を習得する。

実習場所　　朝日大学医科歯科医療センター（大診療室、3 階診療室）、研究室及び顎機能検査室

内　　容

近年の医療機器、材料の開発に伴って発展してきた新たな理論や技術開発によって、益々多様化、高度化してきている患者のニーズにも対応可能となってきている。今後の継続的な発展のために、斬新的でユニークな発想のもとに新たな理論や材料の開発が歯科医療現場で求められている。こうした要請に応えるために

必要な基本的なデータ収集を日常の臨床で行う。これらの結果を学会等で発表するとともに、認定医や専門医の資格を得るための資料としてまとめる。これらを具現化するのに必要な知識、技能、態度を習得する。

到達目標

日本補綴歯科学会、日本顎関節学会、日本歯科審美学会などの認定医、専門医の資格を目指すために必要な高度な臨床の知識と技能を身に付ける。

成績評価基準及び成績評価方法

成績評価は概ねの割合を臨床実習での技能、態度を５０％（観察記録)、臨床研究の成果としての症例発表３０％、学会発表２０％として総合的に評価する。

授業科目名　臨床実習Ⅲ・Ⅳ（歯科補綴学）

開講時間数等　各１８０時間（週６コマ）

担当教員　　宇野光乗、澤田季子

目　　的

担当教員の監督、指導の下に先端の歯科補綴学分野（歯冠補綴・架工義歯学）における理論と実践を体験しながら、他の関連分野の疾患についても一口腔一単位の症例の実施及び臨床研究から、より専門性の高い診療能力を発揮するための技能、態度を習得する。

実習場所　　朝日大学医科歯科医療センター（大診療室、3 階診療室)、研究室及び顎機能検査室

内　　容

１年次に引き続いて、歯科医療現場で求められている、斬新的でユニークな発想の元に新たな理論や材料を開発する能力を開発するために必要な基本的なデータ収集を日常臨床で行う。また、これらの結果を学会や学会誌に発表するとともに、認定医や専門医の資格を得るための資料としてまとめる。これらを具現化するために必要な知識、技能、態度を習得する。

到達目標

日本補綴歯科学会、日本顎関節学会、日本歯科審美学会などの認定医、専門医の資格を得るために必要な高度な臨床の知識、技能、態度を身に付ける。

成績評価基準及び成績評価方法

臨床実習での技能、態度を５０％（観察記録)、臨床研究の成果としての症例発表３０％、学会発表２０％として総合評価する。

授業科目名　歯科補綴学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　──、羽田詩子、大森俊和、横矢隆二

目　　的

無歯顎をはじめとして、部分的なもの、インプラントに代表されるリコンストラクションにおける機能回復を高度に行うことができる技能・態度・知識を習得することを目的とする。

内　　容

高齢者の特性について深く理解することを重要とする。すなわち、身体的特徴や心理的特徴とはじめとして、高齢者の実質的な満足を充足する補綴物製作の技能・態度・知識を養成する。技能として、基本的な診療技術を再確認するとともに最新のテクニックを学ぶ。知識は、最新の文献だけでは無く正書の内容を実体験として理解することを実践する。態度教育は、患者中心的なそしてエビデンスベースからナラティブな医療の理解を中心に普遍的な対応と考え方を学ぶことを重視する。また、無歯顎、部分的なもの、インプラントに代表されるリコンストラクションに対応する咬合について実践し、高度な治療を行う。

授業計画

	歯科補綴学Ⅰ（前学期）	歯科補綴学Ⅱ（後学期）
１	補綴の診療と患者への対応（心理面）	エビデンスベースメディシン(EBM)
２	高齢者の身体的特徴と治療時の注意点　１	ナラティブメディシン(NBM) 1
３	高齢者の身体的特徴と治療時の注意点　２	訪問歯科診療　２
４	高齢者の心理的特徴と治療時の注意点　１	医療統計　１
５	訪問歯科診療　１	医療統計　２
６	患者の満足について（心理面）	臨床的評価法　１
７	患者満足について（機能面）	臨床的評価法　２
８	患者満足について（審美面）	特殊印象法
９	機能回復について１（無歯顎）	難症例の実践　１（顎位不正）
１０	機能回復について２（無歯顎）	難症例の実践　２（顎堤不良）
１１	機能回復について３（無歯顎）	難症例の実践　３（心理的）
１２	機能回復について４（有歯顎）	難症例の実践　４（身体的）
１３	機能回復について５（有歯顎）	難症例の実践　５（訪問歯科診療）
１４	機能回復について５	統合的問題解決　１（口腔機能回復）
１５	機能回復について５（インプラント）	統合的問題解決　２

到達目標

無歯顎、特に高齢者の QOL を高める。そして、全ての咬合が係わる治療を行うことができる技能・態度・知識を習得する。

成績評価基準及び成績評価方法

発表３０％、討議内容３０％、レポート４０％

講義では、毎回、課題についての議論及び発表をしてもらいます。また、講義終了後は、議論した内容などをさらに分析、整理してレポートをまとめて提出してもらいます。

テキスト及び参考書

別途指示する。

授業科目名　歯科補綴学Ⅲ・Ⅳ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　──、羽田詩子、大森俊和、横矢隆二

目　　的

無歯顎をはじめとして、部分的なもの、インプラントに代表されるリコンストラクションにおける機能回復を高度に行うことができる技能・態度・知識を習得することを目的とする。

内　　容

高齢者の特性について深く理解することを重要とする。すなわち、身体的特徴や心理的特徴をはじめとして、高齢者の実質的な満足を充足する補綴物製作の技能・態度・知識を養成する。技能として、基本的な診療技術を再確認するとともに最新のテクニックを学ぶ。知識は、最新の文献だけでは無く正書の内容を実体験として理解することを実践する。態度教育は、患者中心的なそしてエビデンスベースからナラティブな医療の理解を中心に普遍的な対応と考え方を学ぶことを重視する。また、無歯顎、部分的なもの、インプラントに代表されるリコンストラクションに対応する咬合について実践し、高度な治療を行う。

授業計画

	歯科補綴学Ⅲ（前学期）	歯科補綴学Ⅳ（後学期）
1	補綴の診療と患者への対応（心理面）	エビデンスベースメディシン(EBM)
2	高齢者の身体的特徴と治療時の注意点　1	ナラティブメディシン(NBM) 1
3	高齢者の身体的特徴と治療時の注意点　2	訪問歯科診療　2
4	高齢者の心理的特徴と治療時の注意点　1	医療統計　1
5	訪問歯科診療　1	医療統計　2
6	患者の満足について（心理面）	臨床的評価法　1
7	患者満足について（機能面）	臨床的評価法　2（口腔機能低下症）
8	患者満足について（審美面）	特殊印象法
9	機能回復について１（無歯顎）	難症例の実践　1（顎位不正）
１０	機能回復について２（無歯顎）	難症例の実践　2（顎堤不良）
１１	機能回復について３（有歯顎）	難症例の実践　3（心理的）4（身体的）
１２	機能回復について	難症例の実践　5（口腔機能回復）
１３	機能回復について５（インプラント）	難症例の実践　6（訪問歯科診療）
１４	機能回復について５（PAP）	摂食嚥下　1（VE、VF）
１５	機能回復について５（PLP）	摂食嚥下　2（PAP、PLP）

到達目標

無歯顎、特に高齢者の QOL を高める。そして、全ての咬合が係わる治療を行うことができる技能・態度・知識を習得する。

成績評価基準及び成績評価方法

発表３０％、討議内容３０％、レポート４０％

講義では、毎回、課題についての議論及び発表をしてもらいます。また、講義終了後は、議論した内容などをさらに分析、整理してレポートをまとめて提出してもらいます。

テキスト及び参考書

別途指示する。

授業科目名　臨床実習Ⅰ・Ⅱ（歯科補綴学）

開講時間数等　各１８０時間（週６コマ）

担当教員　　──、羽田詩子、大森俊和、横矢隆二

目　　的

高齢者にとっては、質の高い生活(QOL)を送るためには、なるべく自立した生活を確保し、自らのもてる力を維持・回復することが重要である。特に本臨床実習では、全部床義歯による機能回復を高度に行うことができる技能・態度・知識を習得することを目的とする。

実習場所　　朝日大学医科歯科医療センター　大診療室、訪問先施設
内　　容
高齢者の特性について深く理解することを重要とする。すなわち、身体的特徴や心理的特徴をはじめとして、高齢者の実質的な満足を充足する補綴物製作の技能・態度・知識を養成する。技能として、基本的な診療技術を再確認するとともに最新のテクニックを学ぶ。知識は、最新の文献だけでは無く正書の内容を実体験として理解することを実践する。態度教育は、患者中心的なそしてエビデンスベースからナラティブな医療の理解を中心に普遍的な対応と考え方を学ぶことを重視する。また、無歯顎、部分的なもの、インプラントに代表されるリコンストラクションに対応する咬合について実践し、高度な治療を行う。在宅・訪問歯科診療の実践と、摂食、嚥下歯科治療を修得する。
到達目標
無歯顎、特に高齢者の QOL を高める。そして、全ての咬合が係わる治療を行うことができる技能・態度・知識を習得する。
成績評価基準及び成績評価方法
観察記録、患者への聞き取り、ポートフォーリオ及び口頭試問

授業科目名　臨床実習Ⅲ・Ⅳ（歯科補綴学）
開講時間数等　各１８０時間（週６コマ）
担当教員　　──、羽田詩子、大森俊和
目　　的
無歯顎をはじめとして、部分的なもの、インプラントに代表されるリコンストラクションにおける機能回復を高度に行うことができる技能・態度・知識を習得することを目的とする。
実習場所　　朝日大学医科歯科医療センター　大診療室及び技工室
内　　容
高齢者の特性について深く理解することを重要とする。すなわち、身体的特徴や心理的特徴をはじめとして、高齢者の実質的な満足を充足する補綴物製作の技能・態度・知識を養成する。技能として、基本的な診療技術を再確認するとともに最新のテクニックを学ぶ。知識は、最新の文献だけでは無く正書の内容を実体験として理解することを実践する。態度教育は、患者中心的なそしてエビデンスベースからナラティブな医療の理解を中心に普遍的な対応と考え方を学ぶことを重視する。また、無歯顎、部分的なもの、インプラントに代表されるリコンストラクションに対応する咬合について実践し、高度な治療を行う。
到達目標
無歯顎、特に高齢者の QOL を高める。そして、全ての咬合が係わる治療を行うことができる技能・態度・知識を習得する。
成績評価基準及び成績評価方法
観察記録、患者への聞き取り、ポートフォーリオ及び口頭試問

授業科目名　歯科補綴学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　──、山本寛明、渡邊　諒

目　　的

高齢者人口が増加する日本社会において部分床義歯の需要は増加すると考えられる。しかし，８０２０運動によりその目的を達成されたが、２０本の残存歯では義歯必要患者と考えられる。また、インプラント治療の増加によりこの考え方は否定されつつあるが、インプラント治療のための治療費を、減少する年金から果たして支出できるのであろうかなどの疑問点が生じる。一般国民の口腔機能を良好に保ち QOL の維持を図るためには必要不可欠と考えられ、より良好な部分床義歯を国民に提供する義務は我々歯科医師にある。そこで、歯科補綴および部分床義歯の治療のための基礎となる事項を中心に知識を習得することを目的とする。

内　　容

歯科補綴および部分床義歯の治療のための基礎となる社会歯科･解剖･生理･診察･検査を中心に歯科補綴学からの考え方について講義する。

授業計画

	歯科補綴学Ⅰ(前学期)	歯科補綴学Ⅱ(後学期)
１	補綴歯科治療の意義・目的	補綴における医療面接
２	歯科補綴治療と健康科学	補綴における全身診査の必要性
３	歯科補綴治療の利益と不利益	補綴における局所診査の必要性
４	歯科補綴治療の関連する疫学	プロブレムリストの製作
５	歯科補綴治療に必要な解剖	初期治療計画の立案
６	下顎位と下顎運動	補綴に必要なＸ線検査
７	下顎運動と顎関節	補綴に必要な機能検査
８	咬合の解剖学的要素	部分床義歯患者の診断
９	咬合の生理学的要素	治療計画
１０	補綴物と咀嚼	患者の満足
１１	補綴物と嚥下	インフォームドコンセント
１２	補綴物と構音機能	部分床義歯の印象採得
１３	補綴物と口腔感覚	部分床義歯の咬合採得
１４	補綴物と口腔の加齢による変化Ⅰ	部分床義歯試適と装着
１５	補綴物と口腔の加齢による変化Ⅱ	術後管理

到達目標

歯科補綴・部分床義歯患者の QOL の維持のための部分床義歯を製作する基本的事項を習得する。

成績評価基準及び成績評価方法

発表５０％，レポート５０％

講義では，課題についての発表と討論を行い、その討論により得られた事項をレポートとして提出する。

テキスト及び参考書

講義に必要なテキスト及び参考書は別途指示する。

授業科目名　歯科補綴学Ⅲ・Ⅳ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　──、山本寛明、渡邊　諒

目　　的

部分床義歯の治療のための最新の考え方とその背景を中心に知識を習得することを目的とする。

内　　容

部分床義歯学Ⅰ・Ⅱで習得した知識を基礎に部分床義歯の治療のための発展的考え方と部分床義歯の一部とされる顎補綴や顎関節症の咬合治療について講義する。

授業計画

	歯科補綴学Ⅲ(前学期)	歯科補綴学Ⅳ(後学期)
1	義歯の歴史Ⅰ	印象の基本的考え方
2	義歯の歴史Ⅱ	症例に応じた印象法
3	部分床義歯の診査・検査（画像検査）	咬合採得の基本的考え方
4	部分床義歯の診査・検査（顎運動検査）	症例に応じた咬合採得
5	部分床義歯の診査・検査（顎運動検査）	部分床義歯の材料論
6	部分床義歯と心理的側面	部分床義歯の製作技術
7	部分床義歯の診断	部分床義歯装着
8	部分床義歯の種類	部分床義歯のリベース
9	部分床義歯の支持	部分床義歯の修理
１０	部分床義歯の把持	部分床義歯の予後
１１	部分床義歯の維持	顎顔面補綴Ⅰ
１２	部分床義歯の設計Ⅰ	顎顔面補綴Ⅱ
１３	部分床義歯の設計Ⅱ	顎関節治療Ⅰ
１４	部分床義歯の設計Ⅲ	顎関節治療Ⅱ
１５	前処置	顎関節治療Ⅲ

到達目標

部分床義歯、顎欠損、顎関節患者の QOL の維持のための部分床義歯を製作する最新の事項を習得する。

成績評価基準及び成績評価方法

発表５０％、レポート５０％

講義では，課題についての発表と討論を行いその討論により得られた事項をレポートとして提出する。

テキスト及び参考書

講義に必要なテキスト及び参考書は別途指示する。

授業科目名　臨床実習Ⅰ・Ⅱ（歯科補綴学）

開講時間数等　各１８０時間（週６コマ）

担当教員　　──、山本寛明、渡邊　諒

目　　的

歯科臨床の場を通じて、歯科補綴学分野の理論を実践する。また、医科を含む他分野の疾患について知識を高め、歯科診療のための技術・態度を習得する。

実習場所　　朝日大学医科歯科医療センター　大診療室

内　　容

指導医のもと、患者の医療面接・検査・診断・プロブレムリストの製作と解決・インフォームドコンセント・そして治療とリコールを通して、歯科疾患特に補綴を必要とする機能障害や審美障害患者の疾患の本質とその社会背景や精神的側面を考慮することのできる歯科医師を育成する。また、症例の学会発表を行い多方面からの考え方を習得する。

到達目標

患者に満足を与える歯科診療について考察と実践ができ、認定医取得のための症例と知識・技術を習得する。

成績評価基準及び成績評価方法

観察記録５０％、発表２０％、レポート３０％

実習では、指導医のもと、患者の利益を考え治療を行い観察記録とレポートとして提出する。

授業科目名　臨床実習Ⅲ・Ⅳ（歯科補綴学）

開講時間数等　各１８０時間（週６コマ）

担当教員　　──、山本寛明、渡邊　諒

目　　的

歯科補綴臨床を通じて基本的技術・態度を習得し、その上で歯科医療管理・医療情報・医療受給・医療経済・安全管理・医事紛争などの社会歯科学を含む分野の理解と実践をする。また、認定医取得のための知識技能を養う技術・態度を習得する。

実習場所　　朝日大学医科歯科医療センター　大診療室

内　　容

指導医の下、EBM に基づいた治療や先進的な方法を習得する。また、顎関節治療や顎補綴などの困難な症例のチーム医療として参加すると共に、スポーツ歯学のフィールド活動にも参加し、理論と技術を習得する。また、症例の学会発表を行い多方面からの考え方を習得する。

到達目標

患者に満足を与える歯科診療について考察と実践ができ、認定医取得のための症例と知識・技術を習得する。

成績評価基準及び成績評価方法

観察記録５０％、発表２０％、レポート３０％

実習では、指導医のもと、患者の利益を考え治療を行い観察記録とレポートとして提出する。

授業科目名　摂食嚥下リハビリテーション学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　谷口裕重

目　　的

現在の社会的背景を理解した上で、以下を学習目的とする。

① 理論を基盤とした摂食嚥下リハビリテーションの診療体系、研究理念を構築するための知識、概念を理解する

② 医療、介護に精通した「歯科医療人」として必要な知識を理解する

③ 職種間連携に必要な知識や態度を理解する

内　　容

摂食嚥下リハビリテーション学は従来の歯科領域、全身疾患、服薬状況に加えて、栄養状態、全身機能、口腔機能、摂食嚥下機能、リハビリテーションの概念、多職種連携、死生観など複合的な観点が必要とされる。そのため、摂食嚥下リハビリテーションの基礎的な知識を基盤として、多角的な知識・態度・概念、最新の知見の理解を目標とする。

摂食嚥下リハビリテーション学Ⅰ・Ⅱでは、日本摂食嚥下リハビリテーション学会、日本老年歯科医学会などが作成した診療ガイドラインを基として、基本的な摂食嚥下機能、摂食嚥下機能障害の病態、その検査・診断方法を理解し、治療計画を立案する。

授業計画

	摂食嚥下リハビリテーション学Ⅰ（前学期）	摂食嚥下リハビリテーション学Ⅱ（後学期）
1	歯科医療における摂食嚥下リハビリテーション	摂食嚥下障害と臨床倫理
2	文献の検索方法と新しい知見の取得方法	高齢者のための社会保障制度
3	リハビリテーション医学概論①：障害の捉え方とリハビリテーション	摂食嚥下機能評価①：問診、視診、医療情報の収集
4	リハビリテーション医学概論②：リハビリテーションにおけるアプローチの基本（評価とゴールの設定）	摂食嚥下機能評価②：全身のアセスメント（全身機能評価）
5	リハビリテーション医学概論③：摂食嚥下障害に対するリハビリテーションの考え方	摂食嚥下機能評価③：全身のアセスメント（栄養評価）
6	摂食嚥下のメカニズム①：摂食嚥下にかかわる解剖・生理	摂食嚥下機能評価④：口腔機能低下、咀嚼障害と摂食嚥下障害との関連
7	摂食嚥下のメカニズム②：摂食嚥下にかかわる呼吸・咳嗽	摂食嚥下機能評価⑤：咀嚼、口腔機能評価
8	摂食嚥下のメカニズム③：摂食嚥下のモデル	摂食嚥下機能評価⑥：スクリーニング
9	摂食嚥下障害の要因①：認知症	摂食嚥下機能評価⑦：ミールラウンド
１０	摂食嚥下障害の要因②：脳血管疾患	摂食嚥下機能評価⑧：嚥下精密検査（嚥下内視鏡検査、嚥下造影検査）
１１	摂食嚥下障害の要因③：神経・筋疾患	摂食嚥下機能評価⑨:嚥下精密検査(筋電図検査、マノメトリ、超音波、他検査)
１２	摂食嚥下障害の要因④：頭頸部腫瘍	摂食嚥下リハビリテーションにおける治療計画①：ステージによる違い
１３	摂食嚥下障害の要因⑤：加齢（サルコペニア、廃用症候群）	摂食嚥下リハビリテーションにおける治療計画②：アプローチの違い
１４	摂食嚥下障害の要因⑥：薬剤	小児の摂食嚥下障害①:発達期の機能獲得と摂食嚥下障害
１５	摂食嚥下障害の要因⑦：高齢者に多いその他	小児の摂食嚥下障害②：治療計画と対応

	全身疾患（悪性腫瘍、循環器疾患、呼吸器疾患、精神疾患他）	

到達目標

1．文献をオンライン検索し歯科医学論文を理解できる。
2．診療ガイドラインを理解できる。
3．リハビリテーション医学を理解できる。
4．摂食嚥下のメカニズムを理解できる。
5．摂食嚥下障害の要因を理解できる。
6．摂食嚥下障害と臨床倫理を理解できる。
7．摂食嚥下機能評価を理解できる。
8．摂食嚥下リハビリテーションにおける治療計画が立案できる。
9．小児の摂食嚥下障害を理解できる。

成績評価基準及び成績評価方法

授業態度２５％、発表２５％、レポート・試験５０％
講義終了後にレポートを提示する。レポートの内容に関する議論、発表、口頭試問により
成績を総合的に評価する。

テキスト及び参考書

・ よくわかる摂食・嚥下のメカニズム第２版（医歯薬出版）
・ Medical Rehabilitation「これでナットク！摂食嚥下機能評価のコツ」（全日本病院出版会）
・ The Clinician’s Guide to Swallowing Fluoroscopy：臨床家のための嚥下造影ガイド（医歯薬出版）
・ 摂食嚥下リハビリテーション　第３版（医歯薬出版）
・ 新版　歯学生のための摂食嚥下リハビリテーション学（医歯薬出版）

授業科目名　摂食嚥下リハビリテーション学Ⅲ・Ⅳ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　谷口裕重

目　　的

現在の社会的背景を理解した上で、以下を学習目的とする。

① 理論を基盤とした摂食嚥下リハビリテーションの診療体系、研究理念を構築するための知識、概念を習得する
② 医療、介護に精通した「歯科医療人」として必要な知識を習得する
③ 職種間連携に必要な知識や態度を習得する

①～③を習得した上で、④常に新規性を追求し、⑤学術成果を発信する

内　　容

摂食嚥下リハビリテーション学は従来の歯科領域、全身疾患、服薬状況に加えて、栄養状態、全身機能、口腔機能、摂食嚥下機能、リハビリテーションの概念、多職種連携、死生観など複合的な観点が必要とされる。そのため、摂食嚥下リハビリテーションの基礎的な知識を基盤として、多角的な知識・態度・概念、最新の知見の習得を目標とする。

摂食嚥下リハビリテーション学Ⅲ・Ⅳでは、日本摂食嚥下リハビリテーション学会、日本老年歯科医学会などが作成した診療ガイドラインを基として、摂食嚥下リハビリテーションのリスクマネジメントの理解、アプローチの選択、疾患のステージや環境に応じた評価・診断・治療計画立案・リハビリテーションを理解する。

授業計画

	摂食嚥下リハビリテーション学Ⅲ（前学期）	摂食嚥下リハビリテーション学Ⅳ（後学期）
1	摂食嚥下リハビリテーションにおけるリスクマネジメント	症例検討①：認知症の対応
2	治療的アプローチ①：間接訓練	症例検討②：脳血管疾患の対応
3	治療的アプローチ②：直接訓練	症例検討③：神経・筋疾患の対応

4	代償的アプローチ①：食物調整	症例検討④：頭頸部腫瘍の対応
5	代償的アプローチ②：NST との連携、栄養法と食品の選択	症例検討⑤：サルコペニア、廃用症候群の対応
6	代償的アプローチ③：体幹調整	研究遂行の基礎的知識①：研究環境の整備
7	代償的アプローチ④：食器具調整	研究遂行の基礎的知識②：研究の組み立て、進め方
8	代償的アプローチ⑤：歯科的アプローチ（嚥下補助装置、口腔健康管理）	研究遂行の基礎的知識③：統計解析の方法Ⅰ
9	代償的アプローチ⑥：歯科的アプローチ（顎補綴）	研究遂行の基礎的知識④：統計解析の方法Ⅱ
１０	歯科医療のパラダイムシフト①：急性期病院での対応	研究遂行の基礎的知識⑤：研究発表の方法
１１	歯科医療のパラダイムシフト②：回復期病院での対応	和文論文の書き方①
１２	歯科医療のパラダイムシフト③：訪問診療の基本	和文論文の書き方②
１３	歯科医療のパラダイムシフト④：在宅での対応（訪問診療）	英語論文の書き方①
１４	歯科医療のパラダイムシフト⑤：施設での対応（訪問診療）	英語論文の書き方②
１５	歯科医療のパラダイムシフト⑥：チームアプローチの実際	英語論文の書き方③

到達目標

日本摂食嚥下リハビリテーション学会認定士、日本老年歯科医学会認定医、日本老年歯科医学会摂食機能療法専門歯科医師を取得するために必要な知識を習得する。

1．摂食嚥下リハビリテーションにおけるリスクマネジメントを理解できる。
2．摂食嚥下障害に対する治療的アプローチを理解できる。
3．摂食嚥下障害に対する代償的アプローチを理解できる。
4．摂食嚥下リハビリテーションのパラダイムシフトを理解できる。
5．摂食嚥下障害患者に対し疾患のステージや環境に応じた評価・診断・治療計画立案・リハビリテーションを理解できる。
6．研究遂行の基礎的知識を理解できる。
7．研究論文の書き方を理解できる。

成績評価基準及び成績評価方法

授業態度２５％、発表２５％、レポート・試験５０％

講義終了後にレポートを提示する。レポートの内容に関する議論、発表、口頭試問により成績を総合的に評価する。

テキスト及び参考書

・ よくわかる摂食・嚥下のメカニズム第２版（医歯薬出版）
・ Medical Rehabilitation「これでナットク！摂食嚥下機能評価のコツ」（全日本病院出版会）
・ The Clinician’s Guide to Swallowing Fluoroscopy：臨床家のための嚥下造影ガイド（医歯薬出版）
・ 摂食嚥下リハビリテーション　第３版（医歯薬出版）
・ 新版　歯学生のための摂食嚥下リハビリテーション学（医歯薬出版）

授業科目名　臨床実習Ⅰ・Ⅱ（摂食嚥下リハビリテーション学）

開講時間数等　各１８０時間（週６コマ）

担当教員　　谷口裕重

目　　的

摂食嚥下リハビリテーション学Ⅰ・Ⅱで学習したことを基に、摂食嚥下障害に対する評価・診断・治療計画立案・リハビリテーションを実践する。

実習場所　　朝日大学病院、朝日大学医科歯科医療センター

内　　容

理論を基盤とした摂食嚥下リハビリテーションの診療体系を理解するとともに、摂食嚥下機能、摂食嚥下機能障害の病態、その検査・診断方法を理解し、治療計画を立案する。さらに、指導医が患者を配当し、アプローチの選択、疾患のステージや環境に応じた評価・診断・治療計画立案・リハビリテーションを実践する。

到達目標

１．摂食嚥下機能、摂食嚥下機能障害の病態、検査・診断方法を理解した上で、治療計画を立案できる。

２．摂食嚥下障害に対するアプローチの選択、疾患のステージや環境に応じた評価・診断・治療計画立案・リハビリテーションが実践できる。

成績評価基準及び成績評価方法

実習態度、レポート及び症例発表を総合的に評価する。

担当医として診療を行った症例の検査、診断、治療方針、治療結果をまとめ発表する。

授業科目名　臨床実習Ⅲ・Ⅳ（摂食嚥下リハビリテーション学）

開講時間数等　各１８０時間（週６コマ）

担当教員　　谷口裕重

目　　的

摂食嚥下リハビリテーション学Ⅰ～Ⅳおよびで臨床実習Ⅰ・Ⅱで学習したことを基に、摂食嚥下障害に対する評価・診断・治療計画立案・リハビリテーションを実践する。

実習場所　　朝日大学病院、朝日大学医科歯科医療センター

内　　容

理論を基盤とした摂食嚥下リハビリテーションの診療体系を理解するとともに、摂食嚥下機能、摂食嚥下機能障害の病態、その検査・診断方法を理解した上で治療計画を立案し、アプローチの選択、疾患のステージや環境に応じた評価・診断・治療計画立案・リハビリテーションを実践する。さらに、医療、介護に精通した「歯科医療人」として、職種間連携にも対応できる知識、態度および臨床技能を習得する。

到達目標

日本摂食嚥下リハビリテーション学会認定士、日本老年歯科医学会認定医、日本老年歯科医学会摂食機能療法専門歯科医師を取得するために必要な臨床の知識・技術を習得する。

１．摂食嚥下機能、摂食嚥下機能障害の病態、検査・診断方法を理解した上で、治療計画を立案できる。

２．摂食嚥下障害に対するアプローチの選択、疾患のステージや環境に応じた評価・診断・治療計画立案・リハビリテーションが実践できる。

３．多職種と連携し対話した上で、治療計画を立案し、アプローチを選択できる。

成績評価基準及び成績評価方法

実習態度、レポート及び症例発表を総合的に評価する。

担当医として診療を行った症例の検査、診断、治療方針、治療結果をまとめ発表する。

授業科目名　歯科麻酔学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　半田俊之

目　　的

歯科を受診する患者であっても高齢社会を向かえた近年では全身的な合併症を有することが多い。そのため歯科医療においては全身的な患者管理の必要性が増大している。本講義では、安全な歯科医療を患者に提供するための、生理学と病態生理学、さらに全身管理法との関連を学習する。

内　　容

侵害刺激に対する神経・循環・呼吸生理，水・電解質バランス，内分泌・代謝，体温管理，止血凝固機能の知識の習得

授業計画

	歯科麻酔学Ⅰ（前学期）	歯科麻酔学Ⅱ（後学期）
１	呼吸生理学１	酸素運搬
２	呼吸生理学２	二酸化炭素運搬
３	呼吸生理学３	体液１
４	呼吸機能検査１	体液２
５	呼吸機能検査２	水、電解質１
６	循環生理学１	水、電解質２
７	循環生理学２	酸塩基平衡１
８	循環生理学３	酸塩基平衡２
９	神経生理学１	内分泌１
１０	神経生理学２	内分泌２
１１	神経生理学３	代謝１
１２	心電図(正常)１	代謝２
１３	心電図(正常)２	輸液の基礎１
１４	心電図(異常)１	輸血の基礎１
１５	心電図(異常)２	輸血の基礎２

到達目標

患者に苦痛を与えない安全かつ円滑に歯科治療・口腔外科手術管理を行うための生理学、病理学を習得する。

成績評価基準及び成績評価方法

授業態度３０％、発表・レポート３０％、試験４０％

講義では、課題について整理してレポートをまとめ発表し、その後訂正し提出する。

テキスト及び参考書

歯科麻酔学第８版（医歯薬出版)、臨床歯科麻酔学第５版（永松書店）

授業科目名　歯科麻酔学Ⅲ・Ⅳ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　半田俊之

目　　的

歯科を受診する患者であっても高齢社会を向かえた近年では全身的な合併症を有することが多い。そのため歯科医療においては全身的な患者管理の必要性が増大している。本講義では、安全な歯科医療を患者に提供するための、歯科治療行為が及ぼす全身への侵襲を知りそれに対応する知識と技能、全身管理法を学習する。

内　　容

手術・麻酔による侵襲に対する患者の術前評価，それに続く適正な麻酔選択と麻酔管理，そして適切な術後管理の習得

授業計画

	歯科麻酔学Ⅲ（前学期）	歯科麻酔学Ⅳ（後学期）
1	呼吸生理学１	輸血の基礎２
2	呼吸生理学２	静脈麻酔薬(鎮静薬)
3	循環生理学１	静脈麻酔薬(鎮痛薬)
4	循環生理学２	吸入麻酔薬
5	心電図(正常)	筋弛緩薬
6	心電図(異常)	前投薬
7	水、電解質１	術前合併症の管理
8	水、電解質２	導入法、気管挿管法
9	酸塩基平衡１	術中モニター
１０	酸塩基平衡２	術中輸液、輸血
１１	内分泌・代謝１	術中麻酔管理
１２	内分泌・代謝２	術中合併症
１３	輸液の基礎１	術後合併症
１４	輸液の基礎２	ショック
１５	輸血の基礎１	救急蘇生法

到達目標

患者に苦痛を与えない安全かつ円滑に歯科治療・口腔外科手術管理を行うための麻酔学、患者管理学を習得する。

成績評価基準及び成績評価方法

授業態度３０％、発表・レポート３０％、試験４０％

講義では、課題について整理してレポートをまとめ発表し、その後訂正し提出する。

テキスト及び参考書

歯科麻酔学第８版（医歯薬出版)、臨床歯科麻酔学第５版（永松書店）

授業科目名　臨床実習Ⅰ・Ⅱ（歯科麻酔学）

開講時間数等　各１８０時間（週６コマ）

担当教員　　半田俊之

目　　的

患者に苦痛を与えない安全かつ円滑に歯科治療・口腔外科手術管理を行うために、精神鎮静法及び全身麻酔法の知識技能を習得する。

実習場所　　朝日大学医科歯科医療センター　３階麻酔室、５階処置室

内　　容

朝日大学医科歯科医療センター及び朝日大学病院での口腔外科・歯科治療時の鎮静法、全身麻酔法の実際。

到達目標

１）術前の患者評価を実施する。服用薬剤の歯科診療に関する副作用を説明できる。

２）麻酔計画を立てる。全身疾患の歯科診療上のリスクを説明できる。

３）安全な精神鎮静法を実施する。

４）全身麻酔の術前回診を実施する

５）全身麻酔器の使用法を習得する。

６）生体情報モニターの使用法を習得する。
７）マスクによる人工呼吸法を習得する。
８）気管挿管を実施する。
９）全身麻酔に使用する薬物の知識を習得する。
１０）全身麻酔を実施する。バイタルサインを観察し、異常を評価できる。全身的合併症への対処法を習得する。
１１）術後回診を実施する。

成績評価基準及び成績評価方法

症例毎の麻酔記録とレポートの提出

授業科目名　臨床実習Ⅲ・Ⅳ（歯科麻酔学）

開講時間数等　各１８０時間（週６コマ）

担当教員　　半田俊之

目　　的

患者に苦痛を与えない安全かつ円滑に歯科治療・口腔外科手術管理を行うために、精神鎮静法及び全身麻酔法の知識技能を習得する。

実習場所

内　　容

朝日大学医科歯科医療センター３階麻酔室、朝日大学病院手術室、東京都立小児総合医療センター麻酔科朝日大学医科歯科医療センター及び朝日大学病院での口腔外科・歯科治療時の鎮静法、全身麻酔法の実際。

到達目標

１）術前の患者評価を実施する。服用薬剤の歯科診療に関する副作用を説明できる。
２）麻酔計画を立てる。全身疾患の歯科診療上のリスクを説明できる。
３）安全な精神鎮静法を実施する。
４）全身麻酔の術前回診を実施する
５）全身麻酔器の使用法を習得する。
６）生体情報モニターの使用法を習得する。
７）気管挿管を実施する。
８）全身麻酔に使用する薬物の知識を習得する。
９）全身麻酔を実施する。バイタルサインを観察し、異常を評価できる。全身的合併症への対処法を習得する。
１０）術後回診を実施する。

成績評価基準及び成績評価方法

症例毎の麻酔記録とレポートの提出

口腔生命科学コース

授業科目名　口腔生理学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各６０時間（週２コマ）

担当教員　　硲　哲崇、安尾敏明、岩田周介

目　　的

生理学・口腔生理学の基本知識を発展させ、研究に結びつけるために、この分野の研究の潮流及び概要を理解する。

内　　容

生理学・口腔生理学分野における過去の研究の流れを概説するとともに、現在の口腔生理学の立ち位置や研究の方向性を概説する。

授業計画

	口腔生理学Ⅰ（前学期）	口腔生理学Ⅱ（後学期）
１	口腔生理学　概説１	口腔生理学　各論４（口腔の神経生理学）
２	口腔生理学　概説２	口腔生理学　各論５（口腔の神経生理学）
３	口腔生理学　概説３	口腔生理学　各論６（口腔環境の生理）
４	口腔生理学　概説４	口腔生理学　各論７（口腔環境の生理）
５	口腔生理学研究の潮流１	口腔生理学　各論８（口腔感覚の生理）
６	口腔生理学研究の潮流２	口腔生理学　各論９（口腔感覚の生理）
７	口腔生理学研究の潮流３	口腔生理学　各論１０（口腔の運動系）
８	口腔生理学研究の潮流４	口腔生理学　各論１１（口腔の運動系）
９	口腔生理学研究の潮流５	口腔生理学　各論１２（口腔の自律性機能）
１０	口腔生理学　総論１	口腔生理学　各論１３（口腔の自律性機能）
１１	口腔生理学　総論２	口腔生理学　各論１４（その他の機能）
１２	口腔生理学　総論３	文献輪読１
１３	口腔生理学　各論１（硬組織の生理）	文献輪読２
１４	口腔生理学　各論２（口腔軟組織の生理）	文献輪読３
１５	口腔生理学　各論３（口腔軟組織の生理）	周辺領域との関連

到達目標

歯科医学の一分野としての口腔生理学研究の意義について理解するとともに、その研究の潮流や立ち位置、今後の方向性を理解する。

成績評価基準及び成績評価方法

レポート又は口頭試問

テキスト及び参考書

適宜指示する。または、随時プリント等を配付する。

授業科目名　口腔生理学Ⅲ・Ⅳ

開講時間数等　各６０時間（週２コマ）

担当教員　　硲　哲崇、安尾敏明、岩田周介

目　　的

生理学・口腔生理学の基本知識を発展させ、より先進的な文献の講読を行うとともに、各種生理学的実験手法を習得し、これらを用いてデータを獲得し、論文完成に至るまでのまでの手法を理解する。

内　　容

神経生理学並びに感覚生理学的な事項を中心とした口腔生理学各分野について概説するとともに、歯科臨床に関わる生理学的事項についても触れる。

授業計画

	口腔生理学Ⅲ（前学期）	口腔生理学Ⅳ（後学期）
1	口腔生理学　概説１	感覚生理学　総論１
2	口腔生理学　概説２	感覚生理学　総論２
3	神経生理学　総論１	感覚生理学　総論３
4	神経生理学　総論２	感覚生理学　各論１（体性感覚）
5	神経生理学　総論３	感覚生理学　各論２（体性感覚）
6	神経生理学　総論４	感覚生理学　各論３（特殊感覚）
7	神経生理学　総論５	感覚生理学　各論４（特殊感覚）
8	神経生理学　各論１（末梢神経系）	生理学的実験法１（形態学的手法）
9	神経生理学　各論２（末梢神経系）	生理学的実験法２（電気生理学的手法）
１０	神経生理学　各論３（末梢神経系）	生理学的実験法３（心理生理学的手法）
１１	神経生理学　各論４（末梢神経系）	生理学的実験法４（その他の手法）
１２	神経生理学　各論１（中枢神経系）	文献輪読１
１３	神経生理学　各論２（中枢神経系）	文献輪読２
１４	神経生理学　各論３（中枢神経系）	臨床歯科医学への応用
１５	神経生理学　各論４（中枢神経系）	口腔生理学の他領域および周辺領域

到達目標

歯科医学の一分野としての口腔生理学の意義について理解し、その研究手法を応用し、各自の研究活動に利用できるようにする。

成績評価基準及び成績評価方法

レポート又は口頭試問

テキスト及び参考書

適宜指示する。または、随時プリント等を配付する。

授業科目名　口腔生理学実習Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各９０時間（週３コマ）

担当教員　　硲　哲崇、安尾敏明、岩田周介

目　　的

各種生理学的実験法を理解し、各自の研究活動に適応させる能力を身に付ける。

実習場所　　基礎系第２実習室、口腔科学共同研究所

内　　容

各種生理学実験手法のうち、特に口腔生理学領域に密接に関与する神経生理学及び感覚生理学の実験手法を実際に機器を操作することにより体得する。

到達目標

各種生理学実験手法を理解し、その手法を応用し、各自の研究活動に利用できるようにする。

成績評価基準及び成績評価方法

レポート又は口頭試問

授業科目名　口腔生理学実習Ⅲ・Ⅳ

開講時間数等　各９０時間（週３コマ）

担当教員　　硲　哲崇、安尾敏明、岩田周介

目　　的

各種生理学的実験法を理解し、各自の研究活動に適応させる能力を身に付ける。

実習場所　　基礎系第２実習室、口腔科学共同研究所

内　　容

各種生理学実験手法のうち、特に口腔生理学領域に密接に関与する神経生理学及び感覚生理学の実験手法

を実際に機器を操作することにより体得する。

到達目標

　各種生理学実験手法を理解し、その手法を応用し、各自の研究活動に利用できるようにする。

成績評価基準及び成績評価方法

　レポートまたは口頭試問

授業科目名　口腔生化学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各６０時間（週２コマ）

担当教員　　川木晴美

目　　的

細胞の構造と機能、生体物質の代謝動態を理解する。生体構成成分の糖質、脂質、タンパク質について学び、代謝回転、遺伝物質としての核酸とその情報伝達機構について理解する。生体のシグナル伝達機構（細胞内、ホルモン）を学び、免疫系も含めた生体防御機構を理解する。そして、基本的な遺伝子の営み(複製、修復、転写翻訳)について学び、遺伝性疾患の背景および、エピジェネティックな遺伝子制御などへの理解を深める。

内　　容

一般生化学、生化学関連の基礎事項について受講する。課題提出については別途指示する。

授業計画

	口腔生化学Ⅰ（前学期）	口腔生化学Ⅱ（後学期）
1	細胞の構造	シグナル伝達総論
2	細胞骨格	受容体の種類と局在
3	細胞骨格タンパク質の標識と観察法	ホルモンの種類と作用、解析法１
4	細胞内小器官１	ホルモンの種類と作用、解析法２
5	細胞内小器官２　標識法	サイトカインの種類と作用、解析法１
6	細胞増殖と細胞周期	サイトカインの種類と作用、解析法２
7	細胞小器官、細胞周期、細胞増殖解析法１	その他の生理活性物質
8	細胞小器官、細胞周期、細胞増殖解析法２	細胞内シグナル伝達
9	アポトーシスとその解析法	シグナル伝達分子の解析法１
10	代謝総論	シグナル伝達分子の解析法２
11	糖代謝	シグナル伝達分子の解析法３
12	解糖系とその解析法	シグナル伝達分子の解析法４
13	ATP 産生経路と ATP の検出	シグナル伝達分子の解析法５
14	その他の代謝系１	シグナル伝達分子の解析法６
15	その他の代謝系２	シグナル伝達分子の解析法７

到達目標

細胞(細胞骨格、細胞内小器官)や細胞外マトリックスの構造及び細胞増殖、アポトーシスの機構について概説できる。生体の代謝(糖質、脂質タンパク質、核酸)、エネルギー代謝について概説できる。細胞内シグナル伝達機構、内分泌系、免疫系を解した生体防御機構を説明できる。遺伝子の営みを理解し、遺伝性疾患について概説できる。エピジェネティックな遺伝子制御について説明できる。

成績評価基準及び成績評価方法

試験５０％、課題（レポート等）５０％

テキスト及び参考書

レーニンジャーの新生化学（廣川書店）上/下、スタンダード生化学・口腔生化学(学建書院)、ビジュアル生化学・分子生物学（日本医事新報社）

授業科目名　口腔生化学Ⅲ・Ⅳ

開講時間数等　各６０時間（週２コマ）

担当教員　　川木晴美

目　　的

口腔環境（唾液、プラーク、歯石）の形成や性質についての理解を深める。生体のカルシウム代謝や、硬組織の発生、分化、石灰化、骨形成異常について学ぶ。

内　　容

一般生化学・口腔生化学の基礎事項について受講する。課題提出については別途指示する。

授業計画

	口腔生化学Ⅲ（前学期）	口腔生化学Ⅳ（後学期）
1	口腔環境総論	硬組織形成総論
2	唾液分泌のメカニズム１	間葉系からの分化と転写因子
3	唾液分泌のメカニズム２	転写因子の解析法
4	唾液の組成	軟骨細胞の分化機構
5	唾液の有機成分１	軟骨形成に関わる因子と研究例
6	唾液の有機成分２	骨芽細胞分化に関わる因子と研究例
7	唾液の有機成分３	骨細胞の特徴と機能
8	唾液の無機成分	骨細胞の研究例
9	プラークの生化学的特性	破骨細胞の分化調節機構
10	歯石の生化学的特性	破骨細胞の研究例
11	生化学的にみた歯周組織の組成	血清カルシウムとリンの調節機構
12	歯肉溝浸出液	PTH の作用
13	唾液や歯垢を検体とそして用いた研究例１	カルシトニンの作用
14	唾液や歯垢を検体とそして用いた研究例２	ビタミンDの作用
15	唾液や歯垢を検体とそして用いた研究例３	リンの代謝と骨細胞

到達目標

唾液の分泌メカニズム、組成、性状について説明できる。口腔内環境、プラーク、歯石について説明できる。歯周組織の構造と機能について概説できる。結合組織(骨、軟骨、歯周組織、軟骨、エナメル質と象牙質)の発生、分化について説明できる。骨の形成異常や疾患について説明できる。血清カルシウムの恒常性（ビタミン、ホルモン調節）を理解し、硬組織の石灰化機構について説明できる。

成績評価基準及び成績評価方法

試験　５０％　課題（レポート等）５０％

テキスト及び参考書

レーニンジャーの新生化学（廣川書店）　上/下、スタンダード生化学・口腔生化学(学建書院)、ビジュアル生化学・分子生物学（日本医事新報社)、口腔生化学(医歯薬出版)

授業科目名　口腔生化学実習Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各９０時間（週３コマ）

担当教員　　川木晴美

目　　的

講義で学んだ、生化学研究に必要な基礎技能を、特に細胞培養、血液、脂質、タンパク質等の生体材料の取り扱いと検査法ついて体験し理解を深める。また、化学論文形式のレポートを作成し、論理的なデータ整理や思考法を習得する。

実習場所　　基礎系第 2 実習室、または生化学研究室

内　　容

培養細胞の取り扱いを習得する。血液の働き、血球計算版の扱いから、特異抗体とフローサートメトリーを用いた血球の分類法を実施見学する。細胞や組織よりタンパク質を抽出し、抗体を用いたタンパク質の解析を行う。

到達目標

培養室の無菌操作、細胞継代、保存法を習得する。血球の計算、フローサイトメトリーによる分類解析の原理を習得する。ウエスタンブロット法を行い、特異的なタンパク質の抽出と抗体を用いた解析技術を習得する。化学論文作成に必要な論理の流れを習得する。

成績評価基準及び成績評価方法

発表３０%、レポート７０％

授業科目名　口腔生化学実習Ⅲ・Ⅳ

開講時間数等　各９０時間（週３コマ）

担当教員　　川木晴美

目　　的

講義で学んだ、生化学研究に必要な基礎技能を、特に遺伝子の取り扱いについての理解を深める。科学論文形式のレポートを作成し、論理的な整理や思考法を会得する。

実習場所　　基礎系第 2 実習室、または生化学研究室

内　　容

遺伝子工学で多用するリアルタイム PCR 法を理解する。あらかじめ抽出した核酸を用いてリアルタイム PCR を実施し、その解析法、さらに DNA 配列解析技術を学び、遺伝子データベースの取り扱いに慣れる。

到達目標

リアルタイム PCR や DNA シークエンスなど一連の技術を理解する。PCR の原理と応用技術を理解する。遺伝子配列解析及び遺伝子データベースへのアクセスと応用に習熟する。

成績評価基準及び成績評価方法

発表３０％、レポート７０％

授業科目名　口腔病理学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各６０時間（週２コマ）

担当教員　　永山元彦、落合隆永、江原道子

目　　的

病因が作用した結果生じる生体の変化について形態的変化を中心に、その詳細を分子レベルまで掘り下げた理解と研究課題の検索できる能力を養う。

内　　容

①疾病の共通した生体にみられる現象について研究レベルを含めて理解する。

②口腔に特有の疾患の種類とその病態について研究レベルで解明されている内容を理解する。

授業計画

	口腔病理学Ⅰ（前学期）	口腔病理学Ⅱ（後学期）
1	疾病の種類とその病態１	免疫応答のしくみ１
2	疾病の種類とその病態２	免疫応答のしくみ２
3	口腔疾患の種類１	再生と修復反応のしくみ１
4	口腔疾患の種類２	再生と修復反応のしくみ２
5	疾病の原因１	炎症反応と口腔の炎症性疾患の病態１
6	疾病の原因２	炎症反応と口腔の炎症性疾患の病態２
7	疾病発症の機転１	腫瘍の病因と病態１
8	疾病発症の機転２	腫瘍の病因と病態２
9	疾病の経過における生体変化１	歯原性腫瘍の種類と病態１
１０	疾病の経過における生体変化２	歯原性腫瘍の種類と病態２
１１	傷害性変化と応答性変化１	唾液腺腫瘍の種類と病態１
１２	傷害性変化と応答性変化２	唾液腺腫瘍の種類と病態２
１３	傷害性変化の病態像（退行性病変）１	非歯原性腫瘍の種類と病態１
１４	傷害性変化の病態像（退行性病変）２	非歯原性腫瘍の種類と病態２
１５	免疫応答の概説	嚢胞と嚢胞性疾患の種類と病態

到達目標

口腔に生じる疾患の中で、現在まだ解明されていない病因、病態についてどのようなものがあり、それらを実際に形態的に捉える手法と解釈が理解できる。

成績評価基準及び成績評価方法

課題提出５０％、発表５０％

テキスト及び参考書

標準病理学、第６版（北川昌伸、仁木利郎編、医学書院、2019 年）

Robbins Basic Pathology, 10th Edition（Vinay Kuma, Abul Abbas, Jon Aster Ed, Elsevier, 2017）

授業科目名　口腔病理学Ⅲ・Ⅳ

開講時間数等　各６０時間（週２コマ）

担当教員　　永山元彦、落合隆永、江原道子

目　　的

病因が作用した結果生じる生体の変化について、その詳細を分子レベルまでに掘り下げた手段を用いて検索する手法を学ぶ。

内　　容

研究課題の検索から研究手法の習得までを学び、実際に行う研究準備に着手する。

授業計画

	口腔病理学Ⅲ（前学期）	口腔病理学Ⅳ（後学期）
1	病理組織学的検索方法の紹介１	口腔疾患の課題点と解決方法の考え方１
2	病理組織学的検索方法の紹介２	口腔疾患の課題点と解決方法の考え方２
3	免疫組織化学的検索法の紹介１	実験結果からの解釈方法実例１
4	免疫組織化学的検索法の紹介２	実験結果からの解釈方法実例２
5	分子生物学的研究法の紹介１	口腔の炎症性疾患における研究課題１
6	分子生物学的研究法の紹介２	口腔の炎症性疾患における研究課題２
7	In situ hybridization法の紹介１	再生・修復における研究課題１
8	In situ hybridization法の紹介２	再生・修復における研究課題２
9	病理組織切片作製法の紹介１	歯原性腫瘍における研究課題１
１０	病理組織切片作製法の紹介２	歯原性腫瘍における研究課題２
１１	動物実験の手法と器具の紹介１	唾液腺腫瘍における研究課題１
１２	動物実験の手法と器具の紹介２	唾液腺腫瘍における研究課題２
１３	分析機器の種類と取り扱い方法の紹介１	非歯原性腫瘍における研究課題１
１４	分析機器の種類と取り扱い方法の紹介２	非歯原性腫瘍における研究課題２
１５	分析機器の種類と取り扱い方法の紹介３	求められる大学院研究の姿

到達目標

口腔に生じる疾患の中で、現在まだ解明されていない病因、病態についてどのようなものがあり、それらをどのように、どの方法で解明されているのかを理解し、最終的には臨床に発展応用できる研究とその成果が発表できる。

成績評価基準及び成績評価方法

課題提出５０％、発表５０％

テキスト及び参考書

標準病理学、第6版（北川昌伸、仁木利郎編、医学書院、2019年）

Robbins Basic Pathology, 10th Edition（Vinay Kuma, Abul Abbas, Jon Aster Ed, Elsevier, 2017）

授業科目名　口腔病理学実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ

開講時間数等　各９０時間（週３コマ）

担当教員　　永山元彦、落合隆永、江原道子

目　　的

病因が作用した結果生じる生体の変化について実際に顕微鏡を用いた実習や動物実験などから、形態的変化を中心に理解する能力を高める。

実習場所　　口腔病理学研究室

内　　容

病理学で扱う病理組織標本の作成と観察を行う。固定からパラフィン包埋までの過程とパラフィン薄切切片の作成手技を身につけ、さらに様々な染色方法について学ぶ。特にヘマトキシリン・エオジン染色、免疫組織化学的染色、in situ hybridization などの染色については原理、手技などを含めて習得する。

到達目標

口腔に生じる疾患の病因、病態を形態的に検索する手段について、それらを理解し、研究の実施に備える実力を習得する。

成績評価基準及び成績評価方法

出席点５０％、発表５０％

テキスト及び参考書

標準病理学、第 6 版（北川昌伸、仁木利郎編、医学書院、2019 年）

Robbins Basic Pathology, 10th Edition（Vinay Kuma, Abul Abbas, Jon Aster Ed, Elsevier, 2017）

授業科目名　歯科薬理学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ

開講時間数等　各６０時間（週２コマ）

担当教員　　佐藤慶太郎

目　　的

薬物の治療効果と作用機序との関連を分子レベルで理解する。

内　　容

講義による学習

授業計画

	歯科薬理学Ⅰ・Ⅲ（前学期）	歯科薬理学Ⅱ・Ⅳ（後学期）
１	薬物療法学１	薬物作用機序１
２	薬物療法学２	薬物作用機序２
３	薬物療法学３	薬物作用機序３
４	薬物療法学４	薬物作用機序４
５	薬物療法学５	薬物作用機序５
６	薬物療法学６	薬物作用機序６
７	薬物療法学７	薬物作用機序７
８	薬物療法学８	薬物作用機序８
９	薬物療法学９	薬物作用機序９
１０	薬物療法学１０	薬物作用機序１０
１１	薬物療法学１１	薬物作用機序１１
１２	薬物療法学１２	薬物作用機序１２
１３	薬物療法学１３	薬物作用機序１３
１４	薬物療法学１４	薬物作用機序１４
１５	薬物療法学１５	薬物作用機序１５

到達目標

薬物療法の種類と薬理作用の機序が理解できる。

成績評価基準及び成績評価方法

小テスト１０％、試験・討論９０％

テキスト及び参考書

グッドマン・ギルマン薬理書

授業科目名　歯科薬理学実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ

開講時間数等　各９０時間（週３コマ）

担当教員　　佐藤慶太郎

目　　的

細胞機能と薬物による制御機構を理解する。

実習場所　　歯科薬理学研究室

内　　容

講義と実習による学習

授業計画

	歯科薬理学実習Ⅰ～Ⅳ
１～６	薬物の種類と効果の判定方法
７～１２	動物実験の歴史と新規薬物の創出
１３～１８	実験動物を利用した外分泌機能の評価
１９～２４	組織細胞を利用した平滑筋収縮機構の解析
２５～３０	薬物の動態と有害作用
３１～３６	パソコンを使用した薬理シュミレーション実験

３７～４２	論文のまとめ方
４３～４５	自己データに対する討論

到達目標

細胞機能と薬物による制御機構を説明できる。

成績評価基準及び成績評価方法

小テスト１０％、試験・討論９０％

テキスト及び参考書

グッドマン・ギルマン薬理書／Molecular Cloning

授業科目名　解剖学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各６０時間（週２コマ）

担当教員　　薗村貴弘

目　　的

人体の頭頸部の肉眼解剖学を系統的な講義と臨床的局所解剖学の講義をその相違点も踏まえて複合的に理解する。

内　　容

テキスト参考書とともに、スライド及び配付プリントを用いた解説講義を行う。前学期・後学期の最後には学んだ内容をまとめパワーポイントで発表する。

授業計画

	解剖学Ⅰ（前学期）	解剖学Ⅱ（後学期）
１	頭頸部の骨学	系統解剖学と局所解剖学の違い
２	骨学スケッチ演習（1）	頸部の局所解剖（皮膚～舌骨下筋群）
３	骨学スケッチ演習（2）	頸部の局所解剖（頸部の神経根まで）
４	頭頸部の筋学	咽頭の局所解剖
５	頭頸部の脈管学	喉頭の局所解剖
６	頭頸部の末梢神経学（1）	頭部外側からの局所解剖（翼突下顎隙）
７	頭頸部の末梢神経学（2）	頭部外側からの局所解剖（側頭下窩深部）
８	頭頸部の末梢神経学（3）	頭部内側からの局所解剖（鼻腔と副鼻腔）
９	頭頸部の自律神経系	頭部内側からの局所解剖（口蓋筋）
１０	頸部の内臓学（甲状腺、唾液腺）	脳の表面解剖（髄膜）
１１	口腔内の内臓学（唾液腺、扁桃等）	脳の表面解剖（血管）
１２	口腔内の内臓学（舌と舌筋と舌の神経）	脳の表面解剖（脳回と脳溝）
１３	咽頭の内臓学	脳の表面解剖（脳底部・脳神経）
１４	喉頭の内臓学	脊髄の表面解剖（血管、神経根）
１５	学習成果発表	学習成果発表

到達目標

人体の頭頸部の解剖学的構造を、まず、骨、筋、脈管、神経などの系統別に理解し、それらの相互的な位置関係を含めた局所解剖を複合的に説明することができる。

成績評価基準及び成績評価方法

レポート５０％、発表５０％

テキスト及び参考書

エッセンシャル解剖学テキスト&アトラス（南江堂）

授業科目名　解剖学Ⅲ・Ⅳ

開講時間数等　各６０時間（週２コマ）

担当教員　　薗村貴弘

目　　的

中枢神経系の形態および機能を最新の知見を踏まえて理解する。

内　　容

スライド及び配布プリントを用いた解説講義を行う。

前学期・後学期の最後には学んだ内容をまとめパワーポイントで発表する。

授業計画

	解剖学Ⅲ（前学期）	解剖学Ⅳ（後学期）
1	神経系総論	中枢神経系の進化
2	神経系の発生	中枢神経系の比較解剖学

３	髄膜	運動、行動、習性
４	脳室	感覚、認知、情動、学習・記憶、報酬系
５	中枢神経系の脈管	神経科学の形態学的研究手法とその歴史
６	脊髄	ゴルジ染色、変性鍍銀法
７	延髄と橋	順向性および逆行性トレーサー
８	中脳	単一神経細胞軸索追跡法
９	小脳	行動解析法
１０	間脳	細胞内記録法
１１	終脳	細胞外記録法
１２	伝導路総論	分子生物学的脳研究法
１３	感覚性伝導路	ブレインマシーンインターフェイス
１４	運動性伝導路	電子顕微鏡シナプス解析とコネクトミクス解析
１５	学習成果発表	学習成果発表

到達目標

中枢神経系の基本構成、機能と形態、その実験手法を説明することができる。

成績評価基準及び成績評価方法

レポート５０％、発表５０％

テキスト及び参考書

ハインズ神経解剖学アトラス（メディカルサイエンスインターナショナル）

授業科目名　解剖学実習Ⅰ（研究方法実習）

開講時間数等　各９０時間（週３コマ）

担当教員　　薗村貴弘

目　　的

研究遂行に必要な、実験動物の扱い方、固定、包埋、薄切、染色方法を習得する。

実習場所　　解剖実習室

内　　容

実験動物舎における実験動物の飼育管理について学ぶ。実験に供した動物の固定方法（灌流固定、浸漬固定)、固定液の調整法、目的に応じた包埋樹脂の選択と薄切方法を学ぶ。さらに薄切切片の染色方法（組織化学的染色、免疫組織化学的染色等）について実習しレポートを提出する。

到達目標

研究目的に合った実験動物の選択、飼育管理、実験後の動物の試料作製ができる。

成績評価基準及び成績評価方法

レポート１００％

テキスト及び参考書

図解・実験動物技術書Ⅰ（アドスリー）

染色・バイオイメージング実験ハンドブック（羊上社）

授業科目名　解剖学実習Ⅱ（各種顕微鏡実習）

開講時間数等　各９０時間（週３コマ）

担当教員　　薗村貴弘

目　　的

骨組織の微細構造を研究する為に、各種顕微鏡の使用方法とそれから得られた所見の解釈を学ぶ。

実習場所　　解剖実習室

内　　容

透過電顕(TEM)、走査電顕(SEM)、共焦点レーザー顕微鏡(CLSM)、マイクロ CT(μCT) などを用いて骨組

織を観察し、これら観察装置によって得られた所見の見方をトレーニングする。
到達目標
　透過電顕(TEM)、走査電顕(SEM)、共焦点レーザー顕微鏡(CLSM)、マイクロ CT(μCT) などを用いて骨組織を観察し、所見を得ることができる。
成績評価基準及び成績評価方法
　レポート５０%、発表５０%
テキスト及び参考書
　よくわかる電子顕微鏡技術（朝倉書店）
　バイオイメージングの最先端（先端医療技術研究所）

授業科目名　解剖学実習Ⅲ（人体解剖実習）
開講時間数等　各９０時間（週３コマ）
担当教員　　薗村貴弘
目　　的
　正常な人体の構造について肉眼解剖学的に諸器官の形態学的特徴と空間的結合・配列をその機能と関連づけて学ぶ。
実習場所　　解剖実習室
内　　容
　人体の各臓器・器官を肉眼解剖学的に剖出し、その構造を観察し理解する。
到達目標
　人体の正常な形態と構造について学び、形態の奥にひそむ生物学的法則を発見し、個々の形態学的事象を整理し系統立て理解する。
成績評価基準及び成績評価方法
　レポート１００%
テキスト及び参考書
　実習解剖学（南江堂）

授業科目名　解剖学実習Ⅳ（組織学実習）
開講時間数等　各９０時間（週３コマ）
担当教員　　薗村貴弘
目　　的
　人体を構成する様々な組織器官および細胞の構造と機能を理解する。
実習場所　　解剖実習室
内　　容
　人体の組織標本の各細胞、組織を光学顕微鏡下で観察しレポートを提出する。殊に人体を構成する神経組織を重点的に観察する。
到達目標
　組織は細胞から構成されていることを理解し、各組織における細胞および細胞間マトリックスの構造的特徴が理解できる。
成績評価基準及び成績評価方法
　レポート１００%
テキスト及び参考書
　組織学（南山堂）
　標準組織学総論・各論（医学書院）

授業科目名　口腔解剖学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各６０時間（週２コマ）

担当教員　　諏訪部　武

目　　的

口腔の構造、人体の発生過程、および口腔組織とその発生過程について理解し、口腔解剖学研究に必要な基礎的知識を習得する。

内　　容

口腔解剖学、発生学、および口腔組織発生学の講義を行う。

授業計画

	口腔解剖学Ⅰ（前学期）	口腔解剖学Ⅱ（後学期）
1	口腔解剖学概論１	口腔組織発生学６
2	口腔解剖学概論２	口腔組織発生学７
3	口腔解剖学概論３	口腔組織発生学８
4	口腔解剖学概論４	口腔組織発生学９
5	口腔解剖学概論５	口腔組織発生学 10
6	発生学１	口腔組織発生学 11
7	発生学２	口腔解剖学研究の潮流１
8	発生学３	口腔解剖学研究の潮流２
9	発生学４	口腔解剖学研究の潮流３
１０	発生学５	口腔解剖学研究の潮流４
１１	口腔組織発生学１	口腔解剖学研究の潮流５
１２	口腔組織発生学２	文献輪読１
１３	口腔組織発生学３	文献輪読２
１４	口腔組織発生学４	文献輪読３
１５	口腔組織発生学５	他の研究領域との関連

到達目標

口腔の構造、人体の発生過程、および口腔組織とその発生過程について説明できる。

成績評価基準及び成績評価報方法

小テスト５０％、レポート２５％、口頭試問２５％

テキスト及び参考書

口腔解剖学（医歯薬出版）、ラングマン人体発生学（メディカル・サイエンス・インターナショナル）、口腔組織発生学（医歯薬出版）

授業科目名　口腔解剖学Ⅲ・Ⅳ

開講時間数等　各６０時間（週２コマ）

担当教員　　諏訪部　武

目　　的

口腔の構造と機能について理解し、口腔解剖学研究の動物実験計画の立案と動物実験の実施に必要な知識を習得する。

内　　容

口腔機能にかかわる神経解剖学の講義を行う。

授業計画

	口腔解剖学Ⅲ（前学期）	口腔解剖学Ⅳ（後学期）
1	口腔の構造と機能１	口腔機能の解剖学 総論１
2	口腔の構造と機能２	口腔機能の解剖学 総論２

3	神経解剖学 総論１	口腔機能の解剖学 各論１（体性感覚）
4	神経解剖学 総論２	口腔機能の解剖学 各論２（体性感覚）
5	神経解剖学 総論３	口腔機能の解剖学 各論３（特殊感覚）
6	神経解剖学 総論４	口腔機能の解剖学 各論４（特殊感覚）
7	神経解剖学 総論５	口腔機能の解剖学 各論１（唾液分泌）
8	神経解剖学 各論１（末梢神経系）	口腔機能の解剖学 各論２（唾液分泌）
9	神経解剖学 各論２（末梢神経系）	口腔機能の解剖学 各論１（顎運動・咀嚼運動）
１０	神経解剖学 各論３（末梢神経系）	口腔機能の解剖学 各論２（顎運動・咀嚼運動）
１１	神経解剖学 各論４（末梢神経系）	実験方法１（組織学的手法）
１２	神経解剖学 各論１（中枢神経系）	実験方法２（生理学的手法）
１３	神経解剖学 各論２（中枢神経系）	文献輪読１
１４	神経解剖学 各論３（中枢神経系）	文献輪読２
１５	神経解剖学 各論４（中枢神経系）	臨床歯科医学への応用

到達目標

口腔機能にかかわる神経機構について説明できる。

成績評価基準及び成績評価報方法

小テスト５０％、レポート２５％、口頭試問２５％

テキスト及び参考書

口腔解剖学（医歯薬出版）、基礎歯科生理学（医歯薬出版）

授業科目名　口腔解剖学実習Ⅰ～Ⅳ（口腔解剖学）

開講時間数等　各９０時間（週３コマ）

担当教員　　諏訪部　武

目　　的

口腔機能にかかわる神経機構の研究手法の基本を習得する。

実習場所　　口腔解剖学研究室、口腔科学共同研究所

内　　容

実験動物の取り扱い、組織の固定・包埋・薄切・染色、および口腔機能解析のための生理学的手法を学ぶ。

到達目標

実験動物の飼育管理、組織標本の作製および口腔機能の解析ができる。

成績評価基準及び成績評価報方法

口頭試問５０％、実技３０％、レポート２０％

授業科目名　口腔微生物学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各６０時間（週２コマ）

担当教員　　引頭　毅、堂前英資

目　　的

医療における感染症の重要性は明白であるが、わが国の超高齢社会化により、そして相次ぐ新興感染症や薬剤耐性微生物の出現により、感染症をとり巻く状況はより複雑化している。また歯科医学では口腔微生物と全身疾患との関わりが注目されるようなり、これに関連して歯周医学が確立されてきた。このような背景を踏まえながら微生物学・口腔微生物学を学び、口腔感染症の治療、診断ならびに予防に役立つ知見の習得を目指す。

内　　容

感染症の原因となる病原微生物と宿主との関係について、感染症の種類や特徴、病原微生物の特徴、常在微生物叢の成立、感染症の制御などについて学びながら理解を深めていく。

授業計画

	口腔微生物学Ⅰ（前学期）	口腔微生物学Ⅱ（後学期）
１	微生物学の歴史とその意義	病原細菌と細菌感染症①
２	微生物の分類と特徴	病原細菌と細菌感染症②
３	微生物の病原因子	病原細菌と細菌感染症③
４	微生物叢の成立	病原細菌と細菌感染症④
５	細菌の性質①	病原ウイルスとウイルス感染症①
６	細菌の性質②	病原ウイルスとウイルス感染症②
７	細菌と感染症①	病原ウイルスとウイルス感染症③
８	ウイルスの性質①	腫瘍ウイルス、プリオンとプリオン病
９	ウイルスの性質②	感染症の検査と診断①
１０	真菌の性質	感染症の検査と診断②
１１	原虫の性質	感染症の治療①
１２	微生物の感染機構①	感染症の治療②
１３	微生物の感染機構①	感染症の現状と対策①
１４	感染源と感染経路	感染症の現状と対策②
１５	消毒と滅菌	感染症の現状と対策③

到達目標

感染症の原因となる病原微生物と宿主との関係について、微生物学的、免疫学的、遺伝学的、ならびに分子生物学的観点から理解し、説明できる。

成績評価基準及び成績評価方法

授業態度３０％、学修成果発表３０％、レポート・試験４０％

講義では課題について議論し、学修事項を発表する。また、学修内容をレポートとして提出する。

テキスト及び参考書

別途指示する。

授業科目名　口腔微生物学Ⅲ・Ⅳ

開講時間数等　各６０時間（週２コマ）

担当教員　　引頭　毅、堂前英資

目　　的

医療における感染症の重要性は明白であるが、わが国の超高齢社会化により、そして相次ぐ新興感染症や

薬剤耐性微生物の出現により、感染症をとり巻く状況はより複雑化している。また歯科医学では口腔微生物と全身疾患との関わりが注目されるようなり、これに関連して歯周医学が確立されてきた。このような背景を踏まえながら微生物学・口腔微生物学を学び、口腔感染症の治療、診断ならびに予防に役立つ知見の習得を目指す。

内　　容

口腔微生物学について、口腔微生物の特徴、口腔微生物叢の成立、口腔感染症の種類や特徴、口腔感染症の制御、口腔の免疫機構などについて学びながら理解を深めていく。

授業計画

	口腔微生物学Ⅲ（前学期）	口腔微生物学Ⅳ（後学期）
1	口腔微生物学の歴史とその意義	歯垢とバイオフィルム
2	口腔微生物の分類と特徴	歯垢と歯垢形成細菌①
3	口腔環境と口腔微生物	歯垢と歯垢形成細菌②
4	口腔微生物叢の成立①	歯石
5	口腔微生物叢の成立②	齲蝕と齲蝕原性細菌
6	口腔の免疫機構①	齲蝕原性細菌と病原因子
7	口腔の免疫機構②	齲蝕の予防戦略
8	口腔微生物－細菌と感染症①	歯周病と歯周病原細菌
9	口腔微生物－細菌と感染症②	歯周病原細菌と病原因子①
１０	口腔微生物－細菌と感染症③	歯周病原細菌と病原因子②
１１	口腔微生物－細菌と感染症④	歯周病の免疫学
１２	口腔微生物－ウイルスと感染症①	歯周病の予防戦略
１３	口腔微生物－ウイルスと感染症②	歯周病と全身疾患①
１４	口腔微生物－真菌と感染症	歯周病と全身疾患②
１５	口腔微生物－原虫と感染症	口腔微生物学の未来

到達目標

口腔微生物と口腔感染症について、微生物学的、免疫学的、遺伝学的、ならびに分子生物学的観点から理解し、説明できる。

成績評価基準及び成績評価方法

授業態度３０％、学修成果発表３０％、レポート・試験４０％

講義では課題について議論し、学修事項を発表する。また、学修内容をレポートとして提出する。

テキスト及び参考書

別途指示する。

授業科目名　口腔微生物学実習Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各９０時間（週３コマ）

担当教員　　引頭　毅、堂前英資

目　　的

微生物は身近な常在微生物でさえも、増殖すれば感染症を引き起こす危険性があることを認識することが大切であり、常に環境中にも、そして自分自身にさえも汚染・感染を引き起こす微生物が存在していることを理解することが重要である。また微生物検査では、検体から感染症の起因微生物を検出・同定したり、薬剤感受性試験を行うことにより、感染症の診断と治療に貢献することが求められる。本実習ではこれらに関連した微生物の取り扱いに関する基本的知識と技術の習得を目指す。

実習場所　　基礎系第２実習室

内　　容

微生物検査の技術と知識の根幹にあるのは無菌操作、培養法と感染防止策である。感染の危険性のある病原細菌を安全に取り扱う技術と培養法の基礎知識を学習し、それらの原理についても理解する。また感染防止策の基本である滅菌法および消毒法の基礎知識と技術を習得する。

到達目標

微生物検査に関連した微生物の取り扱いに関する知識について説明でき、技術を実践できる。

成績評価基準及び成績評価方法

微生物検査に関連した課題に取り組み、各項目について修得状況を評価する。

授業科目名　口腔微生物学実習Ⅲ・Ⅳ

開講時間数等　各９０時間（週３コマ）

担当教員　　引頭　毅、堂前英資

目　　的

口腔微生物学実習Ⅰ・Ⅱで修得した内容を基礎として、さらに高度な微生物検査の知識と実践的技術の修得を目指す。

実習場所　　基礎系第２実習室

内　　容

無菌操作、培養法と感染防止策を基礎としながら、薬剤感受性試験を含めた種々の微生物検査法について知識と原理、技術を修得する。

到達目標

微生物検査に関連した微生物の取り扱いに関する知識について説明でき、技術を実践できる。

成績評価基準及び成績評価方法

微生物検査に関連した課題に取り組み、各項目について修得状況を評価する。

授業科目名　歯科生体材料学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各６０時間（週２コマ）

担当教員　　澤田智史

目　　的

歯科生体材料の機械的性質、物理的性質、化学的性質及び生物学的性質に関する基礎的知識を習得し、生体親和性、耐久性の観点から材料を評価でき得る知識を養うことを目的とする。

内　　容

講義、文献の紹介並びにセミナーを通して歯科生体材料の機械的性質、物理的性質、化学的性質及び生物学的性質に関する基礎的知識を習得する。

授業計画

	歯科生体材料学Ⅰ（前学期）	歯科生体材料学Ⅱ（後学期）
１	歯科生体材料概論１	強度試験法の基礎
２	歯科生体材料概論２	強度試験法の応用例１
３	物質の構造	強度試験法の応用例２
４	高分子材料の基礎１	機器分析の基礎１
５	高分子材料の基礎２	機器分析の基礎２
６	高分子材料の応用例	機器分析の基礎３
７	セラミック材料の基礎１	化学的性質の評価法１
８	セラミック材料の基礎２	化学的性質の評価法２
９	セラミック材料の応用例	生物学的性質の評価法１
１０	金属材料の基礎１	生物学的性質の評価法２
１１	金属材料の基礎２	生体材料学概論１
１２	金属材料の応用例	生体材料学概論２
１３	複合材料の基礎１	生体材料学概論３
１４	複合材料の基礎２	材料の生体親和性評価Ⅰ
１５	複合材料の応用例	材料の生体親和性評価Ⅱ

到達目標

歯科生体材料の機械的性質、物理的性質、化学的性質及び生物学的性質を理解できる。

成績評価基準及び成績評価方法

内容に即した課題に対するレポート提出と口頭試問により評価する。

テキスト及び参考書

講義時に適時指示する。

授業科目名　歯科生体材料学Ⅲ・Ⅳ

開講時間数等　各６０時間（週２コマ）

担当教員　　澤田智史

目　　的

歯科生体材料の機械的性質、物理的性質、化学的性質及び生物学的性質に関する基礎的知識を習得し、生体親和性及び耐久性の観点から材料を評価でき得る知識を養うことを目的とする。

内　　容

講義、文献の解読・紹介並びにセミナーを通して歯科生体材料の機械的性質、物理的性質、化学的性質及び生物学的性質に関する基礎的知識及び評価法を習得する。

授業計画

	歯科生体材料学Ⅰ（前学期）	歯科生体材料学Ⅱ（後学期）
1	無機生体材料に関する論文輪読１	材料に関する選択論文の解読と解説１
2	無機生体材料に関する論文輪読２	材料に関する選択論文の解読と解説２
3	無機生体材料に関する論文輪読３	材料に関する選択論文の解読と解説３

4	無機生体材料に関する論文輪読４	材料に関する選択論文の解読と解説４
5	無機生体材料に関する論文輪読５	材料に関する選択論文の解読と解説５
6	無機生体材料に関する論文輪読６	材料に関する選択論文の解読と解説６
7	無機生体材料のまとめと解説講義	材料に関する選択論文の解読と解説７
8	有機生体材料に関する論文輪読１	材料評価に関する論文の解読と解説１
9	有機生体材料に関する論文輪読２	材料評価に関する論文の解読と解説２
１０	有機生体材料に関する論文輪読３	材料評価に関する論文の解読と解説３
１１	有機生体材料のまとめと解説講義	材料評価に関する論文の解読と解説４
１２	金属生体材料に関する論文輪読１	材料評価に関する論文の解読と解説５
１３	金属生体材料に関する論文輪読２	材料評価に関する論文の解読と解説６
１４	金属生体材料に関する論文輪読３	材料評価に関する論文の解読と解説７
１５	金属生体材料のまとめと解説講義	まとめと統括解説

到達目標

歯科生体材料の機械的性質、物理的性質、化学的性質、生物学的性質並びに評価法を理解できる。

成績評価基準及び成績評価方法

内容に即した課題に対するレポート提出と口頭試問により評価する。

テキスト及び参考書

講義時に適時指示する。

授業科目名　歯科生体材料学実習Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各９０時間（週３コマ）

担当教員　　澤田智史

目　　的

歯科生体材料の機械的性質、物理的性質、化学的性質及び生物学的性質について説明できる能力を身につける。また、歯科生体材料を生体親和性及び耐久性の観点からを評価する方法を習得する。

実習場所　　歯科理工学研究室、ESR 室、バイテク棟各実験室

内　　容

機器分析装置の使用法を実習並びに文献調査から学び、歯科生体材料の観察・評価を通して歯科生体材料の機械的性質、物理的性質、化学的性質及び生物学的性質に関する基礎的知識及び評価法を習得する。

授業計画

	歯科生体材料学Ⅰ（前学期）	歯科生体材料学Ⅱ（後学期）
1	X 線回折法の解説	熱分析装置(TG,TMA)使用法の説明
2	無機生体材料の X 線回折	無機生体材料の TG 測定と解釈
3	金属生体材料の X 線回折	有機生体材料の TG 測定と解釈
4	有機生体材料の X 線回折	無機生体材料の TMA 測定と解釈
5	走査型電子顕微鏡(SEM)の原理の解説	有機生体材料の TMA 測定と解釈
6	無機生体材料の SEM 観察と解釈	複合材料の TMA 測定と解釈
7	有機生体材料の SEM 観察と解釈	EPMA の原理と材料評価の解説
8	金属生体材料の SEM 観察と解釈	無機生体材料の EPMA 試料調整と観察
9	X 線マイクロ CT の原理と解説	有機生体材料の EPMA 試料調整と観察
１０	多孔体試料のマイクロ CT 撮影	金属生体材料の EPMA 試料調整と観察
１１	歯牙および硬組織のマイクロ CT 撮影	万能試験機の使用法と治具の調整
１２	ハイブリット(HB)顕微鏡の解説	無機生体材料の曲げ強度測定
１３	無機生体材料の HB 顕微鏡観察	無機生体材料の曲げ強度測定
１４	有機生体材料の HB 顕微鏡観察	複合材料の曲げ強度測定

１５	金属生体材料の HB 顕微鏡観察	まとめと統括解説

到達目標

歯科生体材料の機械的性質と物理的性質の評価法を理解できる。

成績評価基準及び成績評価方法

内容に即した課題に対するレポート提出と口頭試問により評価する。

テキスト及び参考書

講義時に適時指示する。

授業科目名　歯科生体材料学実習Ⅲ・Ⅳ

開講時間数等　各９０時間（週３コマ）

担当教員　　澤田智史

目　　的

歯科生体材料の機械的性質、物理的性質、化学的性質及び生物学的性質について説明できる能力を身につけ、歯科生体材料を生体親和性及び耐久性の観点からを評価する方法を習得する。

実習場所　　歯科理工学研究室、ESR 室、バイテク棟各実験室

内　　容

歯科生体材料の観察・評価法を実習、文献調査並びにセミナーから学び、歯科生体材料の機械的性質、物理的性質、化学的性質及び生物学的性質に関する基礎及び臨床的知識を習得する。

授業計画

	歯科生体材料学Ⅰ(前学期)	歯科生体材料学Ⅱ（後学期）
1	XPS の原理の解説講義	論文検索による生体材料評価セミナー１
2	論文検索による無機材料の XPS 評価	論文検索による生体材料評価セミナー２
3	論文検索による有機材料の XPS 評価	論文検索による生体材料評価セミナー３
4	論文検索による金属材料の XPS 評価	論文検索による生体材料評価セミナー４
5	材料評価に用いる XPS のセミナー	１～４セミナーのまとめと統括解説
6	L929 細胞の培養実習	セミナー１の内容発表
7	無機材料上の L929 細胞の SEM 観察	セミナー２の内容発表
8	金属材料上の L929 細胞の SEM 観察	セミナー３の内容発表
9	有機材料上の L929 細胞の SEM 観察	セミナー４の内容発表
１０	MC3T3 細胞の培養実習	セミナー１～４の発表に対する質疑応答
１１	無機材料上の MC3T3 細胞の SEM 観察	論文検索による
１２	金属材料上の MC3T3 細胞の SEM 観察	無機生体材料の曲げ強度測定
１３	有機材料上の MC3T3 細胞の SEM 観察	無機生体材料の曲げ強度測定
１４	細胞培養実習のまとめと結果発表１	複合材料の曲げ強度測定
１５	細胞培養実習のまとめと結果発表２	まとめと統括解説

到達目標

歯科生体材料の機械的性質と物理的性質の評価法を理解できる。

成績評価基準及び成績評価方法

内容に即した課題に対するレポート提出と口頭試問により評価する。

テキスト及び参考書

講義時に適時指示する。

副　専　攻　科　目

高度口腔医療科学コース

授業科目名　構造形態学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　薗村貴弘

目　　的

前学期には、人体の肉眼解剖学を系統的な講義と臨床的局所解剖学の講義を複合的に理解する。後学期には、中枢神経系の形態および機能を最新の知見を踏まえて理解する。

内　　容

テキスト参考書とともに、スライド及び配付プリントを用いた解説講義を行う。

前学期・後学期の最後には学んだ内容をまとめパワーポイントで発表する。

授業計画

	構造形態学Ⅰ(前学期)	構造形態学Ⅱ(後学期)
1	頭頸部の骨学	神経系総論
2	頭頸部の筋学	神経系の発生
3	頭頸部の脈管学	髄膜、脳室、中枢神経系の脈管
4	頭頸部の末梢神経学（1）	脊髄、延髄と橋、中脳
5	頭頸部の末梢神経学（2）	小脳
6	頭頸部の末梢神経学（3）	間脳、終脳
7	頸部の内臓学（甲状腺、唾液腺）	感覚性伝導路
8	口腔内の内臓学（唾液腺、扁桃、舌）	運動性伝導路
9	咽頭と喉頭の内臓学	中枢神経系の進化
10	頸部の局所解剖	中枢神経系の比較解剖学
11	咽頭・喉頭の局所解剖	高次脳機能、行動、習性、認知、情動、学習・記憶
12	頭部外側からの局所解剖	神経科学の形態学的研究手法とその歴史
13	頭部内側からの局所解剖	単一神経細胞軸索追跡法
14	脳の表面解剖（髄膜、血管、脳回と脳溝）	細胞内記録法と細胞外記録法
15	脳の表面解剖（脳底部、脳神経）	電子顕微鏡シナプス解析とコネクトミクス解析

到達目標

人体の頭頸部の解剖学的構造を、まず、骨、筋、脈管、神経などの系統別に理解し、それらの相互的な位置関係を含めた局所解剖を複合的に説明することができる。中枢神経系の基本構成、機能と形態、その実験手法を説明することができる。

成績評価基準及び成績評価方法

レポート５０％、発表５０％

テキスト及び参考書

エッセンシャル解剖学テキスト&アトラス（南江堂）

ハインズ神経解剖学アトラス（メディカルサイエンスインターナショナル）

授業科目名　硬組織生物学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　諏訪部　武

目　　的

唇裂、口蓋裂はヒト頭頸部領域の代表的な先天異常である。また、ヒトの唇裂や口蓋裂は不完全型から完全型までの多様な表現型を示すことが特徴である。本演習では顎・顔面の形態形成メカニズムおよび唇裂や口蓋裂の発症原因を詳しく理解することを目的とする。

内　　容

	顎・顔面の発生生物学Ⅰ（前学期）	顎・顔面の発生生物学Ⅱ（後学期）
1	顔面・口蓋の形成	口蓋突起内側縁上皮の消失の機序
2	口蓋裂の分類、口蓋の形成に関する仮説	統計解析
3	口蓋形成の発生学	胎生期の薬剤暴露と口唇口蓋裂
4	口蓋形成にかかわるシグナル総論	実験データの再現性と頑健性
5	遺伝学的エビデンス	ヒトの口唇口蓋裂の遺伝学
6	口蓋形成の機序に関する仮説	胎生期の薬剤の影響
7	薬剤・環境因子	細胞モデル
8	モデル動物	遺伝子発現と表現型との関連
9	口蓋棚の癒合とその評価	実験データの管理
１０	形態計測	研究計画の立案
１１	遺伝子発現解析	実験方法の組合せ
１２	口蓋裂の胎仔側の要因	予備実験の必要性
１３	薬理学的介入	研究倫理・動物福祉・安全管理
１４	遺伝子改変技術の応用	研究データの発表の準備
１５	発生期のシグナル分子の働き	研究結果の総括と学術論文の作成

到達目標

顎・顔面の正常形態形成メカニズムおよび顔面突起や口蓋突起の癒合の際に起こるプログラム細胞死（アポトーシス）と上皮–間葉分化転換の発生生物学的意義、および顎・顔面領域の先天異常の発症原因の詳細を理解する。

成績評価基準及び成績評価報方法

小テスト５０％、レポート２５％、口頭試問２５％

テキスト及び参考書

ラングマン人体発生学 第 12 版 T. W. Sadler 著

Human Embryology & Developmental Biology B. M. Carlson 著

関連する英文学術論文や英文総説は必要に応じて配付を予定している。

授業科目名　口腔機能学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　裕　哲崇、安尾敏明、岩田周介

目　　的

生理学・口腔生理学の基本知識を発展させ、より先進的な文献の購読を行うとともに、口腔機能の解析に必要な各種実験・検査手法を習得し、これらを用いてデータを獲得し、論文完成に至るまでの手法を理解する。さらには、これらの臨床歯科医学へ応用法を考察する。

内　　容

神経生理学並びに感覚生理学的な事項を中心とした口腔の各種機能について概説するとともに、歯科臨床に関わる生理学的事項についても触れる。

授業計画

	口腔機能学Ⅰ（前学期）	口腔機能学Ⅱ（後学期）
1	口腔機能学　概説１	感覚生理学　総論１
2	口腔機能学　概説２	感覚生理学　総論２
3	神経生理学　総論１	感覚生理学　各論１（体性感覚）
4	神経生理学　総論２	感覚生理学　各論２（特殊感覚）
5	神経生理学　総論３	生理学的検査法１（形態学的手法）
6	神経生理学　総論４	生理学的検査法２（電気生理学的手法）
7	神経生理学　総論５	生理学的検査法３（心理生理学的手法）
8	神経生理学　各論１（末梢神経系）	生理学的検査法４（その他の手法）
9	神経生理学　各論２（末梢神経系）	臨床歯科医学への応用　１
１０	神経生理学　各論３（末梢神経系）	臨床歯科医学への応用　２
１１	神経生理学　各論４（末梢神経系）	文献輪読１
１２	神経生理学　各論１（中枢神経系）	文献輪読２
１３	神経生理学　各論２（中枢神経系）	文献輪読３
１４	神経生理学　各論３（中枢神経系）	口腔機能学と周辺領域１
１５	神経生理学　各論４（中枢神経系）	口腔機能学と周辺領域２

到達目標

口腔生理学の研究によりもたらされた各種口腔機能検査法や実験手法を理解し、臨床への応用を考察できるものとする。

成績評価基準及び成績評価方法

レポート又は口頭試問

テキスト及び参考書

適宜指示する。または、随時プリント等を配付する。

授業科目名　口腔分子医化学　Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　川木晴美

目　　的

大学院副専攻科目として遺伝子、情報代謝を基礎に生活習慣病や再生医療などの今後の分子医化学について理解を深める。具体的には、応用分子医学(検査、遺伝性疾患、ゲノム創薬）について学ぶ。また、癌の原因、関連遺伝子について学び背景とメカニズム、アポトーシスと癌について分子生物学的背景を踏まえ理解を深める。さらに、老化のメカニズムを理解し、幹細胞及び口腔領域の再生医療や、siRNA および Crisper-cas9 などを用いた遺伝子制御技術について学ぶ。

内　　容

前学期では座学を中心に分子医学の基礎を受講する。後学期は基礎知識に根ざした論理的思考と表現力の涵養を目指し、課題調査研究に基づいた学生相互の発表と討論を中心にゼミを行う。

授業計画

	口腔分子医化学Ⅰ（前学期）	口腔分子医化学Ⅱ（後学期）
1	遺伝子と染色体	再生医療総論
2	DNA の特異的染色法と観察法	ES 細胞と体制幹細胞
3	DNA の複製機構	体性幹細胞を用いた再生医療
4	RNA の種類と構造	ES 細胞と iPS 細胞
5	転写とその調節機構	iPS 細胞を用いた研究例
6	翻訳機構	癌の生化学
7	遺伝子工学とその活用例１　DNA 解析	癌の病因論
8	遺伝子工学とその活用例２　RNA 解析１	癌遺伝子と癌抑制遺伝子
9	遺伝子工学とその活用例３　RNA 解析２	ノンコーディング RNA と癌研究
10	転写と翻訳過程の研究例	その他の癌研究
11	遺伝子疾患	老化の生化学
12	遺伝子・染色体検査法	生活習慣病の生化学１
13	ゲノム創薬	生活習慣病の生化学２
14	生化学的にみた分子標的薬１	脂肪細胞が産生する生理活性物質
15	生化学的にみた分子標的薬２	老化に関する研究例

到達目標

染色体と遺伝子や遺伝子の営み(複製、転写、翻訳、翻訳後修飾）について概説できる。遺伝子医学(染色体検査、遺伝子検査、遺伝疾患、ゲノム創薬）について概説できる。癌の生化学(癌遺伝子、癌抑制遺伝子、不死化、アポトーシス）について説明できる。老化過程(生活習慣病、遺伝子的成因）について概説できる。再生医療に関連する事項（体性、胚性幹細胞、口腔領域の再生医療）について説明できる。新規遺伝子工学技術について説明できる

成績評価基準及び成績評価方法

発表５０％、課題　５０％

テキスト及び参考書

Molecular Biology of the Cell (Garland Publishing ,Inc), 分子生物学講義中継１～３, (羊土社)、分子生物学(丸善)、レーニンジャーの新生化学（廣川書店）上/下、スタンダード生化学・口腔生化学(学建書院)

授業科目名　病理学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　永山元彦、落合隆永、江原道子

目　　的

病因が作用した結果生じる生体の変化について形態的変化を中心に、その詳細を分子レベルまで掘り下げた理解と研究課題の検索できる能力を養う。

内　　容

①疾病の共通した生体にみられる現象について研究レベルを含めて理解する。

②研究課題の検索から研究手法の習得までを学び、実際に行う研究準備に着手する。

授業計画

	病理学Ⅰ（前学期）	病理学Ⅱ（後学期）
1	疾病の種類とその病態	病理組織学的検索方法の紹介１
2	口腔疾患の種類	病理組織学的検索方法の紹介２
3	疾病の原因	免疫組織化学的検索法の紹介１
4	疾病発症の機転	免疫組織化学的検索法の紹介２
5	疾病の経過における生体変化	分子生物学的研究法の紹介１
6	傷害性変化と応答性変化	分子生物学的研究法の紹介２
7	傷害性変化の病態像（退行性病変）	In situ hybridization法の紹介１
8	免疫応答のしくみ	In situ hybridization法の紹介２
9	再生と修復反応のしくみ	病理組織切片作製法の紹介１
１０	炎症反応と口腔の炎症性疾患の病態	病理組織切片作製法の紹介２
１１	腫瘍の病因と病態	動物実験の手法と器具の紹介１
１２	歯原性腫瘍の種類と病態	動物実験の手法と器具の紹介２
１３	唾液腺腫瘍の種類と病態	分析機器の種類と取り扱い方法の紹介１
１４	非歯原性腫瘍の種類と病態	分析機器の種類と取り扱い方法の紹介２
１５	嚢胞と嚢胞性疾患の種類と病態	分析機器の種類と取り扱い方法の紹介３

到達目標

口腔に生じる疾患の中で、現在まだ解明されていない病因、病態についてどのようなものがあり、それらをどのように、どの方法で解明されているのかを理解し、最終的には臨床に発展応用できる。

成績評価基準及び成績評価方法

課題提出５０％、発表５０％

テキスト及び参考書

標準病理学　第５版（坂本穆彦 監修、医学書院、2015 年）

授業科目名　感染免疫学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　引頭　毅、堂前英資

目　　的

感染症を理解するためには病原微生物について理解を深めるのみならず、宿主の感染防御機構・免疫機構についても学ぶ必要性がある。また様々なバイオテクノロジーの根幹には免疫学的技術が使用されていることも忘れてはならない。このような背景を踏まえながら免疫学や免疫学的検査法に関連した知識を習得する。

内　　容

免疫機構について、特に微生物の感染から個体を守る生体防御反応について学びながら、免疫の基礎となる「自己と非自己の認識」の概念について理解を深めていく。またアレルギーを含めた免疫異常、免疫疾患についても学ぶ。さらに、免疫学的技術を応用した検査法や実験法についても学び、その原理を理解する。

授業計画

	感染免疫学Ⅰ（前学期）	感染免疫学Ⅱ（後学期）
１	免疫学の歴史とその意義	粘膜免疫①
２	免疫系とその基本要素	粘膜免疫②
３	免疫臓器とその役割	免疫寛容の仕組み①
４	免疫担当細胞の種類と役割①	免疫寛容の仕組み②
５	免疫担当細胞の種類と役割②	アレルギーとアレルギー疾患①
６	自然免疫系の仕組み①	アレルギーとアレルギー疾患②
７	自然免疫系の仕組み②	自己免疫と自己免疫疾患①
８	抗原提示の仕組み	自己免疫と自己免疫疾患②
９	獲得免疫系の仕組み①	免疫不全と免疫不全症
１０	獲得免疫系の仕組み②	MHC 分子の役割①―機能と多様性
１１	獲得免疫系の仕組み③	MHC 分子の役割②―移植と拒絶反応
１２	Ｔ細胞の種類と役割	免疫学的検査法①
１３	Ｔ細胞受容体の遺伝子再構成	免疫学的検査法②
１４	Ｂ細胞の役割とＢ細胞受容体	免疫学的技術を応用した実験法①
１５	Ｂ細胞受容体の遺伝子再構成と抗体産生	免疫学的技術を応用した実験法②

到達目標

免疫機構ならびに免疫学的技術について理解し、説明できる。

成績評価基準及び成績評価方法

授業態度３０％、学修成果発表３０％、レポート・試験４０％

講義では課題について議論し、学修事項を発表する。また、学修内容をレポートとして提出する。

テキスト及び参考書

別途指示する。

授業科目名　組織再生制御学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　佐藤慶太郎

目　　的

組織構築の分子メカニズムを理解する。

内　　容

講義による学習

授業計画

	組織再生制御学Ⅰ（前学期）	組織再生制御学Ⅱ（後学期）
１	組織構築メカニズム１	組織再生シグナル１
２	組織構築メカニズム２	組織再生シグナル２
３	組織構築メカニズム３	組織再生シグナル３
４	組織構築メカニズム４	組織再生シグナル４
５	組織構築メカニズム５	組織再生シグナル５
６	組織構築メカニズム６	組織再生シグナル６
７	組織構築メカニズム７	組織再生シグナル７
８	組織構築メカニズム８	組織再生シグナル８
９	組織構築メカニズム９	組織再生シグナル９
１０	組織構築メカニズム１０	組織再生シグナル１０
１１	組織構築メカニズム１１	組織再生シグナル１１
１２	組織構築メカニズム１２	組織再生シグナル１２
１３	組織構築メカニズム１３	組織再生シグナル１３
１４	組織構築メカニズム１４	組織再生シグナル１４
１５	組織構築メカニズム１５	組織再生シグナル１５

到達目標

組織再生分子機構と薬物による調節が理解できる。

成績評価基準及び成績評価方法

小テスト１０％、試験・討論９０％

テキスト及び参考書

グッドマン・ギルマン薬理書／Molecular Cloning

授業科目名　細胞分子薬理学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　佐藤慶太郎

目　　的

細胞機能と薬物による制御機構を理解する。

内　　容

講義による学習

授業計画

	細胞分子薬理学Ⅰ（前学期）	細胞分子薬理学Ⅱ（後学期）
１	細胞の種類と特徴１	機能調節薬物の機序１
２	細胞の種類と特徴２	機能調節薬物の機序２
３	細胞の種類と特徴３	機能調節薬物の機序３
４	細胞の種類と特徴４	機能調節薬物の機序４
５	細胞の種類と特徴５	機能調節薬物の機序５
６	細胞の種類と特徴６	機能調節薬物の機序６
７	細胞の種類と特徴７	機能調節薬物の機序７
８	細胞の種類と特徴８	機能調節薬物の機序８
９	細胞の種類と特徴９	機能調節薬物の機序９
１０	細胞の種類と特徴１０	機能調節薬物の機序１０
１１	細胞の種類と特徴１１	機能調節薬物の機序１１
１２	細胞の種類と特徴１２	機能調節薬物の機序１２
１３	細胞の種類と特徴１３	機能調節薬物の機序１３
１４	細胞の種類と特徴１４	機能調節薬物の機序１４
１５	細胞の種類と特徴１５	機能調節薬物の機序１５

到達目標

薬物療法の種類と薬理作用の機序が理解できる。

成績評価基準及び成績評価方法

小テスト１０％、試験・討論９０％

テキスト及び参考書

グッドマン・ギルマン薬理書／Molecular Cloning

授業科目名　口腔再建・再生材料学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　澤田智史

目　　的

口腔再建・再生材料の基礎的知識を習得し、生体との関わりから材料を評価でき得る知識を養うことを目的とする。

内　　容

講義、文献の輪読並びにセミナーを通して生体との関わりから口腔再建・再生材料を評価でき得る知識を養う。

授業計画

	口腔再建・再生材料学Ⅰ（前学期）	口腔再建・再生材料学Ⅱ（後学期）
１	口腔再建・再生材料学１	材料強度試験法の基礎
２	口腔再建・再生材料学２	材料強度試験法の応用例１
３	金属材料の基礎１	材料強度試験法の応用例２
４	金属材料の基礎２	細胞親和性評価法１
５	金属材料の基礎３	細胞親和性評価法２
６	金属材料の基礎４	細胞親和性評価法３
７	セラミック材料の基礎１	論文検索１
８	セラミック材料の基礎２	論文検索２
９	セラミック材料の基礎３	論文検索３
１０	高分子材料の基礎１	論文輪読１
１１	高分子材料の基礎２	論文輪読２
１２	高分子材料の基礎３	論文輪読３
１３	複合材料の基礎１	セミナー１
１４	複合材料の基礎２	セミナー２
１５	複合材料の基礎３	セミナーの総括解説

到達目標

口腔再建・再生材料を生体との関わりから評価できる。

成績評価基準及び成績評価方法

内容に即した課題に対するレポート提出と口頭試問により評価する。

テキスト及び参考書

講義時に適時指示する。

授業科目名　咀嚼機能制御材料評価学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　澤田智史

目　　的

咀嚼機能を回復・再生するために用いられる材料の基礎性質並びに力学的評価法を習得し、咀嚼機能制御の観点から材料を評価でき得る知識を養うことを目的とする。

内　　容

講義、文献の輪読並びにセミナーを通して、咀嚼機能制御の観点から材料を評価する。

授業計画

	咀嚼機能制御材料評価学Ⅰ（前学期）	咀嚼機能制御材料評価学Ⅱ（後学期）
１	咀嚼機能制御材料評価学概論１	硬組織と材料との界面評価１
２	咀嚼機能制御材料評価学概論２	硬組織と材料との界面評価２
３	金属材料強度試験法の基礎１	マイクロ CT の原理の解説
４	金属材料強度試験法の基礎２	硬組織のマイクロ CT 情報１
５	金属材料の相図と強度の関係１	硬組織のマイクロ CT 情報２
６	金属材料の相図と強度の関係２	マイクロ CT 情報と有限要素法１
７	セラミック材料強度試験法の基礎１	マイクロ CT 情報と有限要素法２
８	セラミック材料強度試験法の基礎２	論文検索１
９	セラミック材料強度試験法の基礎３	論文検索１の解説
１０	有限要素法計算の基礎	論文検索２
１１	有限要素法の強度計算について１	論文検索２の解説
１２	有限要素法の強度計算について２	論文検索３
１３	複合材料強度試験法の基礎１	論文検索３の解説
１４	複合材料強度試験法の基礎２	セミナー
１５	硬組織の強度評価法	セミナーの総括解説

到達目標

咀嚼機能制御材料の基礎的性質を把握しその性質評価に関する基礎的知識を習得する。

成績評価基準及び成績評価方法

内容に即した課題に対するレポート提出と口頭試問により評価する。

テキスト及び参考書

講義時に適時指示する。

授業科目名　疫学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　友藤孝明、東　哲司

目　　的

卒前教育で受けた知識を発展させ、すべてのライフステージにおける歯・口腔の健康の保持、増進に寄与できる専門医を育成する。

内　　容

地域社会における歯科医療のなかで、疫学的手法を用いて社会の健康保持・増進を進める方法論を学ぶ。。このとき、個人だけでなく集団を対象とした方法について考えられる能力や技術も身につける。

授業計画

	疫学Ⅰ（前学期）	疫学Ⅱ（後学期）
１	疫学概論	疾病リスクの考え方１
２	疫学の定義と歴史	疾病リスクの考え方２
３	疫学指標（a）　頻度の測定１	疫学要因１
４	疫学指標（a）　頻度の測定２	疫学要因２
５	疫学指標（a）　頻度の測定３	因果関係の判定
６	疫学指標（b）　頻度の比較１	疫学研究における誤差
７	疫学指標（b）　頻度の比較２	既存資料の利用
８	疫学指標（b）　頻度の比較３	スクリーニング
９	疫学研究方法の概要	サーベイランス
１０	観察研究１	疫学の臨床への応用
１１	観察研究２	感染症の疫学
１２	観察研究３	標本抽出
１３	介入研究１	疫学における統計処理
１４	介入研究２	歯科領域における疫学指標１
１５	介入研究３	歯科領域における疫学指標２

到達目標

専門性の高い研究者及び指導者となることを目標とする。日本口腔衛生学会の認定医の資格取得を目指すための高度な知識を修得する。

成績評価基準及び成績評価方法

発表６０％、レポート・試験４０％

自らの考えをまとめ、各講義後にレポートを作成し、発表する形式をとる。

テキスト及び参考書

別途指示する。

授業科目名　内科学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　八木信明

目　　的

歯科診療に必要な内科学の知識習得のため

内　　容

腸内細菌と各種疾患特に歯科領域の関係性について

授業計画

	内科学Ⅰ(前学期)	内科学Ⅱ(後学期)
1	腸内細菌と各種領域疾患の関係性	消化器内視鏡と AI の進歩

到達目標

今後の研究における広範囲な発想の育成と AI 技術に関する基礎的な理解を促す。

腸内細菌と各種領域疾患の理解から歯科疾患への応用の可能性を広げる

成績評価基準及び成績評価方法

出席点１００％、発表０％

テキスト及び参考書

特になし

授業科目名　外科学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　郭　泰彦

目　　的

脳神経外科学は歯科・口腔外科と係わりが多い。脳神経疾患を理解し、基礎診断能力の習得を目指す。

授業計画

	外科学Ⅰ(前学期)	外科学Ⅱ(後学期)
1	神経疾患の見方	脳神経疾患各論
2	医学英語論文の書き方１	医学英語論文の書き方２

到達目標

脳神経疾患の理解、診断能力を身につける。

救急救命の基礎の習得

医学英語論文　作成

成績評価基準及び成績評価方法

出席点５０％、発表５０％

テキスト及び参考書

特になし

口腔生命科学コース

授業科目名　硬組織再建学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　河野　哲

目　　的

卒前に学習した歯内療法学の知識をさらに発展させ、現在社会の新たなニーズにこたえられる先進的、独創的な教育者、研究者を養成し、さらに臨床においては専門分野の知識と技術を有する保存治療専門医を育成するために、最新の歯内療法を学ぶ。

内　　容

高齢化・疾病構造の多様化に伴い老齢者・有病者の治療頻度は増加する傾向にあり、より安全・安心な歯科治療法の開発が求められている。そのため効率的、確実な治療、長期間にわたる歯の保存は重要な課題となる。そこで本開講授業では①難治性根尖部病変に対する保存的組織再生療法の研究・開発に関して、再生のメカニズム、材料、治療技術について学ぶ。また、②亀裂歯や破折歯に対する再植法、接着法、接着材料に関する基礎的知識を学ぶ。さらに確実な治療をめざして③歯科用実体顕微鏡を用いた治療法の確立する目的で、顕微鏡を用いた歯科学について学ぶ。④治療時間の短縮には超音波の利用は不可欠であるため、これを用いた治療法と治療技術について学ぶ。

授業計画

	硬組織再建学Ⅰ（前学期）	硬組織再建学Ⅱ（後学期）
１	根管内器具の特性	歯髄・歯周組織の再生
２	根管拡大法の種類	生体材料を用いた歯髄再生
３	効率的な根管拡大	生体材料の根管充塡剤への応用
４	根管の拡大と根管形態の変化	生体材料の根尖外科への応用
５	効率的な根管清掃法	生体材料を用いた歯周組織再生
６	強電解酸性水の応用	歯内・歯周疾患への対応
７	根管清掃と根管内細菌の動向	亀裂・破折歯の再植
８	超音波を用いた根管清掃	再植歯の生着機構
９	超音波による効率的治療	歯科用実体顕微鏡を用いた歯内治療
１０	根管拡大と偶発症	歯科用実体顕微鏡の使用方法
１１	根管充塡剤の効率的除去法	マイクロサージェリーに使用する器具
１２	難治性根尖性歯周炎の治療①洗浄法	コーンビーム CT の読影と診断
１３	難治性根尖性歯周炎の治療②組織再生	歯科用実体顕微鏡とコーンビーム CT を用いた根尖外科
１４	実験器具・動物の取り扱い	歯内療法後の修復
１５	論文の読み方と書き方	歯根破折を防止する修復

到達目標

① 専門分野の研究論文を理解する。
② 研究論文を執筆する。
③ 歯内療法器具の特性を説明する。
④ 効率的な根管治療法を説明する。
⑤ 組織再生のメカニズムを理解する。
⑥ 組織再生のメカニズムを解明するための実験技法を説明する。
⑦ 根尖組織の治癒に関する実験手技を実践する。
⑧ 歯科用実体顕微鏡の使用法を理解する。
⑨ コーンビーム CT 画像を読影する。

⑩　再植歯の治癒について説明する。
⑪　破折歯の接着技法について理解する。

成績評価基準及び成績評価報方法

授業態度３０％、発表３０％、レポート・試験４０％

講義では、毎回、課題についての議論及び発表をしてもらいます。また、講義終了後は、議論した内容などをさらに分析、整理してレポートをまとめて提出してもらいます。

テキスト及び参考書

別途指示する。

授業科目名　歯周組織再建学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　辰巳順一　他

目　　的

歯周組織の構造や機能について組織再生医工学の知見から理解し、歯周組織再生のメカニズムをエビデンスベースで学習する。

内　　容

歯周組織再生に関わる細胞、環境(スキャホールド)、成長因子などについて十分に理解する。理解に必要な知識を主に論文から会得する。現在行われている再生療法をレビューし、条件と結果について考察する。また、医科領域における再生療法に関しても情報を収集し、将来的に期待される再生技術について考察し、歯周組織再生への応用を検討する。

授業計画

	歯周組織再建学Ⅰ（前学期）	歯周組織再建学Ⅱ（後学期）
1	歯周組織の構造	サイトカイン
2	歯肉結合組織の再生	リセプター
3	歯槽骨組織の再生	細胞分化
4	セメント質の再生	細胞増殖
5	再生に関わる細胞	成長因子
6	再生に関わる成長因子	再生を制御する因子
7	スキャホールド	ポリペプチドとタンパク
8	GTR	マトリックス成分
9	GBR	プロテオグリカンと多糖体
１０	オッセオインテグレーション	骨芽細胞
１１	自家骨移植	破骨細胞
１２	他家骨移植	ビスホスフォネート
１３	人工骨移植	PDGF, BMP
１４	併用療法	bFGF, EMD
１５	併用療法(2)	ボーンバンク

到達目標

・正常な歯周組織の組織学的検索を行うことができる。
・細胞の機能と応答について検索できる。
・細胞外マトリックスの作用と機能について検索する手技を会得している。
・歯周組織再生のメカニズムを評価する手技を会得している。
・インプラント治療に関する組織再生が理解できる。
・最新の再生療法の知識と技術を会得している。

成績評価基準及び成績評価方法

レポート５０％・試験５０％

実験および実習の遂行と得られた結果に対する考察ができているかを判断基準とする。

テキスト及び参考書

別途指示する。

授業科目名　口腔機能発育学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　齊藤一誠　他

目　　的

一般に新生児期、乳児期、幼児期及び思春期を含めて小児期と称される。この時期はヒトのライフサイクルの中で最も活発に成長発達を示す時期であり、歯科的にみても乳児期から思春期にかけての約１０年間に、乳歯萌出、乳歯列完成、吸収、脱落、歯列交換、混合歯列を経て永久歯列へとめまぐるしい成長発達を示す。もちろん、この間に歯と歯列を支える歯槽骨、顎骨、顎関節それらの機能をさせる咀嚼筋、神経並びに口腔の感覚器官、唾液腺の発達に伴って吸啜から咀嚼・嚥下運動、更に発音や味覚の発達などがみられる。これらの口腔諸機能の発達を理解する。

内　　容

無歯期から乳歯萌出、乳歯列完成、吸収、脱落、歯列交換、混合歯列を経て永久歯列へとめまぐるしい成長発達を示す時期の口腔諸機能の発達を理解するとともに、その発育障害を及ぼす疾病・異常の予防、継続的管理について具体的に説明するとともに相互に議論して理解を深める。

Schedule of lecture

	Development of Oral Function Ⅰ (first semester)	Development of Oral Function Ⅱ (second semester)
1	Conception of Development of Oral Function	Development of Jaw Movement 1
2	Systemic Development 1	Development of Jaw Movement 2
3	Systemic Development 2	Development of Jaw Movement 3
4	Dental Development 1	Radiographic Diagnosis
5	Dental Development 2	Radiographic Diagnosis
6	Cranio Facial Development 1	Dentistry for Handicapped Child 1
7	Cranio Facial Development 2	Dentistry for Handicapped Child 2
8	Suckling Development 1	Dentistry for Handicapped Child 3
9	Suckling Development 2	Space Maintenance 1
１０	Chewing Development 1	Space Maintenance 2
１１	Chewing Development 2	Occlusal Guidance 1
１２	Development of Swallowing 1	Occlusal Guidance 2
１３	Development of Swallowing 2	Occlusal Guidance 3
１４	Development of Speech 1	Occlusal Guidance 4
１５	Development of Speech 2	Occlusal Guidance 5

到達目標

成長発達期の口腔諸機能の発達を理解するとともに、その発育障害を及ぼす疾病・異常の予防、継続的管理について理解するとともにその方法が説明できる。

成績評価基準及び成績評価方法

授業態度３０％、発表３０％、レポート・試験４０％

講義では、毎回、課題についての議論及び発表。また、講義終了後は、議論した内容などをさらに分析、整理してレポートをまとめて提出。

テキスト及び参考書

別途指示する。

授業科目名　咬合再生構築学　Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　──、羽田詩子、大森俊和、横矢隆二

目　　的

無歯顎、インプラントに代表される咬合関係が機能しない場合や、失われた場合のリコンストラクションを高度に行うことができる技能・態度・知識を習得することを目的とする。

内　　容

一般に高度歯科治療に必要とされる咬合についての学習を行う。高齢者の実質的な満足を充足する補綴物製作の技能・態度・知識を養成する。特に、無歯顎、部分的なもの、インプラントに代表される咬合のリコンストラクションに対応できる知識を習得する。また、将来の研究に有意義な外国語文献の抄読と、相互学習により討議が可能な理解力を醸成する。

授業計画

	咬合再生構築学Ⅰ（前学期）	咬合再生構築学Ⅰ（後学期）
１	補綴の診療と患者の対応　１（基礎的知識－１）	エビデンスベースメディシン（EBM）
２	補綴の診療と患者の対応　２（基礎的知識－２）	ナラティブメディシン（NBM）　１
３	補綴の診療と患者の対応　３（文献検索）	ナラティブメディシン（NBM）　２
４	補綴の診療と患者の対応　４（若年者）	医療統計　１
５	補綴の診療と患者の対応　５（中年）	医療統計　２
６	補綴の診療と患者の対応　６（高齢者）	臨床的評価法　１
７	補綴の診療と患者の対応　７（TMD－１）	臨床的評価法　２（口腔機能低下症）
８	補綴の診療と患者の対応　８（TMD－２）	機能回復　１（評価－１）
９	補綴の診療と患者の対応　９（無歯顎－１）	機能回復　２（評価－２）
１０	補綴の診療と患者の対応１０（無歯顎－２）	リコンストラクション　１
１１	補綴の診療と患者の対応１１（インプラント）	リコンストラクション　２
１２	補綴の診療と患者の対応１２（インプラント）	リコンストラクション　３
１３	補綴の診療と患者の対応１３（インプラント）	文献的学習
１４	補綴の診療と患者の対応１４（訪問歯科診療）	訪問歯科診療
１５	補綴の診療と患者の対応１５（統括）	統合的問題解決　１

到達目標

無歯顎、インプラントに代表される咬合関係が機能しない場合や、失われた場合のリコンストラクションを高度に行うことができる技能・態度・知識を習得する。

成績評価基準及び成績評価方法

発表３０％、討議内容３０％、レポート４０％

講義では、毎回、課題についての議論及び発表をしてもらいます。また、講義終了後は、議論した内容などをさらに分析、整理してレポートをまとめて提出してもらいます。

テキスト及び参考書

別途指示する。

授業科目名　咬合・口腔機能制御・再建学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　宇野光乗、澤田季子

目　　的

顎口腔系の形態、機能、外観を回復するとともにその健康の維持を計ることができる高度な専門性を持つ臨床歯科医になるために必要な知識、技能、態度を習得する。

内　　容

顎口腔系は歯（咬合)、顎関節、咀嚼筋の３要素とこれらに対する中枢神経の統合のうえに成り立っている。また、顎口腔系機能はこれら構成要素間の密接な相互依存関係により営まれている。こうした理論を基礎として臨床における顎口腔系機能の新たな診断法及び治療法を見出すこと、さらに顎口腔系の審美（形態、外観）を回復するために必要な歯科材料の特性を理解して、その改良、開発をするための知識を習得するために必要な講義を行う。講義及び模型実習は、研究室、顎機能検査室、病院技工室で行う。

授業計画

	咬合・口腔機能制御・再建学Ⅰ（前学期）	咬合・口腔機能制御・再建学Ⅱ（後学期）
１	咬合咀嚼障害の病因論	歯周組織に配慮したクラウン概論
２	診察概論	歯周補綴学
３	検査概論	オールセラミッククラウン概説
４	評価と診断学概論	CAD/CAM システム概論
５	治療学	歯科の色彩学
６	ブリッジ概論	咬合分析（咬合器）
７	ポンティック概論	下顎運動の測定と解析
８	前処置概論	顎機能解析学
９	クラウンプレパレーション概論	筋電図測定と分析
１０	プロビジョナルレストレーション概論	ブラキシズムの発現機序と制御法
１１	色調の評価（測色、伝達法）	顎機能異常の診断学
１２	ワックスパターン形成（ドロップオンテクニック）	顎機能異常の治療学
１３	セラミックス概論	画像診断学
１４	咬合調整	クラウンブリッジ学総括
１５	術後管理学	論文の読み方、書き方の基本

到達目標

専門性の高い優れた研究者及び指導者となることを一つの目標とするが、関連学会（日本補綴歯科学会、日本顎関節学会など）の認定医、専門医の資格の取得を目指すために必要な高度な知識を習得する。それによって EBD に基づいた高度な歯科治療を実践できることを目標とします。

成績評価基準及び成績評価方法

授業態度３０％、発表３０％、レポート・試験４０％

講義では、毎回、課題についての議論及び発表することを課します。また、講義終了後は、議論した内容などをさらに分析、整理して考察を加えたレポートを提出する。

テキスト及び参考書

講義に必要な資料（参考書など）は別途指示する。

授業科目名　摂食嚥下機能回復学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　谷口裕重

目　　的

① 理論を基盤とした摂食嚥下リハビリテーションの診療体系、研究理念を構築するための知識、概念を理解する

② 医療、介護に精通した「歯科医療人」として必要な知識を理解する

③ 職種間連携に必要な知識や態度を理解する

①～③を理解した上で、④学術成果を発信する

内　　容

摂食嚥下リハビリテーション学は従来の歯科領域、全身疾患、服薬状況に加えて、栄養状態、全身機能、口腔機能、摂食嚥下機能、リハビリテーションの概念、多職種連携、死生観など複合的な観点が必要とされる。そのため、摂食嚥下リハビリテーションの基礎的な知識を基盤として、多角的な知識・態度・概念、最新の知見の理解を目標とする。

摂食嚥下機能回復学Ⅰ・Ⅱでは、日本摂食嚥下リハビリテーション学会、日本老年歯科医学会などが作成した診療ガイドラインを基として、基本的な摂食嚥下機能、摂食嚥下機能障害の病態、その検査・診断方法を理解し、アプローチの選択、疾患のステージや環境に応じた評価・診断・治療計画立案・リハビリテーションを理解する。

授業計画

	摂食嚥下機能回復学Ⅰ（前学期）	摂食嚥下機能回復学Ⅱ（後学期）
1	歯科医療における摂食嚥下リハビリテーション	摂食嚥下リハビリテーションにおけるリスクマネジメント
2	リハビリテーション医学概論：リハビリテーションにおけるアプローチの基本（評価とゴールの設定）	摂食嚥下リハビリテーションにおける治療計画①：ステージによる違い
3	摂食嚥下のメカニズム①：摂食嚥下にかかわる解剖・生理	摂食嚥下リハビリテーションにおける治療計画②：アプローチの違い
4	摂食嚥下のメカニズム②：摂食嚥下のモデル	小児の摂食嚥下障害①：発達期の機能獲得と摂食嚥下障害
5	摂食嚥下障害の要因①：認知症、神経・筋疾患	小児の摂食嚥下障害②：治療計画と対応
6	摂食嚥下障害の要因②：脳血管疾患、頭頸部腫瘍	治療的アプローチ：間接訓練、直接訓練
7	摂食嚥下障害の要因③：加齢（サルコペニア、廃用症候群）、薬剤	代償的アプローチ①：食物調整、体幹調整
8	摂食嚥下障害と臨床倫理	代償的アプローチ②：歯科的アプローチ（嚥下補助装置、顎補綴）
9	高齢者のための社会保障制度	歯科医療のパラダイムシフト①：急性期病院での対応
１０	摂食嚥下機能評価①：全身のアセスメント	歯科医療のパラダイムシフト②：回復期病院での対応
１１	摂食嚥下機能評価②：咀嚼、口腔機能評価	歯科医療のパラダイムシフト③：在宅での対応（訪問診療）
１２	摂食嚥下機能評価③：スクリーニング	歯科医療のパラダイムシフト④：施設での対応（訪問診療）
１３	摂食嚥下機能評価④：ミールラウンド	歯科医療のパラダイムシフト⑤：チームアプローチの実際
１４	摂食嚥下機能評価⑤：嚥下精密検査（嚥下内視鏡検査、嚥下造影検査）	症例検討①

１５	摂食嚥下機能評価⑧：嚥下精密検査（筋電図検査、マノメトリ）	症例検討②

到達目標

日本摂食嚥下リハビリテーション学会認定士、日本老年歯科医学会認定医、日本老年歯科医学会摂食機能療法専門歯科医師を取得するために必要な知識を習得する。

成績評価基準及び成績評価方法

授業態度３０％、発表３０％、レポート・試験４０％

講義終了後にレポートを提示する。レポートの内容に関する議論、発表、口頭試問により成績を総合的に評価する。

テキスト及び参考書

・ よくわかる摂食・嚥下のメカニズム第２版（医歯薬出版）
・ Medical Rehabilitation「これでナットク！摂食嚥下機能評価のコツ」（全日本病院出版会）
・ The Clinician’s Guide to Swallowing Fluoroscopy：臨床家のための嚥下造影ガイド（医歯薬出版）
・ 摂食嚥下リハビリテーション　第３版（医歯薬出版）
・ 新版　歯学生のための摂食嚥下リハビリテーション学（医歯薬出版）

授業科目名　障害者歯科医学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　岩瀬陽子

目　的

障害者歯科の専門性や特異性について、歯科学以外の障害および障害者そのものに関する十分な理解と知識が必要である。障害者の福祉施策および障害者の置かれた環境などの社会的側面も理解したうえで、さまざまな障害への知識を深め、それらの障害に関わる歯科的問題点について理解することを目的とする。

内　容

さまざまな障害者の歯科管理を行う上で、総論としてスペシャルニーズを学習し、社会福祉的概念を学んだうえで、各論として障害の定義や疫学、病態・臨床症状、歯科的問題点や対応法などの知識を修得する。

授業計画

	障害者歯科医学Ⅰ（前学期）	障害者歯科医学Ⅱ（後学期）
1	歯科医療におけるスペシャルニーズ	重症心身障害児・者と歯科的問題
2	スペシャルニーズと社会保障	難病（特定疾患）と歯科的問題
3	チーム医療の役割と関連職種	精神障害（統合失調症、うつ病等）と歯科的問題
4	感覚障害と歯科的問題	障害に関連する内科的疾患と歯科的問題
5	発達の評価と障害	脊髄小脳変性症、ALS の概要と歯科的問題
6	知的能力障害と歯科的問題	行動調整法
7	発達障害と歯科的問題① （自閉スペクトラム症）	コミュニケーション法
8	発達障害と歯科的問題② （注意欠陥・多動性障害、学習障害）	行動療法
9	肢体不自由の概要	薬物的行動調整
１０	脳性麻痺と歯科的問題	口腔ケア
１１	筋ジストロフィーと歯科的問題	障害者における口腔疾患予防
１２	パーキンソン病と歯科的問題	障害者への健康支援
１３	脳血管障害後遺症と歯科的問題	リスク評価と安全管理
１４	脊髄小脳変性症、ALS と歯科的問題	合併疾患、常用薬と安全管理
１５	てんかんと歯科的問題	医療安全管理体制

到達目標

障害者を取り巻く環境や福祉施策、感覚障害、知的能力障害、発達障害、脳性麻痺や筋ジストロフィーなどの肢体不自由、精神障害など様々な障害と歯科的問題について説明できる。行動調整法や口腔ケア、安全管理について説明できる。

成績評価基準及び成績評価方法

講義においては課題についての議論を行い、講義終了後には議論した内容などを整理してまとめたレポートを提出し、授業態度、レポートおよび試験を総合的に評価する。

テキスト及び参考書

・スペシャルニーズデンティストリー　障害者歯科 第２版（医歯薬出版）

授業科目名　生体組織再生学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　中本哲自　他

目　　的

臨床における歯科インプラント治療での問題点を抽出し、基礎実験としてのテーマを考え、その実験手法および論文作成を習得する。

内　　容

生体組織再生学では、歯科インプラント治療を中心とした、歯および口腔領域の組織、器官欠損により発症する機能障害・審美障害を治療する歯科補綴学的治療であり、骨組織、粘膜等の軟組織の増生、形成を主とする再生医療である。

本学問の中心となる歯科インプラント治療を行うにあたりその手技の理解を深め、臨床での問題点を抽出する。特に、骨接合型インプラントシステムでは、骨組織再生というものは治療を行う際に必要となる手技であることから、本治療の基礎を学ぶ。

そのことにより、骨組織再生医療での問題点の抽出し、その問題点に対する解決策を実験テーマとした基礎実験計画を立て、結果を生み出すための手法を探り、学ぶ。

授業計画

	生体組織再生学Ⅰ（前学期）	生体組織再生学Ⅱ（後学期）
１	インプラント体と骨接合Ⅰ	骨再生治療総論Ⅰ
２	インプラント体と骨接合Ⅱ	骨再生治療総論Ⅱ
３	インプラント体と軟組織接合Ⅰ	幹細胞の基礎Ⅰ
４	インプラント体と軟組織接合Ⅱ	幹細胞の基礎Ⅱ
５	インプラント体の表面性状Ⅰ	骨髄細胞の基礎Ⅰ
６	インプラント体の表面性状Ⅱ	骨髄細胞の基礎Ⅱ
７	インプラント体の表面性状Ⅲ	歯髄細胞の基礎Ⅰ
８	ショートインプラント治療の基礎Ⅰ	歯髄細胞の基礎Ⅱ
９	ショートインプラント治療の基礎Ⅱ	骨膜の骨再生への応用Ⅰ
１０	即時埋入治療法Ⅰ	骨膜の骨再生への応用Ⅱ
１１	即時埋入治療法Ⅱ	副甲状腺ホルモンの間歇投与の臨床Ⅰ
１２	即時荷重治療法Ⅰ	副甲状腺ホルモンの間歇投与の臨床Ⅱ
１３	即時荷重治療法Ⅱ	骨補填材の基礎Ⅰ
１４	手術ナビゲーションシステムの応用Ⅰ	骨補填材の基礎Ⅱ
１５	手術ナビゲーションシステムの応用Ⅱ	骨補填材の基礎Ⅲ

到達目標

臨床における歯科インプラント治療での問題点を抽出し、基礎実験としてのテーマを考え、その実験手法および論文作成を習得する。

成績評価基準および成績評価方法

（例）

授業態度３０％、発表３０％、レポート・試験４０％

講義では、毎回、課題についての議論および発表をしてもらいます。また、講義終了後は、議論した内容などをさらに分析、整理してレポートをまとめて提出してもらいます。

テキストおよび参考書

「BONE Biology, Harvesting, Grafting for Dental Implants. Rationale and Clinical Application」Arun K. Garg 著. Quintessence Publishing Co, Inc.

授業科目名　顎顔面形態発育学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　北井則行、留　和香子、竹内　綾

目　　的

顎顔面形態の成長・発育について理解し、不正咬合の原因、種類、診察、検査、診断、治療計画の立案、矯正治療に必要な力学、矯正治療によって起こる生体反応、予防法、混合歯列期及び永久歯列期の矯正歯科治療について理解することを目標とする。

内　　容

頭蓋顎顔面の成長・発育と歯列の成長・発育を考慮して、正しい機能と良好な顔貌を獲得するために、上下顎関係及び咬合の異常を改善する治療法について、基礎的・臨床的に学ぶ。具体的には、頭蓋顎顔面の成長・発育、歯、歯列の発達、可撤式矯正装置・固定式矯正装置の作用機序と適応症、矯正診断、治療計画の立案の方法を学び、混合歯列期及び永久歯列期における矯正歯科治療の実践についての知識を習得する。

授業計画

	顎顔面形態発育学Ⅰ（前学期）	顎顔面形態発育学Ⅱ（後学期）
１	頭蓋顎顔面の成長・発育	マルチブラケット装置の構造
２	歯、歯列の発達	抜歯・非抜歯の判定
３	不正咬合の原因	永久歯列前期の包括的矯正歯科治療③
４	不正咬合の診察、検査	永久歯列前期の包括的矯正歯科治療②
５	セファロトレース	永久歯列前期の包括的矯正歯科治療①
６	セファロ分析	顎内固定
７	不正咬合の診断と治療方針の立て方	顎外固定
８	診断と治療計画の立案①	初期の歯の排列
９	診断と治療計画の立案②	犬歯のコントロール
１０	矯正力と顎整形力	オーバーバイトのコントロール
１１	矯正力による生体反応	オーバージェットのコントロール
１２	可撤式矯正装置	大臼歯のコントロール
１３	固定式矯正装置	フィニッシング（仕上げ）
１４	混合歯列期（非骨格性の問題）の矯正治療	保定
１５	混合歯列期（骨格性の問題）の矯正治療	外科的矯正治療

到達目標

頭蓋顎顔面の成長・発育と歯、歯列の発達を理解した上で、不正咬合の原因、種類、診察、検査、診断、治療計画の立案、矯正治療に必要な力学、矯正治療によって起こる生体反応、予防法、混合歯列期の矯正治療、永久歯列期の矯正治療について説明できる。

成績評価基準及び成績評価方法

授業態度と出席５０％、発表と試験５０％

講義では、毎回、課題についての議論を行い、講義終了後は、議論した内容を整理する。

テキスト及び参考書

プロフィトの現代歯科矯正学 第３版　クインテッセンス出版，高田健治（翻訳）

わかる矯正歯科治療－固定式矯正装置の原理と応用－，高田健治（監訳），MEDIGIT

授業科目名　基礎医療情報学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　飯田幸弘　他

目　　的

歯及び口腔顎顔面領域における放射線の歯科医学的利用に関連する、高度の基本的な知識を習得する。

内　　容

目的に到達するために次の４分野に関する基本的な知識を習得する。

（１）放射線防護に関する知識と基本的な放射線管理技術（２）診断に必要な画像診断機器に関する知識（３）歯及び口腔顎顔面領域の疾患の画像診断（４）他分野への応用として顎関節症、摂食・嚥下障害、唾液腺疾患・口腔乾燥症、口腔インプラントなどの基本的な知識を理解する。

授業計画

	基礎医療情報学Ⅰ(前学期)	基礎医療情報学Ⅱ（後学期）
1	電離放射線の種類、性質及び単位	齲蝕・歯周疾患・根尖病変・歯の異常
2	X 線の発生と性質	顎口腔領域の外傷
3	放射線の生体に対する影響	顎口腔領域の炎症
4	放射線防護の基本概念	顎口腔領域の嚢胞・良性腫瘍・類似疾患
5	X 線画像の形成原理	顎口腔領域の悪性腫瘍
6	X 線投影の原則	全身疾患と先天異常の顎口腔画像所見
7	口内法、パノラマ及び頭部 X 線撮影法	顎関節病変と画像検査
8	X 線撮影装置とその周辺機器	顎関節症の臨床と診療のガイドライン
9	デジタル画像理論	顎関節症画像診断
１０	デジタル X 線画像システムと周辺機器	摂食・嚥下機能とその障害
１１	CT 及び MRI の原理と特徴	X 線ビデオ嚥下造影法（VF 検査）
１２	超音波・造影・核医学検査の原理と特徴	唾液腺疾患とその画像診断
１３	画像診断総論（画像情報の整理及び分析）	口腔乾燥症とその画像診断
１４	正常な解剖構造（正常画像）のⅠ	口腔インプラント及びその画像診断
１５	正常な解剖構造（正常画像）の２	顎骨の骨塩量測定

到達目標

日本歯科放射線学会認定医・専門医以外の臨床系学会の認定医・専門医を取得する資格に必要な画像検査・診断に関する高度で基本的な知識を習得する。

成績評価基準及び成績評価方法

平常点５０％、レポート試験又は学会発表５０％

*単位取得のためには、講義出席は２／３以上出席のこと。

*課題に対するレポート試験は、前学期・後学期それぞれに実施するが、学会での発表はレポート試験に替えることができる。

テキスト及び参考書

1　デジタルデンティストリー　医療情報と画像情報超入門、有地榮一郎・勝又明敏　他編集、永末書店　2015 年

2　はじめましょう摂食嚥下障害のＶＦ検査、神部芳則・勝又明敏　編集、学建書院　2014 年

3　歯科放射線マニュアル　第４版、佐野　司　編集、南山堂　2010 年

授業科目名　機能性材料学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　奥山克史、日下部修介

目　　的

う蝕学と歯冠修復学に関する研究を実践するために必要な基礎的および臨床的な知識と考え方を習得する。さらに研究に必要な情報収集能力と研究推進能力を涵養する。

内　　容

本授業科目ではう蝕学及び保存修復学に関する研究を行う上で必要となる基本的および臨床的な知識や術式とその考え方を習得する。特にう蝕予防とう蝕治療に関する最新の知識と技法について学ぶとともにう蝕治療ガイドラインの内容について理解する。

授業計画

	機能性材料学Ⅰ（前学期）	機能性材料学Ⅱ（後学期）
１	う蝕と硬組織疾患　（１）	間接修復法の基礎と臨床　（１）
２	う蝕と硬組織疾患　（２）	間接修復法の基礎と臨床　（２）
３	う蝕と硬組織疾患　（３）	間接修復法の基礎と臨床　（３）
４	う蝕予防とフッ化物の応用　（１）	歯の漂白の基礎と臨床　（１）
５	う蝕予防とフッ化物の応用　（２）	歯の漂白の基礎と臨床　（２）
６	接着材料とその機序　（１）	高齢者のう蝕治療　（１）
７	接着材料とその機序　（２）	高齢者のう蝕治療　（２）
８	接着材料とその機序　（３）	保存修復とＣＡＤ／ＣＡＭ　（１）
９	修復材料の基礎　（１）	保存修復とＣＡＤ／ＣＡＭ　（２）
１０	修復材料の基礎　（２）	臨床研究の進め方
１１	直接コンポジットレジン修復法（１）	う蝕治療のガイドライン　（１）
１２	直接コンポジットレジン修復法（２）	う蝕治療のガイドライン　（２）
１３	直接コンポジットレジン修復法（３）	う蝕治療のガイドライン　（３）
１４	歯の切削装置　（１）	う蝕治療のガイドライン　（４）
１５	歯の切削装置　（２）	う蝕治療のガイドライン　（５）

到達目標

次世代機能性修復材料の基礎的、臨床的研究を学び、情報収集、情報分析能力を養う。

成績評価基準及び成績評価報方法

授業態度３０％、発表３０％、レポート・試験４０％

講義では課題について議論及び発表を行い、終了後にはレポートを提出してもらう。

テキスト及び参考書

保存修復学 21 第 6 版（永末書店）、う蝕治療ガイドライン第 3 版（永末書店）、接着歯学第 2 版（医歯薬出版）

授業科目名　臨床義歯材料学Ⅰ・Ⅱ

開講時間数等　各３０時間（週１コマ）

担当教員　　──、山本寛明、渡邊　諒

目　　的

部分床義歯は複数の材料を用いた構造部であり、この各構成要素の材料特性を知らなければ、良好な義歯は製作されない。そこで、臨床から見た材料学の知識を習得することを目的とする。

内　　容

部分床義歯学製作のための材料学として治療用機器・治療材料・義歯材料の基礎的知識と最新の加工技術や今後期待されている理論について講義する。

授業計画

	臨床義歯材料学Ⅰ（前学期）	臨床義歯材料学Ⅱ（後学期）
１	切削・研磨機器	歯科鋳造
２	切削・研磨工具	重合
３	印象用器具	劣化
４	印象用材料	レーザー溶接Ⅰ
５	咬合採得器具	レーザー溶接Ⅱ
６	咬合採得材料	レーザー溶接Ⅲ
７	咬合器Ⅰ	マイクロ波の応用Ⅰ
８	咬合器Ⅱ	マイクロ波の応用Ⅱ
９	咬合器Ⅲ	磁気の応用Ⅰ
１０	有機系材料	磁気の応用Ⅱ
１１	金属系材料	磁気の応用Ⅲ
１２	複合型材料	電磁誘導の応用Ⅰ
１３	中間消耗材料	電磁誘導の応用Ⅱ
１４	インプラント材料	CAD・CAMⅠ
１５	生体親和性材料	CAD・CAMⅡ

到達目標

臨床における歯科材料の取り扱いを熟知し新しい歯科技術についての研究・開発を習得する。

成績評価基準および成績評価法

発表３０％、レポート５０％、出席２０％

講義では，課題についての発表と討論を行いその討論により得られた事項をレポートとして提出する。

テキスト及び参考書

講義に必要なテキスト及び参考書は別途指示する。

2026年度大学院歯学研究科準備学習（予習・復習）・注意事項等一覧

授業科目名	担当教員	履修に際しての準備学習（予習・復習）・注意事項等
歯周病学Ⅰ・Ⅱ	辰巳　順一　教授	歯学部教育と卒後研修教育において得た基礎ならびに臨床知識の再確認を行っておくこと。授業計画に沿った講義内容について、十分学習し、講義に臨むこと。また、講義終了後は、自身において復習を行い、講義の疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。
歯周病学Ⅲ・Ⅳ	辰巳　順一　教授	歯周病学Ⅰ、Ⅱにおいて得た基礎ならびに臨床知識の再確認を行っておくこと。授業計画に沿った講義内容について、十分予習し、講義に臨むこと。また、講義終了後は、自身において復習を行い、実習の疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。
臨床実習Ⅰ・Ⅱ 臨床実習Ⅲ・Ⅳ	辰巳　順一　教授	歯周治療に関する知識を常に収集し、技術向上に努めるように心がけておくこと。授業計画に沿った実習内容について、十分予習し、実習に臨むこと。また、実習終了後は、自身において復習を行い、疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。
インプラント学Ⅰ・Ⅱ	中本　哲自　教授	一般歯科医師として歯科保存学、歯科補綴学、歯周病学、口腔外科学の十分な習得を前提として講義される。教授要綱を参考に、教科書、参考書を熟読し、理解すること。特に、インプラント学Ⅰ、Ⅱでは、口腔インプラント治療の基礎を学ぶ上での、咀嚼系学問の基礎、治療に必要な知識、更には、顎顔面・口腔外科学系及び歯周病学系の手術に関する知識、技術が必要となることから、それらの内容を十分に予習することが必要である。また、講義終了後は、自身において復習を行い、講義の疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。
インプラント学Ⅲ・Ⅳ	中本　哲自　教授	再生医療の基礎及び基礎実験に関する論文を検索し、判読しておく。また、教授要綱を参考に、教科書、参考書を熟読し、理解すること。特に、インプラント学Ⅲ、Ⅳでは、口腔インプラント治療でのアドバンス的基礎を学ぶ上ため、顎顔面・口腔外科学系及び歯周病学系における軟組織、硬組織の手術、更には、再生療法に関する知識、技術が必要となることから、それらの内容を十分に予習することが必要である。また、講義終了後は、自身において復習を行い、講義の疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。
臨床実習Ⅰ・Ⅱ	中本　哲自　教授	歯科一般治療が最低条件であることに注意すること。インプラント学Ⅰ、Ⅱで学んだ知識、技術が、臨床の場においてどのように実施されているか、特に、補綴主導型インプラント治療において最も重要な診断用ワックスアップ→診断用テンプレート製作→一次手術での埋入インプラント体サイズの決定といった治療の流れを十分に理解する。臨床実習終了後は、自身において復習を行い、臨床の場での疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。
臨床実習Ⅲ・Ⅳ	中本　哲自　教授	手術の詳細を見学し、手術記録を作成する。インプラント学Ⅲ、Ⅳで学んだ知識、技術が、臨床の場においてどのように実施されているか、特に、補綴主導型インプラント治療での診断用テンプレート→外科用テンプレート→ドリリングといった治療の流れとその実際を十分に理解する。臨床実習終了後は、自身において復習を行い、臨床の場での疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。

授業科目名	担当教員	履修に際しての準備学習（予習・復習）・注意事項等
口腔外科学Ⅰ・Ⅱ	畠山　大二郎　教授	口腔外科を専門分野としていく上で、高いレベルの外科学を目指すべく、積極的に講義に参加し、課題を持ち、自ら解決の道筋を立てることで、日常の臨床に有意義に結びつけることが出来るよう努力していただきたい。毎回、授業予定の講義内容について教書やメディアなどを活用し、十分な予習をした上で講義に臨むこと。また講義終了後には、必ず自身において復習を行い、講義内容を習得すること。疑問点などがあった場合には指導教授に確認し、解決すること。
口腔外科学Ⅲ・Ⅳ	畠山　大二郎　教授	学位修得のための研究課題を見据えて、講義、臨床に積極的に参加していただく。毎回、授業予定の講義内容について教書やメディアなどを活用し、十分な予習をした上で講義に臨むこと。また講義終了後には、必ず自身において復習を行い、講義内容を習得すること。疑問点などがあった場合には指導教授に確認し、解決すること。
臨床実習Ⅰ・Ⅱ	畠山　大二郎　教授	臨床の場で発生した問題点や疑問点を、指導医の意見、指示を仰ぎながら、自ら解決する方向に導くこと、その場で解決出来ないことは必ず文献、論文、教書などで調査し報告する。毎回、予定実習の内容について十分な予習をし、知識と技術を習得した上で実習に臨むこと。また実習終了後には、必ず自身において復習を行い、次回の実習に生かすこと。
臨床実習Ⅲ・Ⅳ	畠山　大二郎　教授	患者の状態を的確に判断し対応策を考えること。また、絶えず患者の立場に立ち、患者本位の対応を取ること。 臨床の場で発生した問題点、疑問点を、指導医の意見・指示を仰ぎながら、自ら解決する方向に導くこと。その場で解決出来ないことは必ず文献、論文、教書などで調査し報告する。 臨床経験は研究課題の基礎となることを念頭に自己研鑽を怠らないこと。 毎回、予定実習の内容について十分な予習をし、知識と技術を習得した上で実習に臨むこと。また実習終了後には、必ず自身において復習を行い、次回の実習に生かすこと。
歯科放射線学Ⅰ・Ⅱ 歯科放射線学Ⅲ・Ⅳ	飯田　幸弘　教授	履修科目の選択に際して、事前に必ず指導教授及び教員と相談すること。授業計画に沿った講義内容について、十分予習し、講義に臨むこと。また、講義終了後は、自身において復習を行い、講義の疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。
臨床実習Ⅰ・Ⅱ 臨床実習Ⅲ・Ⅳ	飯田　幸弘　教授	Ｘ線撮影には指導教授又は教員のチェックと、画像診断の読影報告書には指導教授又は教員の検印を必要とする。授業計画に沿った実習内容について、十分予習し、実習に臨むこと。また、実習終了後は、自身において復習を行い、実習の疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。
小児歯科学Ⅰ・Ⅱ 小児歯科学Ⅲ・Ⅳ	齊藤　一誠　教授	授業計画に沿った講義内容について、十分予習し、講義に臨むこと。また、講義終了後は、自身において復習を行い、講義の疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。

授業科目名	担当教員	履修に際しての準備学習（予習・復習）・注意事項等
臨床実習Ⅰ・Ⅱ	齊藤　一誠　教授	患者実習については、必ず指導医の指示を仰ぐとともに、事前に検査法、術式、必要器材等の準備をしておくこと。実習計画に沿った実習内容について、十分準備し、実習に臨むこと。また、実習終了後は、自身において振り返りを行い、疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。
臨床実習Ⅲ・Ⅳ	齊藤　一誠　教授	必ず指導医の指示を仰ぐとともに、事前に検査法、術式、必要器材等の準備をしておくこと。実習計画に沿った実習内容について、十分準備し、実習に臨むこと。また、実習終了後は、自身において振り返りを行い、疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。
歯科矯正学Ⅰ・Ⅱ 歯科矯正学Ⅲ・Ⅳ	北井　則行　教授	講義の前に、テキスト及び参考書を熟読し、各課題について十分に理解してから講義を受け、講義の後には、知識の整理と確認を行うことが望ましい。講義の前に、テキスト及び参考書を熟読し、各授業項目について十分に理解してから講義を受けること。講義の後には、知識の整理と確認のために、レポートを作成し提出すること。
臨床実習Ⅰ・Ⅱ	北井　則行　教授	実習を行う前に、参考書及びシラバスを熟読し、これから行う実習について十分に理解してから実習を行い、実習後には、反省点を含めて知識の整理と確認のために、レポートを作成し提出すること。治療方針の立案及び治療の実践にあたっては、科学的根拠に基づいた治療を行えるように考慮する。
臨床実習Ⅲ・Ⅳ	北井　則行　教授	実習を行う前に、参考書及びシラバスを熟読し、これから行う実習について十分に理解してから実習を行い、実習後には、指定症例について、科学的根拠に基づいた治療方針の立案を行い、レポートとして提出すること。
障害者歯科学Ⅰ・Ⅱ 障害者歯科学Ⅲ・Ⅳ	岩瀬　陽子　教授	授業計画に沿った講義内容について、十分予習し、講義に臨むこと。また、講義終了後は、自身において復習を行い、講義の疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。
臨床実習Ⅰ・Ⅱ 臨床実習Ⅲ・Ⅳ	岩瀬　陽子　教授	授業計画に沿った実習内容について、十分予習し、実習に臨むこと。また、実習終了後は、自身において復習を行い、実習の疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。診療方針の立案及び治療の実践にあたっては、極力、資料採得を行い、医学的根拠に基づいた治療を行う。
社会口腔保健学Ⅰ・Ⅱ 社会口腔保健学Ⅲ・Ⅳ	友藤　孝明　教授	授業計画に記載されている内容について、予習してから、講義に臨むこと。また、講義で得た知識を自身で整理し、指導医への質問等を適時行って、不明な点をそのままにしないこと。
臨床実習Ⅰ・Ⅱ	友藤　孝明　教授	公衆歯科衛生について、予習してから、実習に臨むこと。また、実習後は自身で復習し、実習における不明な点をそのままにしないこと。
臨床実習Ⅲ・Ⅳ	友藤　孝明　教授	予防歯科の臨床について、予習してから、実習に臨むこと。また、実習後は自身で復習し、実習における不明な点をそのままにしないこと。

授業科目名	担当教員	履修に際しての準備学習（予習・復習）・注意事項等
歯科保存学Ⅰ・Ⅱ	河野　　哲　教授	歯学部教育と卒後研修教育において得た基礎並びに臨床の知識の再確認を行っておくこと。本課程では、高齢化、疾病構造の多様化に伴う、治療法の変化に対応すべく、歯科用実体顕微鏡やコーンビームCTなど最新機器を用いた精度高い診査と診断、MTAなど新進の材料、Ni-Tiファイルやレーザー、超音波発振装置などを用いた治療技術について学習する。講義を受講するにあたって、目的を明確にし、講義内容を十分理解し、知識を身につけることが重要である。準備学習（予習・復習等）としては、授業計画に沿った内容について専門書を選択し、熟読すること。講義中はノートを取り、更に講義後は、十分な理解が得られなかった点について、指導教員に質問し、理解を深めておくこと。
歯科保存学Ⅲ・Ⅳ	河野　　哲　教授	歯科保存学Ⅰ並びにⅡにおいて得た基礎並びに臨床の知識の再確認を行っておくこと。本課程では、歯科保存学Ⅰ・Ⅱで学んだ内容を実際の臨床に応用できるように発展させる。更に難治性疾患に対する理解と解決法、痛みについての理解、他の領域にまたがる複合疾患についての理解を深める。そのため、多分野に渡って知識を深める必要があり、専門分野のみならず、人文社会系、理工系、医療系など幅広い知識が求められる。準備学習としては授業計画に沿った講義内容について、他分野の専門書を紐解き、多分野の人と交流を持ち、教養を深め、講義に臨むこと。また、講義終了後は、自身において復習を行い、講義の疑問点等は指導教員に確認し、解決すること。
臨床実習Ⅰ・Ⅱ	河野　　哲　教授	歯学部教育と卒後研修教育において得た基礎並びに臨床の知識の再確認を行っておくこと。確実に効率的歯内療法を実践し、先進医療を習得するために、模型歯牙を用いて切削器具、特に器械切削器具の使用法について精通し、歯科用実体顕微鏡と周辺器材の使用法について熟達し、コーンビームCT画像の読影・診断について、臨床応用できる知識と技能を習得すること。臨床では、これらの器機を使用して、通常の根管治療のみならず、外科的歯内療法を実践できるようにする。また、治療後の経過の管理を怠らず、症例の収集と分析に努め、後の治療法に反映すること。
臨床実習Ⅲ・Ⅳ	河野　　哲　教授	臨床実習Ⅰ、Ⅱにおいて得た基礎並びに臨床の知識の再確認を行っておくこと。他分野、複合疾患について症例を経験し、治癒に導くために、患者の心理的、社会的、経済的背景を踏まえた診査・診断、治療法の選択に努め、常に他分野との連携を実践する。そのため、関連隣接領域の疾患について正しい知識を得ることが重要で、医科との連携による診断、疼痛に対する知識など事前の情報収集と情報交換が必要である。
歯科保存学Ⅰ・Ⅱ	奥山　克史　教授	大学院入学後、本教室の担当教員と連絡を密にし、歯科保存学Ⅰ・Ⅱを受講すること。授業計画に沿った内容について、関連する論文を検索して十分に予習し、講義に臨むこと。また講義終了後は、復習して疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。

授業科目名	担当教員	履修に際しての準備学習（予習・復習）・注意事項等
歯科保存学Ⅲ・Ⅳ	奥山　克史　教授	2 学年より本教室の担当教員と連絡を密にし、歯科保存学Ⅲ・Ⅳを受講すること。授業計画に沿った講義内容について、とくに英語論文の文献検索を行い、最先端の研究動向について十分に予習し、講義に臨むこと。また講義終了後は、復習して疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。
臨床実習Ⅰ・Ⅱ	奥山　克史　教授	大学院入学後、本教室の担当教員と連絡を密にし、歯科保存学Ⅰ・Ⅱを受講すること。一口腔一単位の歯科治療を基本とし、一般歯科診療を行うための診断と処置に関する知識と技能を習得する。とくに器具・器材の安全な取扱い、操作方法について十分に予習して臨床実習に臨むこと。臨床実習終了後は復習を行い、臨床実習での疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。
臨床実習Ⅲ・Ⅳ	奥山　克史　教授	2 学年より本教室の担当教員と連絡を密にし、歯科保存学Ⅲ・Ⅳを受講すること。臨床実習Ⅰ・Ⅱに引き続き、一口腔一単位の歯科治療を基本とし、より高度な歯科診療を行うための診断と処置に関する知識と技能を習得する。とくに関連する他分野の臨床知識も学習し、器具・器材の安全な取扱い、操作方法について十分に予習して臨床実習に臨むこと。臨床実習終了後は復習を行い、臨床実習での疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。日本歯科保存学会歯科保存治療専門医、日本歯科接着学会接着歯科治療専門医等を取得することを目標にする。
歯科補綴学Ⅰ・Ⅱ 歯科補綴学Ⅲ・Ⅳ	宇野　光乗　教授	授業計画に沿った講義内容について、自らが文献や成書を検索して充分予習して内容を理解し、講義に臨むこと。また、講義終了後は、自身において復習を行い、講義の疑問点等は指導教授に何がどう不明であるのかを具体的に質問して確認し、解決すること。予習、復習を通して、問題解決法を探ることを習慣とすること。
臨床実習Ⅰ・Ⅱ	宇野　光乗　教授	臨床実習で生じた疑問点はその都度記録し、自らが成書や文献検索を行って自らが探求し解決するように習慣付ける。解決できない点については担当者に質問し、解決の糸口を得ることによって更なる探求、文献検索などを可能とし、これによって問題解決ならびに経験の蓄積を図る。こうした習慣付けによる積み重ねが関連学会の認定医、専門医を取得するための準備となる。
臨床実習Ⅲ・Ⅳ	宇野　光乗　教授	臨床実習で生じた疑問点は、その都度記録し、自らが調査し解決するように習慣付ける。解決できないような問題点については、担当者に質問し、解決の糸口を得ることによって、さらなる調査、文献検索などによって解決を計る。こうした習慣付けによる知識の積み重ねが関連学会の認定医、専門医を取得するために最重要となる。様々な症例を通じて文献検索を行い得られた知識は、各文献ごとにその要点を抽出し、臨床のポイントや研究テーマごとで文書データとしてまとめることを常とし、必要に応じて選択、抽出できるよう平素から習慣付けておく。臨床症例で経験した知識は常に整理し、各種学会等での発表に備える。こうして得られた知識と、他の臨床研究者の考え方との相違点などを見出すことを常とし、より深い理解を得るための自主的学習習慣が求められる。

授業科目名	担当教員	履修に際しての準備学習（予習・復習）・注意事項等
歯科補綴学Ⅰ・Ⅱ 歯科補綴学Ⅲ・Ⅳ	（玉置　幸道　教授）	受動型の講義では無く、参加型の講義を企画している。多くの内容のある討議･議論のなかで互いに学んで行きたい。授業計画に沿った講義内容について、十分予習し、講義に臨むこと。また、講義終了後は、自身において復習を行い、講義の疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。
臨床実習Ⅰ・Ⅱ 臨床実習Ⅲ・Ⅳ	（玉置　幸道　教授）	患者さんの治療は誠心誠意、十分な準備を持って行うこと。事前の治療計画の提出とその評価は必須。授業計画に沿った実習内容について、十分予習し、実習に臨むこと。また、実習終了後は、自身において復習を行い、実習の疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。
歯科補綴学Ⅰ・Ⅱ	（玉置　幸道　教授）	文献などの検索を行い得られた知識と他の人の考え方の相違点などを見出し、より深い理解を求めるため、自主的学習習慣が必要となる。授業計画に沿った講義内容について、学部講義で習得した内容について確認を行い、講義に臨むこと。また、歯科補綴学の専門医としての自覚を持って学習して欲しい。疑問点等は文献検索をして自己解決を目指すと共に指導教授に確認し、解決すること。
歯科補綴学Ⅲ・Ⅳ	（玉置　幸道　教授）	文献などの検索を行い得られた知識と他の人の考え方の相違点などを見出しより深い理解を求めるため、自主的学習習慣が必要となる。授業計画に沿った講義内容について、学部講義と歯科補綴学Ⅰ・Ⅱで習得した内容について確認を行い、講義に臨むこと。また、歯科補綴学の専門医としての自覚を持って学習して欲しい。疑問点等は文献検索をして自己解決を目指すと共に指導教授に確認し、解決すること。
臨床実習Ⅰ・Ⅱ	（玉置　幸道　教授）	臨床実習であるため、患者・歯科医療スタッフとの連携が必要となる。また、医療の社会的意義について考える必要がある。技工物の製作も実習内容に含まれる。授業計画に沿った講義内容について、学部講義と歯科補綴学Ⅰ・Ⅱで習得した内容について確認を行い、実習に臨むこと。また、歯科補綴学の専門医としての自覚を持た態度・技能を身につけて欲しい。患者資料の整理と症例報告のため文献検索をして治療の目的と意義について検討を行う。
臨床実習Ⅲ・Ⅳ	（玉置　幸道　教授）	臨床実習であるため、患者・歯科医療スタッフとの連携が必要となる。また、医療の社会的意義について考える必要がある。授業計画に沿った講義内容について、学部講義と歯科補綴学Ⅰ・Ⅱで習得した内容について確認を行い、実習に臨むこと。また、歯科補綴学の専門医としての自覚を持た態度・技能を身につけて欲しい。　患者資料の整理と専門医習得のため文献検索をして治療の目的と意義について検討を行い予後から治療の成果を評価し指導教授とカンファレンスをすること。
摂食嚥下リハビリテーション学Ⅰ・Ⅱ	谷口　裕重　教授	以下、準備学習を推奨する。 ①授業内容を事前に把握し、授業計画に沿った内容を予習した上で講義に臨むこと。 ②講義終了後は自身で復習を行い、疑問点を整理し、指導医に相談の上、解決すること。

授業科目名	担当教員	履修に際しての準備学習（予習・復習）・注意事項等
摂食嚥下リハビリテーション学Ⅲ・Ⅳ	谷口　裕重　教授	以下、準備学習を推奨する。 ①摂食嚥下リハビリテーション学Ⅰ・Ⅱで得た基礎・臨床の知識を確認しておくこと。 ②授業内容を事前に把握し、授業計画に沿った内容を予習した上で講義に臨むこと。 ③講義終了後は自身で復習を行い、疑問点や自身の意見を整理し、指導医と議論した上で解決すること。
臨床実習Ⅰ・Ⅱ	谷口　裕重　教授	以下、準備学習を推奨する。 ①実習内容を事前に把握し、予め文献や成書を検索して知識を整理しておく。 ②実習は、指導医の指導を仰ぐとともに、事前に検査法、治療方針、術式を確認しておく。 ③実習終了後は、実習で得た知識を自ら実践できるよう理解し、疑問点を整理し、指導医に相談の上、解決すること。
臨床実習Ⅲ・Ⅳ	谷口　裕重　教授	以下、準備学習を推奨する。 ①実習内容を事前に把握し、予め文献や成書を検索して知識を整理しておく。 ②とくに最新の文献検索を行い、最先端の研究動向について十分に予習して実習に臨むこと。 ③実習は、指導医に相談の上、事前に検査法、治療方針、術式を確認しておく。 ④実習終了後は、実習で得た知識を自ら実践できるよう理解し、疑問点や自身の意見を整理し、指導医と議論した上で解決すること。 ⑤日本摂食嚥下リハビリテーション学会認定士、日本老年歯科医学会認定医、日本老年歯科医学会摂食機能療法専門歯科医師の取得を目標とする。
歯科麻酔学Ⅰ・Ⅱ	半田　俊之　教授	時間厳守、社会人・医療人としての態度と服装。呼吸生理及び循環生理について、充分に予習し（歯科麻酔学、生理学の成書を参考とする）、講義に臨むこと。また、講義終了後は各自復習を行い疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。
歯科麻酔学Ⅲ・Ⅳ	半田　俊之　教授	時間厳守、社会人・医療人としての態度と服装。心電図（正常、虚血性心疾患、不整脈など）について、充分に予習し、講義に臨むこと。また、講義終了後に心電図の小テストをおこなうので、不正解であった箇所は各自復習し、不明な点は指導教授に確認し、解決すること。
臨床実習Ⅰ・Ⅱ	半田　俊之　教授	時間厳守、社会人・医療人としての態度と服装。精神鎮静法（静脈内鎮静法，吸入鎮静法）について充分に予習し、実習に臨むこと。静脈確保の実習も行うので，静脈穿刺に関する予習すること。また、吸入鎮静法の禁忌について調べ、自分がそれに当てはまる場合は実習前に申し出ること。
臨床実習Ⅲ・Ⅳ	半田　俊之　教授	時間厳守、社会人・医療人としての態度と服装。全身麻酔（静脈麻酔，吸入麻酔）について充分に予習し、実習に臨むこと。マスク換気などを行うので、救急蘇生（特にBLS）の復習を行うこと。

授業科目名	担当教員	履修に際しての準備学習（予習・復習）・注意事項等
口腔生理学Ⅰ・Ⅱ 口腔生理学Ⅲ・Ⅳ	硲　哲崇　教授	学部レベルの生理学・口腔生理学の知識を持って受講することが望ましい。履修前に、指導教員と履修内容・履修方法について綿密な打ち合わせをすること。履修項目によっては、あらかじめ書籍や論文等の購読を指示することがあるので、指示に従うこと。履修内容に実技を伴う場合は、あらかじめ連絡するので持ち物等の指示を受けること。履修後に口頭試問を課す場合があるので、指示に従うこと。質問等は、随時受け付ける。
口腔生理学実習Ⅰ・Ⅱ 口腔生理学実習Ⅲ・Ⅳ	硲　哲崇　教授	学部レベルの生理学・口腔生理学の知識を持って受講することが望ましい。履修前に、指導教員との履修内容・履修方法について綿密な打ち合わせをすること。履修項目によっては、あらかじめ書籍や論文等の購読を指示することがあるので、指示に従うこと。履修に必要な持ち物等は、あらかじめ連絡するので指示に従うこと。履修後に口頭試問を課す場合があるので、指示に従うこと。
口腔生化学Ⅰ・Ⅱ 口腔生化学Ⅲ・Ⅳ	川木　晴美　教授	学部で学んだ講義内容を十分復習し、講義に臨むこと。また、講義終了後は、自身において復習を行い、講義の疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。
口腔生化学実習Ⅰ・Ⅱ 口腔生化学実習Ⅲ・Ⅳ	川木　晴美　教授	レポートがある場合はレポートは各自でまとめ、提出期限を守ること。レポートの書き方等は別途指示する。授業計画に沿った実習内容について、十分予習し、実習に臨むこと。また、実習終了後は、自身において復習を行い、実習の疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。
口腔病理学Ⅰ・Ⅱ	永山　元彦　教授	卒前に学んだ病理学・口腔病理学の知識やテキスト・参考書を駆使して異なる角度から病態を診る能力をつけること。提示した到達目標について、病理学の教科書及び文献等を用いてあらかじめ予習しておくこと。講義に際しては、参考となる本や講義中にインターネット接続が可能なパソコンやタブレット等の端末を持参すること。講義の疑問点等は自身において復習を行うとともに、指導教授に確認すること。
口腔病理学Ⅲ・Ⅳ	永山　元彦　教授	研究課題の実際と研究手法の知識を理解して未だに不明な口腔疾患の病態解明に迫る手法・課題点を把握し、積極的な熱心さを持って臨むこと。提示した到達目標について、病理学の教科書及び文献等を用いてあらかじめ予習しておくこと。講義に際しては、参考となる本や講義中にインターネット接続が可能なパソコンやタブレット等の端末を持参すること。講義の疑問点等は自身において復習を行うとともに、指導教授に確認すること。
口腔病理学実習 Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ	永山　元彦　教授	提示した到達目標について、病理学の教科書及び文献等を用いて予習しておくこと。口腔疾患の診断や治療で今後どのような診断方法や治療法が求められ、開発される必要があるのかを知り、これらの解明や開発のために必要な研究手法を理解しておくことが必要となる。細胞培養、動物実験、形態学的検索手法や分子生物学的手法など手技と理論を文献等を用いて予習しておくこと。実習に際しては、参考となる本や実習中にインターネット接続が可能なパソコンやタブレット等の端末あるいは実験ノートを持参すること。実習の疑問点等は自身において復習を行うとともに、指導教授に確認すること。

授業科目名	担当教員	履修に際しての準備学習（予習・復習）・注意事項等
歯科薬理学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ	佐藤慶太郎　教授	薬物療法学と薬物作用機序について、十分予習し、講義に臨むこと。また、講義に際しては分子生物学的な背景を理解し、薬物が生体に及ぼす影響の分子メカニズムを説明できる能力を身につけるよう努力しなければならない。最終的には到達目標の細胞機能と薬物による制御機構を分子レベルで理解できるよう講義に臨むことが必要である。講義終了後は、自身において復習を行い、とくにグッドマン・ギフマン薬理書を熟読し、薬理学を分子レベルで理解するよう努めること。講義の疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。
歯科薬理学実習 Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ	佐藤慶太郎　教授	薬物の種類と効果の判定方法、動物実験の歴史と新規薬物の創出、実験動物を利用した外分泌機能の評価、組織細胞を利用した平滑筋収縮機構の解析、薬物の動態と有害作用、パソコンを使用した薬物シミュレーション、論文のまとめ方、自己データに対する討論について十分に予習し、実習に臨むこと。また、実習で得られた結果を既知の研究報告と照らし合わせ整合性について十分検討する。実習終了後は到達目標である細胞の機能と薬物による制御機構を分子レベルで理解できるよう自身において復習を行い、講義の疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。
解剖学Ⅰ・Ⅱ	薗村　貴弘　教授	授業計画に従って、あらかじめテキスト参考書を読み、人体の頭頸部の肉眼解剖学的構造について、予習してから授業に参加すること。
解剖学Ⅲ・Ⅳ	薗村　貴弘　教授	授業計画に従って、あらかじめテキスト参考書を読み、中枢神経系について、予習してから授業に参加すること。
解剖学実習Ⅰ	薗村　貴弘　教授	配布された実習計画指針を、事前に熟読し、研究目的に合った実験動物の選択、試料の作製法について、予習してから実習に参加すること。
解剖学実習Ⅱ	薗村　貴弘　教授	あらかじめテキスト参考書を読み、研究目的に合った器機の使用方法について、予習してから実習に参加すること。
解剖学実習Ⅲ	薗村　貴弘　教授	実習計画に従って、あらかじめテキストを読み、予習してから実習に参加すること。テキスト及び参考書をよく読み、頭頸部を中心とする人体の構造について復習しておくこと。
解剖学実習Ⅳ	薗村　貴弘　教授	配布された実習指針を、事前に熟読してから、実習に参加すること。テキスト及び参考書を読み、細胞・組織について復習しておくこと。
口腔解剖学Ⅰ・Ⅱ	諏訪部　武　教授	あらかじめテキスト・参考書を読み、学部レベルの口腔解剖学、発生学、および口腔組織発生学の知識を持って講義に臨むこと。

授業科目名	担当教員	履修に際しての準備学習（予習・復習）・注意事項等
口腔解剖学Ⅲ・Ⅳ	諏訪部　武　教授	あらかじめテキスト・参考書を読み、学部レベルの口腔解剖学、口腔組織学と生理学・口腔生理学の知識を持って講義に臨むこと。
口腔解剖学実習 Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ	諏訪部　武　教授	講義を復習し、口腔解剖学・口腔組織学と生理学・口腔生理学の知識を持って実習に臨むこと。
口腔微生物学Ⅰ・Ⅱ 口腔微生物学Ⅲ・Ⅳ	引頭　毅 教授	授業計画に従って各講義内容を十分に予習した上で講義に臨むこと。また、講義終了後は自身において復習を行い、疑問点等は担当教員に確認し、解決すること。
口腔微生物学実習Ⅰ・Ⅱ 口腔微生物学実習Ⅲ・Ⅳ	引頭　毅 教授	授業計画に従って各実習内容を十分に予習した上で実習に臨むこと。また、実習終了後は自身において復習を行い、疑問点等は担当教員に確認し、解決すること。
歯科生体材料学Ⅰ・Ⅱ	澤田　智史　教授	明示している授業計画に沿った十分な予習のもとに講義に臨むこと。前学期では各種材料（金属・有機・無機）の基本的な構造と性質を理解し、後学期にはそれらの材料学的な評価方法素試験法を中心に学ぶ。資料はD2での歯科材料学・歯科理工学での配付資料と教科書のスタンダード歯科理工学の総論に記載されている範囲とする。受講後の理解度を深めるためにも見直しを含めた復習を行い、疑問と思われる点については指導教員に確認をとること。
歯科生体材料学Ⅲ・Ⅳ	澤田　智史　教授	明示している授業計画に沿った十分な予習のもとに講義に臨むこと。材料は有機・無機・金属に大別できるため、まず前学期ではそれらが関連している論文を選択し、焦点となっている研究項目から理解度を深めることを目的とする。また後学期では歯科材料を扱っている論文の内容について様々な評価を行っている論文からピックアップして、どのような材料にはどのような試験法が適しているかを、その評価法から学ぶ。資料はD2での歯科材料学・歯科理工学での配付資料と教科書のスタンダード歯科理工学の総論に記載されている範囲とする。受講後の理解度を深めるためにも見直しを含めた復習を行い、疑問と思われる点については指導教員に確認をとること。

授業科目名	担当教員	履修に際しての準備学習（予習・復習）・注意事項等
歯科生体材料学実習Ⅰ・Ⅱ	澤田　智史　教授	明示している授業計画に沿った十分な予習のもとに実習に臨むこと。ここでは材料の分析法を学ぶことを主眼とする。特に生体材料では表面の性状や構造が生体親和性の大きな要因となるためにしっかりと学ぶこと。前学期では結晶構造や表面の微細構造、内部に至る傾斜機能的あるいは均一構造であるかについて、各種分析装置を使って同定する。後学期では熱的性質、物質の構造を元素分析によって評価する手法などを学ぶ。受講後の理解度を深めるために適当な試料を用いた分析あるいは解析を伴う復習を行い、疑問と思われる点については指導教員に確認をとること。
歯科生体材料学実習Ⅲ・Ⅳ	澤田　智史　教授	明示している授業計画に沿った十分な予習のもとに実習に臨むこと。ここでは材料の分析法を学ぶことを主眼とする。生体材料では表面の性状や構造が生体親和性の大きな要因となるために表面の顕微鏡観察並びに極表面の微細構造と細胞増殖との相関性についても学び、細胞が好む表面あるいは組成があることを学ぶ。後学期では論文検索から生体材料の評価を行っている論文の輪読から一般的な手法を学ぶ。また、生体材料は圧縮とか引張などの画一的な応力ではなく、複雑な運動からの曲げ強さが重要な指標となるため、実際に各材料の計測を行う。受講後の理解度を深めるために教員とのディスカッションから材料評価の王道と慣れている手法を学び、かつ適当な試料を用いた試験による復習を行い、疑問と思われる点については指導教員に確認をとること。
構造形態学Ⅰ・Ⅱ	薗村　貴弘　教授	授業計画に従って、あらかじめテキスト参考書を読み、人体の頭頸部の肉眼解剖学的構造と中枢神経系について、予習してから授業に参加すること。
硬組織生物学Ⅰ・Ⅱ	諏訪部　武　教授	あらかじめテキスト・参考書を読み、学部レベルの口腔解剖学、発生学、および口腔組織発生学の知識を持って講義に臨むこと。
口腔機能学Ⅰ・Ⅱ	硲　哲崇　教授	学部レベルの生理学・口腔生理学の知識を持って受講することが望ましい。履修前に、指導教員と履修内容・履修方法について綿密な打ち合わせをすること。履修項目によっては、あらかじめ書籍や論文等の購読を指示することがあるので、指示に従うこと。履修内容に実技を伴う場合は、あらかじめ連絡するので持ち物等の指示を受けること。履修後に口頭試問を課す場合があるので、指示に従うこと。質問等は、随時受け付ける。
口腔分子医化学Ⅰ・Ⅱ	川木　晴美　教授	学部で学んだ講義内容を十分復習し、講義に臨むこと。また、講義終了後は、自身において復習を行い、講義の疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。

授業科目名	担当教員	履修に際しての準備学習（予習・復習）・注意事項等
病理学Ⅰ・Ⅱ	永山　元彦　教授	卒前に学んだ病理学・口腔病理学の知識を理解して未だに不明な口腔疾患の病態解明に迫る手法・課題点を把握し、積極的な熱心さを持って臨むこと。提示した到達目標について、病理学の教科書及び文献等を用いてあらかじめ予習しておくこと。講義に際しては、参考となる本や講義中にインターネット接続が可能なパソコンやタブレット等の端末を持参すること。講義の疑問点等は自身において復習を行うとともに、指導教授に確認すること。
感染免疫学Ⅰ・Ⅱ	引頭　毅 教授	授業計画に従って各講義内容を十分に予習した上で講義に臨むこと。また、講義終了後は自身において復習を行い、疑問点等は担当教員に確認し、解決すること。
組織再生制御学Ⅰ・Ⅱ	佐藤慶太郎　教授	組織構築の分子メカニズムと組織再生シグナルについて、十分に予習し、講義に臨むこと。また、組織再生を誘導する細胞成長因子や細胞接着因子の働きや受容体機能とシグナル伝達機構について深く理解できるよう学習する。更に、薬物によるシグナルの修飾機構や分子メカニズムについて予測や実証が可能な知識を身につけられるよう努力する。講義終了後は、自身において復習を行い、講義の疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。
細胞分子薬理学Ⅰ・Ⅱ	佐藤慶太郎　教授	細胞の種類と特徴及び機能調節薬物の機序について、十分に予習し、講義に臨むこと。また、薬物受容体の特性と発生するシグナルの関連を深く理解し、分子レベルでの知識を構築できるよう学習する。講義終了後は、自身において復習を行い、講義の疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。
口腔再建･再生材料学Ⅰ・Ⅱ	澤田　智史　教授	明示している授業計画に沿った十分な予習のもとに講義に臨むこと。大きな硬組織の実質欠損が生じた場合の材料での修復方法を学ぶために各材料の特性を学ぶ。前学期では金属・有機・無機材料の基本的な性質を学び、後学期ではそれらに適した材料の試験法から力学的特性を、細胞を応用した試験法から生物学的特性を学ぶ。後学期では前学期での内容を踏まえ、力学的・生物学的に生体材料の評価を実地で行うか、あるいは行っている論文の輪読から特徴を把握する。受講したのちの理解度を深めるためになるべく早期に復習を行い、疑問と思われる点については指導教員に確認をとること。
咀嚼機能制御材料評価学Ⅰ・Ⅱ	澤田　智史　教授	明示している授業計画に沿った十分な予習のもとに講義に臨むこと。咀嚼機能を回復あるいは制御するためには骨との相関性を評価する必要があるため、咀嚼に適した材料の生物学的応答と長期耐久性について学ぶ。特に耐久性については有限要素法から材料が持つ力学的特性と骨や歯の応答について学ぶ。後学期にはマイクロ CT を用いた骨の密度計測から、骨にも年齢があることを知り、加齢に応じた再建設計が必要であることを認識する。受講したのちの理解度を深めるために適当な試料を用いた試験による復習を行い、疑問と思われる点については指導教員に確認をとること。

授業科目名	担当教員	履修に際しての準備学習（予習・復習）・注意事項等
疫学Ⅰ・Ⅱ	友藤　孝明　教授	授業計画に記載されている内容について、予習してから、講義に臨むこと。また、講義で得た知識を自身で整理し、指導医への質問等を適時行って、不明な点をそのままにしないこと。
内科学Ⅰ・Ⅱ	八木　信明　教授	消化器疾患は医科の中でも大きな領域であり、最近は腸内細菌の面から、腸脳相関をはじめ、他分野との多岐にわたる関係性が重要視されている。当然口腔常在菌と腸内細菌と歯科疾患の関係は重要である。この最新分野に関して歯科的な立場から自由に発想し、予習復習をして自分の興味ある分野の一つにしていただきたい。別途、消化器内視鏡と AI の進歩についても講義したい。
外科学Ⅰ・Ⅱ	郭　　泰彦　教授	脳・神経系の構造と機能について、授業計画に沿って、充分に予習し講義に臨むこと。講義終了後には、中枢神経系疾患の成り立ちの概要と治療・予防について復習を行い、講義の疑問点等は指導教官に確認し、解決すること。
硬組織再建学Ⅰ・Ⅱ	河野　　哲　教授	歯学部教育と卒後研修教育において得た基礎並びに臨床の知識の再確認を行っておくこと。本課程では、最新の歯内療法を学ぶために、最新機器の特性と診断･治療への応用、生体材料を用いた歯髄や根尖歯周組織の再生メカニズムと実験手技についての事前の学習が必要である。そのため、内外の研究論文を良く理解し、知識を十分に得て、自身の研究テーマを決定し取り組むことが重要である。
歯周組織再建学Ⅰ・Ⅱ	辰巳　順一　教授	歯学部教育と卒後研修教育において得た基礎ならびに臨床知識の再確認を行っておくこと。授業計画に沿った講義内容について、十分学習し、講義に臨むこと。また、講義終了後は、自身において復習を行い、講義の疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。
口腔機能発育学Ⅰ・Ⅱ	齊藤　一誠　教授	授業計画に沿った講義内容について、十分予習し、講義に臨むこと。また、講義終了後は、自身において復習を行い、講義の疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。
咬合再生構築学Ⅰ・Ⅱ	（玉置　幸道　教授）	受動型の講義では無く、参加型の講義を企画している。多くの内容のある討議･議論のなかで互いに学んで行きたい。将来の良き研究者、臨床家のベースを作れることを希望します。授業計画に沿った講義内容について、十分予習し、講義に臨むこと。また、講義終了後は、自身において復習を行い、講義の疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。
咬合・口腔機能制御 ・再建学Ⅰ・Ⅱ	宇野　光乗　教授	毎回の講義内容については自らが文献検索などによる調査を行い、問題解決を心掛ける。不明な点については、担当教員に何がどう不明であるのかを具体的にして質問し、問題解決法を探ることを習慣とする。様々な症例で得た経験、文献検索を行い得られた知識を、症例の重要ポイントや関連研究テーマごとで文書データとしてまとめることを常とし、必要に応じて選択、抽出できるよう平素から習慣付けておく。臨床症例で経験した知識は常に整理し、各種学会等での発表に備える。こうして得られた知識と、他の研究者の考え方との相違点などを見出すことで新たな診断法や治療法を探求する。

授業科目名	担当教員	履修に際しての準備学習（予習・復習）・注意事項等
摂食嚥下機能回復学Ⅰ・Ⅱ	谷口　裕重　教授	以下、準備学習を推奨する。 ①授業内容を事前に把握し、授業計画に沿った内容を予習した上で講義に臨むこと。 ②講義終了後は自身で復習を行い、疑問点や自身の意見を整理し、指導医と議論した上で解決すること。
障害者歯科医学Ⅰ・Ⅱ	岩瀬　陽子　教授	事前に予習するとともに、終了後にはレポート作成を行うこと。授業計画に沿った講義内容について、十分予習し、講義に臨むこと。また、講義終了後は、自身において復習を行い、講義の疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。
生体組織再生学Ⅰ・Ⅱ	中本　哲自　教授	再生医療の基礎及び基礎実験に関する論文を検索し、判読しておくこと。教授要綱を参考に、軟組織、硬組織の再生に関する教科書、参考書を熟読し、理解すること。特に、最近の分県の検索し口腔インプラント治療における再生医療の現状を把握しておく。講義終了後は、自身において復習を行い、講義の疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。
顎顔面形態発育学Ⅰ・Ⅱ	北井　則行　教授	講義の前に、テキスト及び参考書を熟読し、各課題について十分に理解してから講義を受け、講義の後には、知識の整理と確認を行うことが望ましい。講義の前に、テキスト及び参考書を熟読し、各授業項目について十分に理解してから講義を受けること。講義の後には、知識の整理と確認のために、レポートを作成し提出すること。
基礎医療情報学Ⅰ・Ⅱ	飯田　幸弘　教授	履修科目の選択に際して、事前に必ず指導教授及び教員と相談すること。授業計画に沿った講義内容について、十分予習し、講義に臨むこと。また、講義終了後は、自身において復習を行い、講義の疑問点等は指導教授に確認し、解決すること。
機能性材料学Ⅰ・Ⅱ	奥山　克史　教授	2 学年より本教室の担当教員と連絡を密にし、機能性材料学Ⅰ・Ⅱを受講すること。授業計画に沿った講義内容について、とくに英語論文の文献検索を行い、最先端の研究動向について十分に予習し、講義に臨むこと。また講義終了後は、復習して疑問点等は指導教授に確認し、解決し、最先端の機能性修復材料の評価・検討方法を会得すること。
臨床義歯材料学Ⅰ・Ⅱ	（玉置　幸道　教授）	物理、化学、生物など高等学校程度の基礎知識が必要。また、文献などの検索を行い自主的学習習慣が必要となる。授業計画に沿った講義内容について、学部講義と歯科補綴学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳで習得した内容について確認を行い、臨床実習で得た歯科材料の取り扱い方法を確認し講義に臨むこと。また、歯科補綴学の専門医としての自覚を持って学習して欲しい。　疑問点等は文献検索をして自己解決を目指すと共に指導教授に確認し、解決すること。

○朝日大学大学院学則（昭和52年4月1日制定）

朝日大学大学院学則

昭和52年４月１日
制定

第１章　総則

（大学院の目的）

第１条　朝日大学大学院（以下「本大学院」という。）は、学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥をきわめて、文化の進展に寄与することを目的とする。

（研究科及び専攻並びに課程）

第２条　本大学院に、次の研究科及び専攻並びに課程を置く。

研　究　科・専　攻	課　程
経営学研究科　経 営 学 専 攻	修士課程
法学研究科　法　学　専　攻	修士課程
歯学研究科　歯　学　専　攻	博士課程（4年一貫制課程）

（教育研究上の目的等）

第３条　各研究科の人材養成に関する目的その他教育研究上の目的は、本大学院の使命・目的に基づき、次のとおりとする。

（１）　経営学研究科修士課程は、広い視野に立つて精深な学識を授け、経営学・情報学分野における研究能力又はこれに加えて高度の専門性が求められる職業を担うための卓越した能力を培うことを目的とする。

（２）　法学研究科修士課程は、広い視野に立つて精深な学識を授け、法学分野における研究能力又はこれに加えて高度の専門性が求められる職業を担うための卓越した能力を培うことを目的とする。

（３）　歯学研究科博士課程は、歯学分野について、研究者として自立して研究活動を行い、又はその他の高度に専門的な業務に従事するに必要な高度の研究能力及びその基礎となる豊かな学識を養うことを目的とする。

（自己点検・評価等）

第４条　本大学院は、その教育研究水準の向上を図り、前条の目的及び社会的使命を達成するため、本大学院における教育研究活動等の状況について自ら点検及び評価を行い、その結果を公表する。

２　前項の点検及び評価の結果並びに認証評価の結果を踏まえ、教育研究活動等について不断の見直しを行うことにより、その水準の向上を図ることに努める。

（標準修業年限）

第５条　経営学研究科及び法学研究科の修士課程の標準修業年限は、２年とする。

第６条　歯学研究科の博士課程の標準修業年限は、４年とする。

第７条　前２条の規定にかかわらず、第13条第３項の規定に基づき、長期にわたる教育課程の履修を認められた者（以下「長期履修学生」という。）は、当該許可された期間を標準修業年限とする。

第７条の２　標準修業年限に関し、その他必要な事項は別に定める。

（在学年限）

第８条　本大学院に在学することができる年限は、次のとおりとする。

修士課程　４年
博士課程（４年一貫制課程）　８年

２　長期履修学生の本大学院に在学することができる年限は、前項のとおりとする。

（収容定員）

第９条　本大学院の入学定員及び収容定員は、次のとおりとする。

経営学研究科　修士課程　入学定員　１０名　収容定員　２０名
法学研究科　修士課程　入学定員　１０名　収容定員　２０名

歯学研究科　　博士課程　　入学定員　１８名　　収容定員　７２名

第２章　入学資格

（入学資格）

第10条　修士課程に入学できる者は、次の各号の一に該当する者とする。

（１）　大学を卒業した者

（２）　独立行政法人大学改革支援・学位授与機構により学士の学位を授与された者

（３）　外国において、学校教育における16年の課程を修了した者

（４）　外国の学校が行う通信教育における授業科目を日本国において履修することにより当該外国の学校教育における16年の課程を修了した者

（５）　日本国において、外国の大学の課程（その修了者が当該外国の学校教育における16年の課程を修了したとされるものに限る。）を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって、文部科学大臣が別に指定するものの当該課程を修了した者

（６）　外国の大学その他の外国の学校（その教育研究活動等の総合的な状況について、当該外国の政府又は関係機関の認証を受けた者による評価を受けたもの又はこれに準ずるものとして文部科学大臣が別に指定するものに限る。）において、修業年限が３年以上である課程を修了することにより、学士の学位に相当する学位を授与された者

（７）　専修学校の専門課程（修業年限が４年以上であることその他の文部科学大臣が定める基準を満たすものに限る。）で文部科学大臣が別に指定するものを文部科学大臣が定める日以後に修了した者

（８）　文部科学大臣の指定した者

（９）　大学に３年以上在学した者（これに準ずる者として文部科学大臣が定める者を含む。）であって、本大学院の定める単位を優秀な成績で修得したと認めた者

(10)　本大学院において、個別の入学資格審査により、大学を卒業した者と同等以上の学力があると認めた者で、入学時において22歳に達したもの

(11)　その他本大学院において、大学を卒業した者と同等以上の学力があると認めた者

第11条　歯学研究科の博士課程に入学できる者は、次の各号の一に該当する者とする。

（１）　大学の歯学、医学、薬学（６年課程）又は獣医学に関する学科を卒業した者

（２）　外国において、学校教育における18年の課程（最終の課程は歯学、医学、薬学又は獣医学）を修了した者

（３）　日本国において、外国の大学の課程（その修了者が当該外国の学校教育における18年の課程（最終の課程は歯学、医学、薬学又は獣医学）を修了したとされるものに限る。）を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって、文部科学大臣が別に指定するものの当該課程を修了した者

（４）　外国の大学その他の外国の学校（その教育研究活動等の総合的な状況について、当該外国の政府又は関係機関の認証を受けた者による評価を受けたもの又はこれに準ずるものとして文部科学大臣が別に指定するものに限る。）において、修業年限が５年以上である課程を修了することにより、学士の学位に相当する学位を授与された者

（５）　文部科学大臣の指定した者

（６）　その他本大学院において、大学の歯学、医学、薬学（６年課程）又は獣医学に関する学科を卒業した者と同等以上の学力があると認めた者

（入学者の選抜）

第11条の２　本大学は、研究科ごとに定める入学者受入方針に基づき、入学者選抜試験を実施し、学長は当該研究科の研究科委員会の意見を聴いて、合格者を決定する。

（入学手続き及び入学の許可）

第11条の３　前条に基づき合格の通知を受けた者は、所定の期日までに、次の各号の書類を提出するとともに、第32条に定める入学金、第33条に定める学費及びその他の納付金を納付しなければならない。

（１）　住民票記載事項証明書（外国人は在留カード又は外国 人登録証明書）

（２）　所定の誓約書及び身元保証書

（３） 第10条又は第11条に定める入学資格を証明する書類
２　学長は、前項の入学手続きを完了した者に対し、入学を許可する。

第３章　教育方法

（授業及び研究指導）
第12条　本大学院の教育は、授業科目の授業及び学位論文の作成等に対する指導（以下「研究指導」という。）によって行うものとする。
２　本大学院は、教育上特別の必要があると認められる場合は、夜間その他特定の時間又は時期において授業又は研究指導を行うことができる。
（単位の算定）
第12条の２　各授業科目の単位数は、次の基準により算定するものとする。
（１） 講義及び演習については、15時間の授業をもって１単位とする。
（２） 実験、実習及び実技については、30時間から45時間の授業をもって１単位とする。
（３） 一の授業科目について、講義、演習、実験、実習又は実技のうち二以上の方法の併用により行う場合については、その組み合わせに応じ、前２号に規定する基準を考慮して各研究科細則に定める時間の授業をもって１単位とする。
（授業科目、単位数及び履修方法）
第13条　本大学院の各研究科における授業科目等及び単位数は、別表１、別表２及び別表３のとおりとする。
２　学生は、その在学期間中に、前項に定めるところにより当該研究科の授業科目を履修し、所定の単位を修得することとする。
３　学生が職業を有している等の事情により、第５条及び第６条に規定する標準修業年限を超えて一定の期間にわたり計画的に教育課程を履修し、課程を修了することを希望する旨を申し出たときは、学長はその計画的な履修を認めることができる。
４　前３項に定めるもののほか、授業科目の履修方法等は、各研究科細則に定めるところによる。
（入学前の既修得単位の認定）
第13条の２　本大学院は、教育上有益と認めるときは、学生が本大学院に入学する前に他の大学院（外国の大学院を含む。）において履修した授業科目について修得した単位（科目等履修生として修得した単位を含む。）を、本大学院に入学した後の本大学院における授業科目の履修により修得したものとみなすことができるものとする。
２　前項の規定により修得したものとみなすことができる単位数は、次条に定める他の大学院において修得した単位とは別に、15単位を超えない範囲でこれを第18条第１項及び第20条第１項に規定する単位に算入できるものとする。ただし、算入できる単位数は、次条に定める単位数と合わせて20単位を超えないものとする。
３　前２項に規定するもののほか、入学前の既修得単位の取扱いについては、各研究科細則に定めるところによる。

（他の大学院等における授業科目の履修）
第14条　本大学院は、教育上有益と認めるときは、学生が他の大学院（外国の大学院を含む。）の授業科目を履修することを当該大学院との事前協議の上、認めるものとする。
２　前項の規定により修得した単位は、各研究科細則に定めるところにより、15単位を超えない範囲で本大学院における授業科目の履修により修得したものとみなし、これを第18条第１項及び第20条第１項に規定する単位に算入できるものとする。ただし、算入できる単位数は、前条に定める単位数と合わせて20単位を超えないものとする。
３　前項の規定は、第28条の規定により学生が外国の大学院に留学する場合に準用する。この場合、本大学院において修得したものとみなすことができる単位数は、前項の単位数と合わせて15単位を超えないものとする。
（他の大学院等における研究指導）

第15条　本大学院は、教育研究上有益と認めるときは、学生が他の大学院又は研究所等（外国の大学院及び研究所等を含む。以下「大学院等」という。）において必要な研究指導を受けることを、当該大学院等との事前協議の上認めるものとする。
２　修士課程の学生が前項に規定する研究指導を受ける場合は、当該研究指導の期間は１年を超えないものとする。
第16条　教育方法に関し、その他必要な事項は別に定める。
（教職課程）
第17条　本大学院の研究科の専攻に、教育職員免許状（以下「免許状」という。）取得の所要資格を得させるための課程（以下「教職課程」という。）を置く。
２　本大学院で免許状取得の所要資格を得ることができる免許状の種類は、次のとおりとする。

経営学研究科	経営学専攻	高等学校教諭専修免許状（商業）
法学研究科	法学専攻	中学校教諭専修免許状　（社会）
		高等学校教諭専修免許状（公民）

３　当該免許状取得の所要資格を得ようとする学生は、それぞれの免許状の種類及び教科の一種免許状を有する者であって、教職課程において教育職員免許法及び同法施行規則に定めるところにより開設する授業科目を履修し、当該授業科目の単位を修得しなければならない。
４　前項に定める授業科目、単位数及び履修方法は、別表１及び別表２のとおりとする。
５　教職課程に関し、その他必要な事項は別に定める。

第４章　課程の修了

（修士課程の修了）
第18条　修士課程の修了の要件は、当該課程に２年以上在学し、第13条第１項に定める単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、修士論文（特定の課題についての研究成果を含む。）を提出してその審査及び最終試験に合格することとする。ただし、在学期間に関しては、優れた研究業績を上げた者については、当該課程に１年以上在学すれば足りるものとする。
２　第13条の２の規定により単位を修得したものとみなす場合であって、当該単位の修得により当該教育課程の一部を履修したと認めるときは、当該単位数やその修得に要した期間その他を勘案し、１年を超えない範囲で本大学院が定める期間在学したものとみなすことができる。ただし、この場合においても、少なくとも１年以上在学するものとする。
第19条　削除
（博士課程の修了）
第20条　歯学研究科の博士課程の修了の要件は、当該課程に４年以上在学し、第13条第１項に定める単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、博士論文を提出してその審査及び最終試験に合格することとする。ただし、在学期間に関しては、優れた研究業績を上げた者については、当該課程に３年以上在学すれば足りるものとする。
２　第13条の２の規定により単位を修得したものとみなす場合であって、当該単位の修得により当該教育課程の一部を履修したと認めるときは、当該単位数やその修得に要した期間その他を勘案し、１年を超えない範囲で本大学院が定める期間在学したものとみなすことができる。
第21条　長期履修学生の課程修了に必要な在学期間は、第18条及び第20条の規定にかかわらず、長期にわたる履修を許可された期間とする。
第21条の２　課程の修了に関し、その他必要な事項は各研究科細則に定める。

第５章　学位

（課程修了の認定）
第22条　第18条及び第20条に規定する修了の要件を満たした者に対し、学長は当該研究科の研究科委員会の意見を聴いて、課程修了を認定する。
（学位の授与）
第23条　本大学院の課程を修了した者に対し、学長は当該研究科の研究科委員会の意見を聴いて、朝

日大学学位規程（以下「学位規程」という。）に定める学位を授与する。
第24条　前条に定めるもののほか、博士の学位は、学位規則（昭和28年文部省令第９号）第４条第２項に基づき、本大学院に学位論文を提出し、本大学院の行う審査及び試験に合格し、かつ、本大学院の博士課程を修了した者と同等以上の学力があることを試問により確認された者に対し、学長は当該研究科の研究科委員会の意見を聴いて、授与することができる。
第25条　学位に関し、その他必要な事項は学位規程に定めるところによる。

第６章　教員組織

（教員組織）
第26条　本大学院には、研究科ごとに研究指導及び講義を担当することのできる資格を有する教育職員並びに研究指導の補助及び講義を担当することのできる資格を有する教育職員を置くものとする。
（研究科長）
第26条の２　各研究科に研究科長を置く。

第７章　入学、休学、転学、退学及び留学

（入学、休学、転学及び退学）
第27条　入学、休学、転学及び退学については、朝日大学学則（以下「本大学学則」という。）の規定を準用する。
２　前項の規定にかかわらず、入学の時期は各研究科の定めるところにより各学期の始めとすることができるものとする。
（留学）
第28条　本大学院は、教育上有益と認めるときは、学生が外国の大学の大学院に留学して、授業科目を履修し、単位を修得することができるものとする。
２　本大学院は、教育研究上有益と認めるときは、学生が外国の大学院等に留学して、必要な研究指導を受けることができるものとする。
３　前２項に規定する留学を希望する者は、学長の許可を得るものとする。
４　留学に関し、その他必要な事項は各研究科細則に定める。

第８章　学年、学期及び休業日

（学年、学期及び休業日）
第29条　学年、学期及び休業日については、本大学学則の規定を準用する。

第９章　懲戒

（懲戒）
第30条　学生の本分にふさわしくない行為を行った者があるときは、学長は懲戒する。
２　懲戒を分けて、戒告、停学及び退学の処分とする。
３　懲戒に関する手続きは、別に定める。
（退学の命令）
第30条の２　次の各号の一に該当する者があるときは、学長は退学を命ずることがある。
（１）　性行不良で改善の見込みがないと認められる者
（２）　学力劣等で成業の見込みがないと認められる者
（３）　正当の理由がなく出席が常でない者
（４）　学内の秩序を乱し、その他学生としての本分に反した者

第10章　学費

（入学検定料）
第31条　本大学院に入学を志願する者は、入学願書を提出する際に、別表４に規定する入学検定料を納付しなければならない。
（入学金）
第32条　入学許可を受けようとする者は、所定の期日までに別表４に規定する入学金を納付しなけれ

ばならない。
（授業料、実習費及び施設設備費）
第33条　学籍にある者は、別表４に規定する授業料、実習費及び施設設備費（以下「授業料等」という。）を納付するものとし、それぞれ年額とする。
２　長期履修学生の授業料等の年額は、前項の規定にかかわらず、同項に規定する授業料等の年額に第５条及び第６条に規定する標準修業年限を乗じて得た額を、許可された履修年数で除した額（その額に10円未満の端数があるときは、これを切り上げた額）とする。
３　各年度に係る授業料等は、前学期及び後学期の２期に分けて納付するものとし、前学期にあっては４月、後学期にあっては10月とする。この場合のそれぞれの期において納付する額は、年額の２分の１に相当する額とする。
４　前項の規定にかかわらず、前学期に係る授業料等を納付する際に、当該年度の後学期に係る授業料等を併せて納付することができるものとする。
５　前２項の規定にかかわらず、特別の事情がある場合は、学費支弁者の申し出に基づき月割分納を許可することとし、この場合の月割分納額は、授業料等の年額の12分の１に相当する額とする。
６　入学年度の前学期の授業料等については、第３項の規定にかかわらず、前項に定める場合を除き入学手続期間内に納付するものとする。
（休学の場合の授業料等）
第33条の２　休学を許可した場合は、授業料等の年額の12分の１に相当する額（円未満切り捨て）に、休学を許可された期間の月数（１か月に満たない日数は切り捨て）を乗じて得た額の納付を免除する。
２　休学を許可された者の納付済みの授業料等は返還しない。ただし、前学期分授業料等の納付の際、後学期分授業料等を併せて納付した者が、後学期分授業料等の納付時期前に休学した場合には、後学期分の授業料等に相当する額を免除するものとし、これを返還する。
３　前２項の規定にかかわらず、休学を許可された者は、別表４の定めるところにより在籍料を納付するものとする。ただし、休学期間が学期の途中から開始する場合には、在籍料の年額の12分の１に相当する額（円未満切り捨て）に、休学により授業料等の免除を受けた期間（既に納付済の授業料等がある場合には、その対象となる期間を除く）の月数を乗じて得た額とする。
（入学金及び授業料の減免）
第34条　入学金及び授業料の減免に関する事項については別に定める。
（除籍）
第35条　授業料等の納付を怠り、督促を受けてもなお納付しない者があるときは、学長は除籍することがある。
（復籍）
第35条の２　前条に該当し除籍となった者から、除籍の日の翌日から起算して２年以内に、当該除籍の事由となった未納の学費を納付して復籍の希望があったときは、学長は除籍前に在学した研究科の相当年次への復籍を許可することがある。
２　復籍の時期は、学年の始めとする。ただし、研究科によっては、学期の区分に従い、復籍することができる。
３　復籍を許可した学生の復籍後の在学期間は、除籍前の在学期間に通算する。
４　前条により除籍された者が、復籍後に同条の規定により再び除籍となったときは、その後の復籍は認めない。

第11章　科目等履修生、特別聴講学生、研究生、特別研究学生、委託生及び外国人留学生

（科目等履修生）
第36条　本大学院の学生以外の者で、本大学院の一又は複数の授業科目の履修を希望し、入学を志願するものがあるときは、選考の上、学長は科目等履修生として入学を許可することができる。
２　科目等履修生に関し、その他必要な事項は別に定める。
（特別聴講学生）
第36条の２　他の大学院（外国の大学院を含む。）に在学中の学生で、当該大学院との協議に基づき、本大学院の授業科目の履修を希望し、入学を志願する者があるときは、選考の上、学長は特別聴講

学生として入学を許可することができる。
２　特別聴講学生に関し、その他必要な事項は別に定める。
（研究生）
第37条　本大学院の学生以外の者で、本大学院において研究指導を受けるため、又は特別の事項について研究するため、入学を志願するものがあるときは、選考の上、学長は研究生として入学を許可することができる。
２　研究生に関し、その他必要な事項は別に定める。
（特別研究学生）
第37条の２　他の大学院（外国の大学院を含む。）に在学中の学生で、当該大学院との協定又は当該研究科との協議に基づき、本大学院において研究指導を受けるため、入学を志願する者があるときは、選考の上、学長は特別研究学生として入学を許可することができる。
２　特別研究学生に関し、その他必要な事項は別に定める。
（委託生）
第38条　国、地方公共団体、教育研究機関又は民間企業等からの委託に基づき、在学期間及び履修科目又は研究内容を定めて本大学院に入学を志願する者があるときは、選考の上、学長は委託生として入学を許可することができる。
２　委託生に関し、その他必要な事項は別に定める。
（外国人留学生）
第39条　日本の国籍を有しない者で、大学院において教育又は研究指導を受ける目的をもって入国し、本大学院に入学を志願するものがあるときは、選考の上、学長は当該研究科の研究科委員会の意見を聴いて、外国人留学生として入学を許可することができる。
２　外国人留学生に関し、その他必要な事項は別に定める。

第12章　運営組織

（研究科委員会）
第40条　本大学院の各研究科に研究科委員会を置く。
２　研究科委員会の組織及び運営に関し、必要な事項は別に定める。
（大学院委員会）
第41条　本大学院の各研究科に関する共通事項を協議するために大学院委員会を置く。
２　大学院委員会の組織及び運営に関し、必要な事項は別に定める。
３　大学院委員会に関し、その他必要な事項は別に定める。

第13章　研究指導施設及び厚生施設

（研究指導施設）
第42条　本大学院に、その目的達成のために大学院研究室を置く。
第43条　大学図書館及び学部附属の研究所等の施設は、必要に応じ大学院学生の研究指導等のために利用することができる。
（厚生施設）
第44条　本大学院学生は、本大学学生のための厚生保健施設を利用することができる。

第14章　定型約款

（定型約款）
第45条　この学則及び本大学院が定めるその他の諸規則（以下「学則等」という。）を、民法第３編第２章第１節第５款で定める定型約款とみなす。
２　前項の規定により定型約款とみなす学則等は、必要に応じて変更することができる。

第15章　雑則

第46条　この学則に定めるもののほか、本大学院に関し必要な事項は本大学学則の規定を準用する。

附　則（2023年１月26日）

１　この改正は、2023年４月１日から施行する。

２　2023年３月31日以前に入学し、引き続き在学している学生については、この改正により定められる別表３の規定にかかわらず、従前のとおりとする。

附　則(2023年３月16日)

この改正は、2023年４月１日から施行する。

別表3（第13条関係）

歯学研究科歯学専攻博士課程の授業科目及び単位数

区分				授業科目	単位数	備考
高度口腔医療科学	共通教育科目			歯科医学研究の基礎Ⅰ	2	（修了の要件） ○本表に定める授業科目の中から、次の（1）または（2）の要件に従い32単位以上取得 （1）高度口腔医療科学 共通教育科目　4単位 主専攻科目　24単位以上 副専攻科目　4単位 （2）口腔生命科学 共通教育科目　4単位 主専攻科目　24単位 副専攻科目　4単位 ○研究指導を受ける。 ○学位論文の審査及び最終試験に合格
				歯科医学研究の基礎Ⅱ	2	
	主専攻科目	再生医療系	歯周病学	歯周病学Ⅰ	2	
				歯周病学Ⅱ	2	
				歯周病学Ⅲ	2	
				歯周病学Ⅳ	2	
			インプラント学	インプラント学Ⅰ	2	
				インプラント学Ⅱ	2	
				インプラント学Ⅲ	2	
				インプラント学Ⅳ	2	
		再建医療系	口腔外科学	口腔外科学Ⅰ	2	
				口腔外科学Ⅱ	2	
				口腔外科学Ⅲ	2	
				口腔外科学Ⅳ	2	
			歯科放射線学	歯科放射線学Ⅰ	2	
				歯科放射線学Ⅱ	2	
				歯科放射線学Ⅲ	2	
				歯科放射線学Ⅳ	2	
		機能発達制御系	小児歯科学	小児歯科学Ⅰ	2	
				小児歯科学Ⅱ	2	
				小児歯科学Ⅲ	2	
				小児歯科学Ⅳ	2	
			歯科矯正学	歯科矯正学Ⅰ	2	
				歯科矯正学Ⅱ	2	
				歯科矯正学Ⅲ	2	
				歯科矯正学Ⅳ	2	
			障害者歯科学	障害者歯科学Ⅰ	2	
				障害者歯科学Ⅱ	2	
				障害者歯科学Ⅲ	2	
				障害者歯科学Ⅳ	2	
		保健医療系	社会口腔保健学	社会口腔保健学Ⅰ	2	
				社会口腔保健学Ⅱ	2	
				社会口腔保健学Ⅲ	2	
				社会口腔保健学Ⅳ	2	

区分			授業科目		単位数	備考
高度口腔医療科学	主専攻科目	機能回復制御系	歯科保存学	歯科保存学Ⅰ	2	
				歯科保存学Ⅱ	2	
				歯科保存学Ⅲ	2	
				歯科保存学Ⅳ	2	
			歯科補綴学	歯科補綴学Ⅰ	2	
				歯科補綴学Ⅱ	2	
				歯科補綴学Ⅲ	2	
				歯科補綴学Ⅳ	2	
			高齢者歯科学	高齢者歯科学Ⅰ	2	
				高齢者歯科学Ⅱ	2	
				高齢者歯科学Ⅲ	2	
				高齢者歯科学Ⅳ	2	
			摂食嚥下リハビリテーション学	摂食嚥下リハビリテーション学Ⅰ	2	
				摂食嚥下リハビリテーション学Ⅱ	2	
				摂食嚥下リハビリテーション学Ⅲ	2	
				摂食嚥下リハビリテーション学Ⅳ	2	
			歯科麻酔学	歯科麻酔学Ⅰ	2	
				歯科麻酔学Ⅱ	2	
				歯科麻酔学Ⅲ	2	
				歯科麻酔学Ⅳ	2	
		臨床実習		臨床実習Ⅰ	4	
				臨床実習Ⅱ	4	
				臨床実習Ⅲ	4	
				臨床実習Ⅳ	4	
				臨床実習Ⅴ	4	
				臨床実習Ⅵ	4	
				臨床実習Ⅶ	4	
				臨床実習Ⅷ	4	
	副専攻科目		構造形態学	構造形態学Ⅰ	2	
				構造形態学Ⅱ	2	
			硬組織生物学	硬組織生物学Ⅰ	2	
				硬組織生物学Ⅱ	2	
			口腔機能学	口腔機能学Ⅰ	2	
				口腔機能学Ⅱ	2	
			口腔分子医化学	口腔分子医化学Ⅰ	2	
				口腔分子医化学Ⅱ	2	
			病理学	病理学Ⅰ	2	
				病理学Ⅱ	2	
			免疫病理学	免疫病理学Ⅰ	2	
				免疫病理学Ⅱ	2	

区分			授業科目		単位数	備考
高度口腔医療科学	副専攻科目		感染免疫学	感染免疫学 I	2	
				感染免疫学 II	2	
			組織再生制御学	組織再生制御学 I	2	
				組織再生制御学 II	2	
			細胞分子薬理学	細胞分子薬理学 I	2	
				細胞分子薬理学 II	2	
			口腔再建・再生材料学	口腔再建・再生材料学 I	2	
				口腔再建・再生材料学 II	2	
			咀嚼機能制御材料評価学	咀嚼機能制御材料評価学 I	2	
				咀嚼機能制御材料評価学 II	2	
			疫学	疫学 I	2	
				疫学 II	2	
			内科学	内科学 I	2	
				内科学 II	2	
			外科学	外科学 I	2	
				外科学 II	2	
口腔生命科学	共通教育科目		歯科医学研究の基礎	歯科医学研究の基礎 I	2	
				歯科医学研究の基礎 II	2	
	主専攻科目	機能基礎系	口腔生理学	口腔生理学 I	4	
				口腔生理学 II	4	
				口腔生理学 III	4	
				口腔生理学 IV	4	
				口腔生理学実習 I	2	
				口腔生理学実習 II	2	
				口腔生理学実習 III	2	
				口腔生理学実習 IV	2	
			口腔生化学	口腔生化学 I	4	
				口腔生化学 II	4	
				口腔生化学 III	4	
				口腔生化学 IV	4	
				口腔生化学実習 I	2	
				口腔生化学実習 II	2	
				口腔生化学実習 III	2	
				口腔生化学実習 IV	2	

区分			授業科目		単位数	備考
口腔生命科学	主専攻科目	機能基礎系	口腔病理学	口腔病理学Ⅰ	4	
				口腔病理学Ⅱ	4	
				口腔病理学Ⅲ	4	
				口腔病理学Ⅳ	4	
				口腔病理学実習Ⅰ	2	
				口腔病理学実習Ⅱ	2	
				口腔病理学実習Ⅲ	2	
				口腔病理学実習Ⅳ	2	
			口腔免疫学	口腔免疫学Ⅰ	4	
				口腔免疫学Ⅱ	4	
				口腔免疫学Ⅲ	4	
				口腔免疫学Ⅳ	4	
				口腔免疫学実習Ⅰ	2	
				口腔免疫学実習Ⅱ	2	
				口腔免疫学実習Ⅲ	2	
				口腔免疫学実習Ⅳ	2	
			歯科薬理学	歯科薬理学Ⅰ	4	
				歯科薬理学Ⅱ	4	
				歯科薬理学Ⅲ	4	
				歯科薬理学Ⅳ	4	
				歯科薬理学実習Ⅰ	2	
				歯科薬理学実習Ⅱ	2	
				歯科薬理学実習Ⅲ	2	
				歯科薬理学実習Ⅳ	2	
		形態基礎系	解剖学	解剖学Ⅰ	4	
				解剖学Ⅱ	4	
				解剖学Ⅲ	4	
				解剖学Ⅳ	4	
				解剖学実習Ⅰ	2	
				解剖学実習Ⅱ	2	
				解剖学実習Ⅲ	2	
				解剖学実習Ⅳ	2	
			口腔解剖学	口腔解剖学Ⅰ	4	
				口腔解剖学Ⅱ	4	
				口腔解剖学Ⅲ	4	
				口腔解剖学Ⅳ	4	
				口腔解剖学実習Ⅰ	2	
				口腔解剖学実習Ⅱ	2	
				口腔解剖学実習Ⅲ	2	
				口腔解剖学実習Ⅳ	2	

区分			授業科目		単位数	備考
口腔生命科学	主専攻科目	形態基礎系	口腔微生物学	口腔微生物学Ⅰ	4	
				口腔微生物学Ⅱ	4	
				口腔微生物学Ⅲ	4	
				口腔微生物学Ⅳ	4	
				口腔微生物学実習Ⅰ	2	
				口腔微生物学実習Ⅱ	2	
				口腔微生物学実習Ⅲ	2	
				口腔微生物学実習Ⅳ	2	
		生体材料系	歯科生体材料学	歯科生体材料学Ⅰ	4	
				歯科生体材料学Ⅱ	4	
				歯科生体材料学Ⅲ	4	
				歯科生体材料学Ⅳ	4	
				歯科生体材料学実習Ⅰ	2	
				歯科生体材料学実習Ⅱ	2	
				歯科生体材料学実習Ⅲ	2	
				歯科生体材料学実習Ⅳ	2	
	副専攻科目		硬組織再建学	硬組織再建学Ⅰ	2	
				硬組織再建学Ⅱ	2	
			歯髄生物学	歯髄生物学Ⅰ	2	
				歯髄生物学Ⅱ	2	
			歯周組織再建学	歯周組織再建学Ⅰ	2	
				歯周組織再建学Ⅱ	2	
			口腔機能発育学	口腔機能発育学Ⅰ	2	
				口腔機能発育学Ⅱ	2	
			咬合再生構築学	咬合再生構築学Ⅰ	2	
				咬合再生構築学Ⅱ	2	
			咬合・口腔機能制御・再建学	咬合・口腔機能制御・再建学Ⅰ	2	
				咬合・口腔機能制御・再建学Ⅱ	2	
			顎・口腔機能再建学	顎・口腔機能再建学Ⅰ	2	
				顎・口腔機能再建学Ⅱ	2	
			口腔・顎顔面再建学	口腔・顎顔面再建学Ⅰ	2	
				口腔・顎顔面再建学Ⅱ	2	
			老年歯科医学	老年歯科医学Ⅰ	2	
				老年歯科医学Ⅱ	2	
			摂食嚥下機能回復学	摂食嚥下機能回復学Ⅰ	2	
				摂食嚥下機能回復学Ⅱ	2	

区　分		授　業　科　目		単位数	備　　考
口腔生命科学	副専攻科目	障害者歯科医学	障害者歯科医学Ⅰ	2	
			障害者歯科医学Ⅱ	2	
		生体組織再生学	生体組織再生学Ⅰ	2	
			生体組織再生学Ⅱ	2	
		顎顔面形態発育学	顎顔面形態発育学Ⅰ	2	
			顎顔面形態発育学Ⅱ	2	
		基礎医療情報学	基礎医療情報学Ⅰ	2	
			基礎医療情報学Ⅱ	2	
		呼吸・循環学	呼吸・循環学Ⅰ	2	
			呼吸・循環学Ⅱ	2	
		歯科医療管理学	歯科医療管理学Ⅰ	2	
			歯科医療管理学Ⅱ	2	
		機能性材料学	機能性材料学Ⅰ	2	
			機能性材料学Ⅱ	2	
		歯科保存修復材料学	歯科保存修復材料学Ⅰ	2	
			歯科保存修復材料学Ⅱ	2	
		臨床義歯材料学	臨床義歯材料学Ⅰ	2	
			臨床義歯材料学Ⅱ	2	
		先端生体材料応用学	先端生体材料応用学Ⅰ	2	
			先端生体材料応用学Ⅱ	2	
		臨床実習	臨床実習　Ⅰ	4	
			臨床実習　Ⅱ	4	
			臨床実習　Ⅲ	4	
			臨床実習　Ⅳ	4	

別表4（第31条、第32条及び第33条関係）

1　入学検定料

（単位　円）

区　　分		入学検定料	備　　考
経営学研究科	修士課程	30,000	科目等履修生については、5,000円とする。
法学研究科	修士課程	20,000	
歯学研究科	博士課程	20,000	

2 学費

（単位　円）

区　　分			入学金	授業料	実習費	施設設備費	備　　考
経営学研究科	修士課程		200,000	600,000		150,000	
法学研究科	修士課程		200,000	600,000			
歯学研究科	博士課程	高度口腔医療科学	200,000	750,000	50,000		
		口腔生命科学	200,000	750,000			
経営学研究科研究生			100,000	200,000			授業料は半期（前学期又は後学期）の研究期間の場合、年額の1/2相当額とする。
法学研究科研究生			100,000	150,000			
科目等履修生			10,000	10,000			授業料は1単位あたりの金額とする。

3 在籍料

在籍料	年額100,000円	休学期間が半期（前学期又は後学期）の場合は年額の2分の1に相当する額とする。

○朝日大学大学院歯学研究科細則（平成9年4月1日制定）

朝日大学大学院歯学研究科細則

（目的）

第１条　この細則は、朝日大学大学院歯学研究科(以下「本研究科」という。)に関する事項について、朝日大学大学院学則(以下「学則」という。)及び朝日大学学位規程(以下「学位規程」という。)に基づき、その実施に関し必要な事項を定めることを目的とする。

（入学時期）

第２条　本研究科の入学の時期は、各学期の始めとする。

（学、専攻科目及び指導教員）

第３条　学生は、進路目標に応じて専攻する学を一つ選択し、選択した学により定められる方法に従い単位を修得し、研究指導及び論文指導を受ける。

２　学生は、選択した学において開講される主専攻科目及び副専攻科目を各１科目選択し、主専攻科目の担当の教員を指導教員とする。

３　学生は、指導教員の指導の下で研究に従事し、学位論文を作成しなければならない。ただし、学位論文の作成については、指導教員の指導を受けて、副専攻科目の担当の教員の指導を受けることができる。

（授業科目の開講方法）

第４条　博士課程の修了のために必要な講義、臨床実習及び実習は、１年次及び２年次に開講する。

２　前項のほか、より高度な臨床知識及び技能の教授、或いは臨床を通じた研究指導のため、高度口腔医療科学では臨床実習Ⅴ～Ⅷを、口腔生命科学では臨床実習Ⅰ～Ⅳをそれぞれ３年次及び４年次において開講する。なお、学生がこれらを履修し修得した単位については修了要件単位数には参入しない。

３　高度口腔医療科学の主専攻科目については、講義と実習を併用した授業を行うことができる。

４　前３項の規定にかかわらず､第６条の規定により長期にわたる教育課程の履修を許可された者(以下「長期履修学生」という。）に対しては、許可された履修計画に基づき開講する。

（履修方法）

第５条　学生は、学則第13条別表３に基づき、次の各号のいずれかにより32単位以上修得しなければならない。

（１）　高度口腔医療科学

・共通教育科目４単位

・主専攻科目の中から１科目を選択し、講義８単位並びに臨床実習16単位以上（臨床実習Ⅰ～Ⅷのうち Ⅰ～Ⅳは必修）、計24単位以上

・副専攻科目１科目４単位

（２）　口腔生命科学

・共通教育科目４単位

・主専攻科目の中から１科目を選択し、講義16単位並びに実習８単位、計24単位

・副専攻科目１科目４単位（臨床実習以外の科目から選択）

２　副専攻科目の選択に際しては、指導教員の指導を受けなければならない。

３　年間の履修単位数は、20単位を上限とする。

４　学生は、３年次から、研究に従事し、論文指導を受ける。

５　長期履修学生は、第１項及び前項の規定にかかわらず、許可された履修計画に基づき履修する。

（長期履修学生）

第６条　学則第13条第３項に基づき、長期にわたる教育課程の履修を希望する者は、次に掲げる書類により本研究科への出願時又は入学後２年未満に申し出るものとする。

（１）　長期履修許可願

（２）　在職証明書又は就業が確認できる書類（該当する者のみ）

（３）　その他学長が必要と認める書類

２　前項により申し出があった場合は、学長がこれを認めることができることとし、当該学生を長期履修学生という。許可する期間は、６年ないし７年(既に在学した期間を含む。)とする。
３　長期履修学生から､履修期間の短縮の申し出があった場合は､学長がこれを認めることができる。この場合の短縮できる期間は、年を単位とする。ただし、課程修了に必要な在学期間は、通算して学則第６条に規定する標準修業年限以上でなければならない。
４　前項の規定により短縮を認められた後は、再度長期履修に変更することはできない。
（履修科目の登録）
第７条　学生は、履修する全ての科目について、指導教員の承認を得て、毎年度履修の登録をしなければならない。
（単位の算定）
第８条　各授業科目の単位数は次の基準により計算する。
（１）　講義については、15時間の授業をもって１単位とする。
（２）　臨床実習及び実習については、45時間の授業をもって１単位とする。
（３）　一の授業科目について、講義、演習、実験、実習又は実技のうち二以上の方法の併用により行う場合については、その組み合わせに応じ、前２号に規定する基準を考慮して委員会が定める時間の授業をもって１単位とする。
２　委員会が認めた特別講義、学外研修及び学外実習等については、指導教員が認めた場合に限り、申請に基づき前項の授業時間数に加えることができる。
（単位の授与）
第９条　授業科目を履修した学生に対しては、試験を行った上で、第11条の規定に基づき成績評価を行い、単位を与える。ただし、学修の成果を評価して単位を授与することが適切であると認められる授業科目については、当該成果を評価して単位を与えることができる。
（試験）
第10条　前条の試験は、それぞれ授業科目担当教員（以下「担当教員」という。）が受講修了と認めた学生に対し筆記試験、口頭試験及び研究報告等担当教員が定めた方法により行う。
２　前項に定めるもののほか、必要に応じ外国語試験を実施し、実施方法、合否判定基準は、別に定める。
（成績評価）
第11条　履修した授業科目の成績評価は、試験の成績、平素の学修成績等を総合して行うものとし、あらかじめ学生に対して公表する。
２　前項の成績評価は100点満点とし、優（100～80点）、良（79～70点）、可（69～60点）、不可（59点以下）の４種とし、優、良、可を合格とし、不可を不合格とする。
（学位申請の要件）
第12条　学位規程第７条に規定する博士（歯学）の学位（以下「課程博士」という。）を申請できる者は、学則第６条及び第７条に規定する標準修業年限在学し、学則第13条第１項に規定する単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた者とする。
２　前条に定める要件を満たした上で、退学した者は、退学してから２年以内に限り、課程博士の学位論文を提出することができる。
３　学位規程第７条の２に規定する者が、本研究科に学位論文を提出する場合の取扱いについては別に定める。
（学位の申請）
第13条　学位の申請に必要な書類及び提出部数は、学位規程第７条、第７条の２及び第７条の３第１項の規定に基づき、次の各号に定める。
（１）　学位申請書　１通
（２）　学位論文　30通
（３）　参考論文　各３通
（４）　論文目録　30通
（５）　論文内容の要旨（2000字以内）　30通
（６）　履歴書　１通

２　課程博士の申請をしようとする者は、指導教員の承認を得て別に定める期日までに必要書類を提出しなければならない。
３　学位論文の形式は、製本又は簡易製本し、表紙に題目及び氏名を記載する。
（学位論文）
第14条　学位論文は、その内容が歯学研究科発表会で学位請求論文として発表されたもので、かつ、２年以内のものを原則とする。
２　前項の学位論文は、単著で印刷公表されていないものでなければならない。ただし、共著論文又は、すでに印刷公表された論文についても別に定める条件を満たしている場合は、受理することができる。
（学位論文の審査及び試験結果等の報告書）
第15条　学位規程第13条第３項に定める報告書の提出部数は、次のとおりとする。
（１）　学位論文の内容の要旨　30通
（２）　学位論文の審査の要旨　30通
（３）　最終試験の結果の要旨　30通
（４）　学力確認の結果の要旨　30通
（学長への報告様式）
第16条　学位規程第14条に規定する学長への報告に必要な書類の様式は、別に定める。
（入学前の既修得単位の認定）
第17条　学則第13条の２に規定する入学前の既修得単位(以下「既修得単位」という。)の認定は、学生の本研究科志望の目的及び主専攻等を勘案した上、教育上有益と認めるものについて、学長が行うことができる。
２　既修得単位の認定は、同単位に係る授業科目の内容及び単位数が本研究科における授業科目の履修により修得したものとみなすことができるものについて､15単位を限度として行うことができる。ただし、次条に定める単位数と合わせて20単位を超えないものとする。
３　前項に定める単位の認定を申請しようとする者は、履修届の提出期日までに必要な書類を提出しなければならない。
４　学則第20条２項に規定する在学期間の短縮に係る取扱いに関しては、研究科委員会において定める。
（他の大学院において修得した単位の認定）
第18条　学則第14条に規定する他の大学院において修得した単位の認定は、学生の主専攻及び単位の修得状況等を勘案した上、教育上有益と認めるものについて、学長が行うことができる。
２　他の大学院において修得した単位の認定は、同単位に係る授業科目の内容及び単位数が本研究科における授業科目の履修により修得したものとみなすことができるものについて、15単位を限度として行うことができるものとする。ただし、前条に定める単位数と合わせて20単位を超えないものとする。
３　前項に定める単位の認定を申請しようとする者は、履修届の提出期日までに必要な書類を提出しなければならない。
（改正）
第19条　この規程の改正は、理事会が学長の意見を聴いて行う。
（雑則）
第20条　この細則に定めるもののほか、必要な事項は別に定める。

附　則（2020年12月23日）
この改正は、2021年４月1日から施行する。

朝日大学大学院歯学研究科論文博士学位論文取扱内規

（目的）

第１条　この内規は、朝日大学大学院歯学研究科細則（以下「細則」という。）第 12 条第３項の規定に基づき、朝日大学大学院歯学研究科（以下「本研究科」という。）に学位論文を提出する者の取扱いについて定めることを目的とする。

（学位申請資格）

第２条　朝日大学学位規程第７条の２に規定する博士（歯学）の学位（以下「論文博士」という。）を申請できる者は、大学、大学院又はこれと同等以上の研究機関において、５年以上の研究歴を有する者とする。

（研究歴）

第３条　前条に定める研究歴とは、次の各号のいずれかに該当するものとする。

（１）　大学の専任教員として研究に従事した期間

（２）　大学院に在学し研究に従事した期間

（３）　公知の研究機関において専任研究員として研究に従事した期間

（４）　本委員会が前３号と同等以上と認める身分及び研究機関で研究に従事した期間

（学位の申請）

第４条　学位の申請に必要な書類及び提出部数は、細則第 13 条第１項の規定に定めるものを含め、次に各号に定めるものとする。

（１）　学位申請書　１通

（２）　学位論文　30 通

（３）　参考論文　各３通

（４）　論文目録　30 通

（５）　論文内容の要旨（2000 字以内）　30 通

（６）　履歴書　１通

（７）　研究歴証明書　１通

（８）　卒業証明書　１通

（９）　紹介状　１通

２　学位論文の形式は、製本又は簡易製本し、表紙に題目及び氏名を記載するものとする。

（学力の確認）

第５条　朝日大学学位規程第 12 条に規定する学力の確認のうち外国語試験については、本研究科が行う外国語試験をもってこれに充てることができる。

２　前項の規定にかかわらず、本研究科を退学してから２年以上経過した者のうち、学長が研究科長の意見を聴き認めた者に限り、外国語試験を免除することができる。

（準用規定）

第６条　この内規に定めるもののほか、学位論文の取扱いに関し必要な事項は、細則の規定を準用する。

外国人の論文博士学位論文取扱内規

（目的）

1　この内規は、学位取得を希望する海外在住の外国人の学位申請について、論文博士学位論文取扱内規に定めるもののほか、必要事項を定める。

（予備審査に必要な書類）

2　学位申請者は、学位論文提出日の６カ月前までに、あらかじめ本大学院の紹介教授へ次の各号に掲げる書類を提出するものとする。

（1）　タイプされた学位論文　１通

（2）　参考論文　各１通

（3）　履歴書　１通

（4）　研究歴証明書　１通

（予備審査の手続）

3　紹介教授は、前項各号の書類・内容を検討のうえ、大学院歯学研究科運営委員会に提出し、予備審査を受けるものとする。

（学位論文審査手数料）

4　学位論文審査手数料は、朝日大学学位規程第７条第１項の規定による。ただし、為替レート等特殊事情がある場合は、調整することがある。

（学位論文の発表）

5　学位申請者は、岐阜歯科学会において日本語、又は英語で学位論文を発表しなければならない。

（学位論文の審査）

6　学位論文の審査は、原則として岐阜歯科学会で発表後１週間以内に行うものとする。

（書類の作成）

7　学位申請書類は、原則として日本語、又は英語で作成することとする。

ASAHI UNIVERSITY GRADUA